鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（100）

一一般国道269号西原バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

野里小西遺跡（のざとこにしいせき）

（鹿児島県鹿屋市今坂町）

2006年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（100）　野里小西遺跡　二〇〇六年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

序　　文

この報告書は，一般国道269号西原バイパス建設事業に伴って，平成12年度から平成15年度にかけて実施した野里小西遺跡の発掘調査の記録です。

この遺跡は，鹿屋市の旧海軍鹿屋基地（現在の海上自衛隊鹿屋航空基地）の西側の地に所在します。

今回の調査では，縄文時代早期と近代の遺構・遺物が発見されました。縄文時代では早期中頃の土器・石器とともに多くの集石遺構などが発見され，縄文時代遺跡の少ない大隅半島中央部における生活跡をたどるのに貴重な資料となりました。当地方では近年，この時期の集石遺構が各地で発見され，その位置づけが注目されています。土器の細分化とともに今後の研究課題となる興味ある発見です。また，５か所以上で発見された第２次世界大戦時の爆弾破裂跡は飛行場近くに位置するこの一帯における当時の悲惨さを生々しく伝えてくれました。

本報告書が県民の皆様はじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たりご協力いただいた県土木部道路建設課，鹿屋市教育委員会，関係各機関並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申しあげます。

平成18年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　　長　　上　今　常　雄

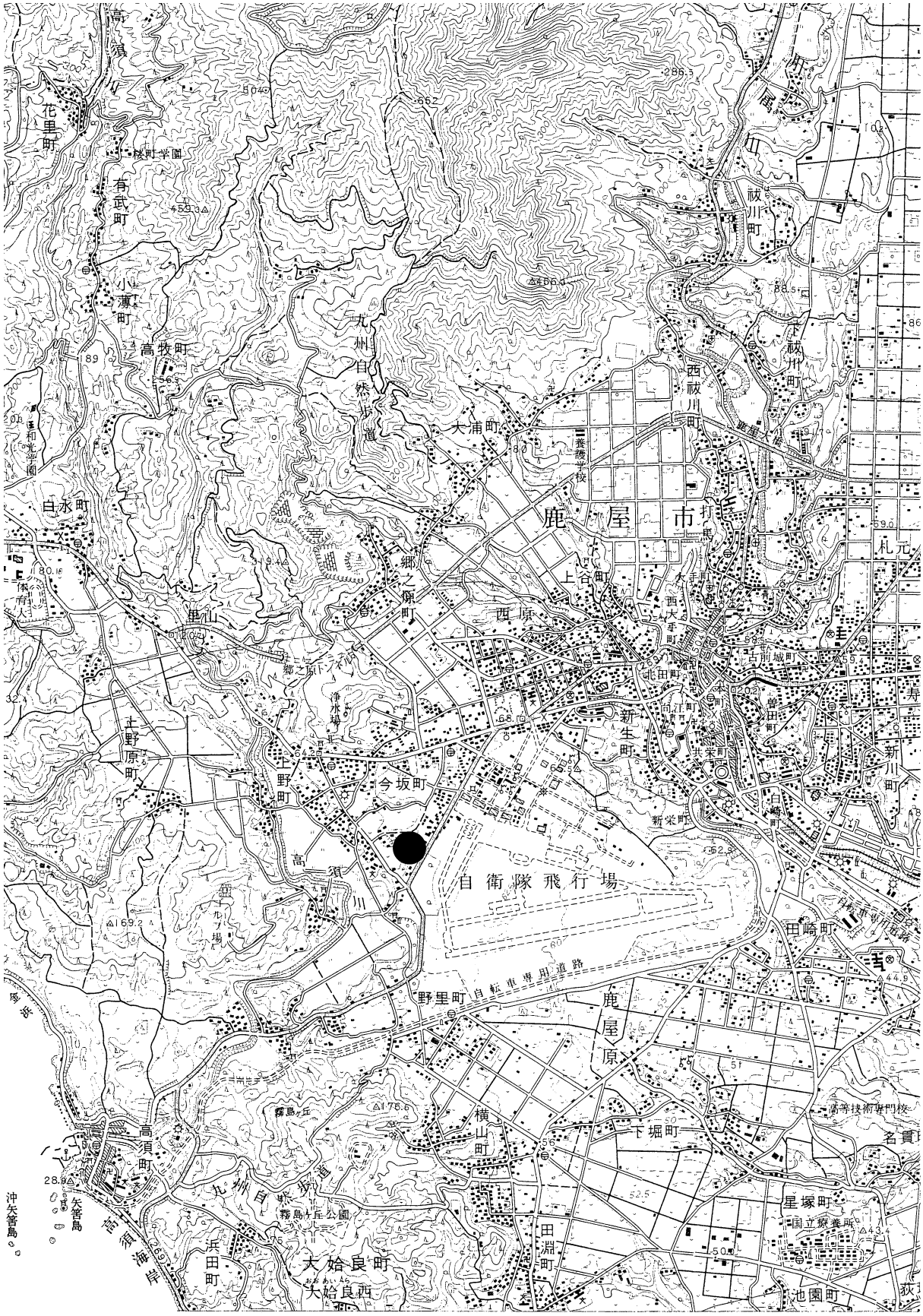
報　告　書　抄　録

ふりがな	のざとこにしいせき
書名	野里小西遺跡
副書名	一般国道269号西原バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	100
編集者名	池畑　耕一・黒川　忠広・鶴田　静彦
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　℡ 0995－48－5811
発行年月日	西暦2006年　３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
野里小西遺跡 （のざとこにしいせき）	鹿児島県鹿屋市 （かごしまけんかのやし） 今坂町 （いまさかちょう）	46203	12－74	31度 22分 10秒	130度 49分 30秒	20000508 ～ 20000804	本調査 2,800	一般国道269号 西原バイパス建設
						20031208 ～ 20040305	本調査 2,800	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野里小西遺跡	集落跡	縄文時代早期 近代	集石遺構 15基 配石遺構 １基 爆弾破裂跡 ５か所 溝状遺構 １条	石坂式土器・下剥峯式土器・桑ノ丸式土器・中原式土器・押型文土器・塞ノ神式土器・打製石鏃・スクレイパー・磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石・石皿・礫器・剥片・チップ 土管	調査後の遺跡は調査範囲については消滅。調査地点の周辺については遺跡が残存している。

要約	一般国道改良工事に伴い調査された当遺跡は，シラス台地上に営まれた縄文時代早期の集落である。主となるのは早期中頃の石坂式土器で，この時期の集石遺構が15基，石鏃製作跡が１基発見されている。土器には吉田式土器，下剥峯式土器などもあり，石器には打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・石皿などが出土している。また，第２次世界大戦時のものと思われる爆弾破裂跡が５か所発見された。


高須
花里町
有武町
小薄町
高牧町
白水町
里山
上野原町
上野町
今坂町
高須川
九州自然歩道
大浦町
鄉之原町
西原
上谷町
鹿屋市
西祓川町
祓川町
祓川町
西大手町
北田町
新生町
新栄町
白崎町
新川町
田崎町
自衛隊飛行場
野里町
自転車専用道路
鹿屋原
横山町
下堀町
高須町
高須海岸
沖矢筈島
矢筈島
浜田町
大姶良町
大姶良西
田淵町
星塚町
国立療養所
池園町
高等技術専門校
名貫
札元
鹿屋大橋
養護学校
和光学園
桜町学園
浄水場
霧島ヶ丘公園

遺跡位置図

例　　言

1　本報告書は一般国道269号西原バイパス建設事業に伴う野里小西遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，鹿児島県土木部道路建設課（鹿屋土木事務所道路建設課）から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。整理作業および報告書作成は，平成16・17年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて実施した。

3　発掘調査については，鹿児島県土木部道路建設課（鹿屋土木事務所）や鹿屋市教育委員会の協力を得た。

4　野里小西遺跡は台地の西端にあり，南北に長い遺跡である。今回は道路部分のみの調査のため途中に谷がはいり，広く間が離れてしまったため２回に分けて調査した。調査時点では同一遺跡として扱ったが，この報告書では便宜上，南側を第１地点，北側を第２地点として扱った。

5　遺物番号は通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号はすべて一致する。石器については番号の前にＳを付した。

6　挿図の縮尺は各図面に示した。

7　本書で用いた地形図・断面図のレベル数値はすべて海抜高である。

8　発掘調査における図面の作成及び写真の撮影は発掘調査担当者が行った。

9　遺構実測図の浄書及び出土遺物の実測・浄書は整理作業員の協力を得て整理担当者が行った。出土遺物の写真撮影は西園勝彦が担当した。

10　本書の執筆及び編集は池畑耕一・黒川忠広・鶴田靜彦が担当した。縄文土器（Ⅳ・Ⅴの第２章第２節１，Ⅵの第１章）を黒川が，その他を池畑が執筆し，図版の遺構編集は鶴田が担当した。

11　出土した遺物は，県立埋蔵文化財センターが一括して保管し，展示・活用する予定である。なお，野里小西遺跡の遺物注記の略号は「ノザト」である。

目　　次

序文
報告書抄録
例言
目次

Ⅰ　発掘調査の経緯 …… 1
　第１章　調査に至るまでと，その後の経過 …… 1
　第２章　調査の組織 …… 1
　第３章　調査の経過 …… 2
　第４章　第２地点の確認調査概要 …… 5

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 6
　第１章　地理的・地質的環境 …… 6
　第２章　歴史的環境 …… 6

Ⅲ　地層 …… 10

Ⅳ　第１地点 …… 11
　第１章　発掘調査の概要 …… 11
　第２章　縄文時代 …… 12
　　第１節　遺構 …… 12
　　第２節　遺物 …… 19
　第３章　近代 …… 40

Ⅴ　第２地点 …… 43
　第１章　発掘調査の概要 …… 43
　第２章　縄文時代 …… 44
　　第１節　遺構 …… 44
　　第２節　遺物 …… 48
　第３章　近代 …… 55

Ⅵ　まとめ …… 57
　第１章　縄文時代早期の土器 …… 57
　第２章　鹿屋の戦跡遺構 …… 58

挿　図　目　次

第１図　調査地点配置図 …… 5
第２図　周辺の遺跡分布図 …… 8
第３図　基本地層図 …… 10
第４図　第１地点の全体図 …… 11
第５図　第１地点の縄文時代遺構配置図 …… 12
第６図　第１地点の集石遺構１号・３号と出土遺物 …… 13
第７図　第１地点の集石遺構２号と出土土器 …… 14
第８図　第１地点の集石遺構４号・５号と出土遺物 …… 15
第９図　第１地点の集石遺構６号・７号と出土土器 …… 17
第10図　第１地点の集石遺構８号・９号と出土土器 …… 18
第11図　第１地点の配石遺構と出土土器 …… 19
第12図　第１地点の縄文土器⑴ …… 22
第13図　第１地点の縄文土器⑵ …… 23
第14図　第１地点の縄文土器⑶ …… 24
第15図　第１地点の縄文土器⑷ …… 25
第16図　第１地点の縄文土器⑸ …… 26
第17図　第１地点の縄文土器⑹ …… 27
第18図　第１地点の縄文土器⑺ …… 28
第19図　第１地点の縄文土器⑻ …… 29
第20図　第１地点の縄文土器⑼ …… 30
第21図　第１地点の縄文土器⑽ …… 31
第22図　第１地点の石器⑴石鏃 …… 35
第23図　第１地点の石器⑵石鏃・スクレイパー …… 36
第24図　第１地点の石器⑶スクレイパー・石斧・磨石 …… 38
第25図　第１地点の石器⑷磨石・敲石・石皿 …… 39
第26図　第１地点の爆弾破裂跡⑴ …… 41
第27図　第１地点の爆弾破裂跡⑵ …… 42
第28図　第２地点の全体図 …… 43
第29図　第２地点の縄文時代遺構配置図 …… 44
第30図　第２地点の集石遺構７号 …… 45
第31図　第２地点の集石遺構１号～３号と出土石器 …… 46
第32図　第２地点の集石遺構４号～６号と出土土器 …… 47
第33図　第２地点の縄文土器⑴ …… 49
第34図　第２地点の縄文土器⑵ …… 50
第35図　第２地点の石器⑴ …… 51
第36図　第２地点の石器⑵スクレイパー・礫器 …… 53
第37図　第２地点の石器⑶磨石・石皿 …… 54
第38図　近代の溝状遺構と土管（第２地点）…… 56

表　目　次

第１表　周辺の遺跡地名表 …… 9
第２表　第１地点の縄文土器観察表⑴ … 32
第３表　第１地点の縄文土器観察表⑵ … 33
第４表　第１地点の縄文土器観察表⑶ … 34
第５表　第１地点の石器観察表 …… 37
第６表　第２地点の縄文土器観察表⑴ … 48
第７表　第２地点の縄文土器観察表⑵ … 51
第８表　第２地点の石器観察表 …… 55

図　版　目　次

図版１　集石遺構検出風景と配石遺構（第１地点）
図版２　集石遺構（第１地点）
図版３　爆弾破裂跡（第１地点）
図版４　第１地点出土の縄文土器
図版５　第１地点出土の縄文土器
図版６　遺跡近景（第２地点）
図版７　集石遺構（第２地点）
図版８　爆弾破裂跡と溝状遺構（第２地点）
図版９　第２地点出土の縄文土器
図版10　石器

Ⅰ　発掘調査の経緯

第１章　調査に至るまでと，その後の経過

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無およびその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，鹿児島県土木部道路建設課（鹿屋土木事務所道路建設課，以下，県土木部）は，「一般国道269号西原バイパス建設事業」の計画に基づく鹿屋市今坂町での道路建設に先立って，対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下，文化財課）に照会した。

この結果，事業区間内には周知の遺跡である野里小西遺跡が所在することが判明し，埋蔵文化財の取り扱いについて県土木部・文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）の三者で協議が重ねられた。これを受けて，平成11年10月４日に文化財課が試掘調査を実施した結果，縄文時代早期の遺物包含層が存在することが判明した。そこで，県土木部・文化課・埋文センターの三者で再度協議を行い，当事業区内においては現状保存や設計変更が不可能なことから，平成12年５月８日から平成12年８月４日までの期間で鹿屋市今坂町9972番地外の2,800㎡を対象に本発掘調査を実施した。

さらに，その北側について平成14年９月10日から11月12日までの期間で，調査対象面積3,000㎡を鹿屋市教育委員会が確認調査した結果，前回の調査区の谷を挟んだ北側に縄文時代早期の遺物包含層が約2,800㎡に広がることを確認した。これを受けて平成15年12月８日から平成16年３月５日までの期間で埋文センターが本発掘調査を実施した。

報告書作成作業は平成16年度は年度末の平成17年２・３月に図面整理や，遺物の水洗い，注記，分類などを行った。平成17年度は他の整理作業と並行して行い，主体的には10月以降に接合・分類・実測・拓本・トレース・レイアウト・原稿執筆・写真撮影などを行い，１月に印刷所へ発注し，３月刊行となった。

第２章　調査の組織

確認・本調査（平成12・15年度），整理・報告書作成（平成16・17年度）

起因事業主体者　鹿児島県土木部道路建設課（鹿屋土木事務所道路建設課）

調査・作成主体者　鹿児島県教育委員会

調査・作成企画調整　鹿児島県教育庁文化財課

調査・作成責任者	県立埋蔵文化財センター	所長	井上　明文（H12）
	〃	〃	木原　俊孝（H15･H16）
	〃	〃	上今　常雄（H17）
調査・作成企画者	〃	次長兼総務課長	黒木　友幸（H12）
	〃	〃	田中　文雄（H15）
	〃	〃	賞雅　　彰（H16）

調査・作成企画者	県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	有川　昭人(H17)
	〃	次長兼調査第一課長	新東　晃一(H17)
	〃	調　査　課　長	新東　晃一(H12･15･16)
	〃	調査課長補佐	立神　次郎(H12･15･16)
	〃	主任文化財主事兼第一調査係長	青崎　和憲(H12)
	〃	〃	池畑　耕一(H15～17)
	〃	主任文化財主事	中村　耕治(H12･15～17)
調査・作成担当者	〃	主任文化財主事兼第一調査係長	池畑　耕一(H17)
	〃	文化財主事	鶴田　靜彦(H12)
	〃	〃	松尾　　勉(H15)
	〃	〃	湯之前　尚(H16)
	〃	〃	山崎　克之(H16)
	〃	文化財研究員	山崎　省一(H12)
	〃	〃	西村　喜一(H12)
	〃	〃	川元　禎久(H15)
事務担当者	〃	総　務　係　長	有村　　貢(H12)
	〃	〃	平野　浩二(H15･16)
	〃	主幹兼総務係長	平野　浩二(H17)
	〃	主　　事	溜池　圭子(H12)
	〃	〃	福山恵一郎(H15～17)
企画委員	〃	主任文化財主事	中村　耕治(H16･17)
〃	〃	文化財主事	鶴田　靜彦(H16･17)
報告書作成検討委員会	平成18年１月24日	所長ほか　９名	
報告書作成指導委員会	平成18年１月20日	次長ほか　２名	

第３章　調査の経過

平成11年10月４日（月）に第１地点の試掘調査が，平成12年５月８日～８月４日に第１地点の本調査，平成12年10月５日（木）に第１地点と第２地点の間の試掘調査，平成14年９月10日～11月12日に第２地点の確認調査，平成15年12月８日～平成16年３月５日に第２地点の本調査が行われた。第２地点の確認調査については，第４章で紹介し，本調査については以下，日誌抄をもって調査の経過を略記する。

１　第１地点の調査経過（平成12年度：のべ50日）

○５月８日（月）～12日（金）

８日から表土剥ぎを開始する。発掘機材・備品等搬入。９日から作業員を入れての調査開始。オリエンテーションのあと，周辺の環境整備。Ⅵ層の掘り下げ。12日に爆弾破裂跡検出。

○５月15日（月）～19日（金）

爆弾破裂跡処理のため，鹿屋土木・鹿屋市防災課・鹿屋警察署と協議（15日）。佐賀陸上自衛隊

から安全であるとの解答が得られ，掘り下げ，写真撮影，実測。６～10－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層の掘り下げ。
18日にグリッド設定。
○５月22日（月）～26日（金）
爆弾破裂跡の掘り下げ，写真撮影，実測。６～10－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層の掘り下げ。
５月の来訪者：鹿屋土木事務所　大園勉係長・松園幸洋土木技師ほか
○６月１日（木）・２日（金）
爆弾破裂跡の掘り下げ，写真撮影，実測。６～10－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層の掘り下げ。
○６月５日（月）～９日（金）
６～10－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層掘り下げ。断面図作成。遺物取り上げ。集石検出。
○６月12日（月）～６月16日（金）
６～10－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層掘り下げ。集石の検出，写真撮影，実測。土坑の掘り下げ，実測。
○６月19日（月）～23日（金）
６～10－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層掘り下げ，遺物取り上げ。集石の検出，写真撮影，実測。５基となる。
長研生（財部町教委梅木康氏，輝北町教委前田和信氏）現場研修（７月７日まで）
○６月26日（月）～28日（水）
６～10－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層・Ⅶ層掘り下げ，遺物取り上げ。集石４号・５号実測。配石遺構掘り下げ。
集石６号～８号検出。
○７月３日（月）～７日（金）
１～５－Ｃ・Ｄ区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。途中でトレンチ調査に変える。５－Ａ～Ｄ区トレンチでⅥ・Ⅶ層掘り下げ。Ｄ区東壁実測。集石６号～８号写真撮影・実測。配石遺構実測。
○７月10日（月）～14日（金）
５－Ａ～Ｆ区トレンチのⅥ・Ⅶ層掘り下げ。10・11－Ｃ・Ｄ区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。遺物取り上げ。集石９号検出・掘り下げ・写真撮影・実測。
野里小学校発掘体験（11日：６年生，12日：２年生，13日：２年生，14日：１年生）
○７月17日（月）～21日（金）
５－Ｅ・Ｆ区トレンチ掘り下げ。12－Ｃ～Ｅ区掘り下げ。11・12－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層掘り下げ。
集石９号実測。
○７月25日（火）～27日（木）
雨のため作業中止。27日午前中に台風対策。
○８月１日（火）～４日（金）
11・12－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層掘り下げ。４日に発掘機材をセンターへ運ぶ。調査完了。

２　第２地点の調査経過（平成15年度：のべ47日）

○12月８日（月）～12日（金）
発掘機材の搬入。作業員へのオリエンテーション。環境整備。
９日から掘り下げ。１～６－Ｂ～Ｄ区のⅥ層掘り下げ。グリッド杭打ち。
来訪者：鹿屋土木事務所　有野氏
○12月15日（月）～19日（金）

１～６－Ｂ～Ｄ区のⅥ層掘り下げ，Ⅶ層上面検出，遺物出土状況実測。

９～12－Ｃ・Ｄ区，重機により表土剥ぎ。

○１月６日（火）～９日（金）

１～６－Ｂ～Ｄ区のⅥ層およびⅦ層掘り下げ，遺物出土状況実測。５Ｃ区で集石検出，写真撮影・実測。１～４区地層実測。９～12－Ｃ・Ｄ区，重機により表土剥ぎ。

○１月13日（火）～16日（金）

１～６－Ｃ・Ｄ区のⅦ層掘り下げ。３Ｃ区・４Ｄ区で土坑検出。８～12－Ｃ・Ｄ区のⅥ層掘り下げ。12Ｃ区で集石検出。２・３－Ｃ・Ｄ区の遺物出土状況実測。６－Ｃ～Ｄ区北壁，５～６Ｄ区東壁地層実測。土坑・集石の写真撮影。集石２号の実測。

14日　黒川忠広，15・16日　藤﨑光洋発掘支援。15日　安全パトロール。

○１月19日（月）～23日（金）

７～12－Ｃ・Ｄ区のⅥ層掘り下げ。10Ｄ区下層確認トレンチ掘り下げ。19－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層掘り下げ。土坑１・２掘り下げ。集石２，土坑１・２，9～12－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層遺物出土状況，12－Ｃ・Ｄ区北壁実測。土坑１・２，爆弾破裂跡写真撮影。14～18－Ｃ・Ｄ区重機により表土剥ぎ。

○１月26日（月）～28日（水）

７・８－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層掘り下げ。13～17－Ｂ～Ｄ区Ⅵ層掘り下げ。10Ｄ区下層確認トレンチ掘り下げ。19－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層掘り下げ。７・８－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層，19－Ｂ・Ｃ区遺物出土状況実測。７Ｄ区で集石検出。７・８－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層遺物出土状況，集石３写真撮影。

14～17－Ｃ・Ｄ区重機により表土剥ぎ。

１月の来訪者：県立青少年研修センター　寺師孝則研修主事，鹿屋土木事務所　有川氏

○２月３日（火）～６日（金）

７・８－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層，13～15－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層掘り下げ。７・８－Ｃ・Ｄ区東壁，集石３，７～９－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層遺物出土状況実測。集石３写真撮影。

来訪者：吉永和人文化財課長，倉元良文埋蔵文化財係長

○２月９日（月）～13日（金）

７～９－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層，13～15－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層・Ⅶ層掘り下げ。15Ｄ区で集石２基検出。

集石４・5，6～８－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層遺物出土状況実測。集石４・５写真撮影。

○２月16日（月）～20日（金）

７～９－Ｃ・Ｄ区の石片ブロック，15～17－Ｃ・Ｄ区Ⅵ層掘り下げ。16Ｄ区で集石検出。

集石４・６，７～９－Ｃ・Ｄ区石片ブロック，13～15－Ｃ・Ｄ区遺物出土状況，８－Ｃ・Ｄ区砲台関係の通路，戦時中の壕実測。８・９－Ｃ・Ｄ区遺物出土状況，集石６写真撮影。

○２月23日（月）～25日（水）

７～９－Ｃ・Ｄ区の石片ブロック，12・13－Ｃ区Ⅵ層，15～19－Ｃ・Ｄ区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。７・８－Ｃ・Ｄ区の石片ブロック，15～17－Ｃ・Ｄ区遺物出土状況実測。

12・13－Ｃ区の拡張部分を重機で表土剥ぎ。

○３月１日（月）～５日（金）

７－Ｃ・Ｄ区Ⅶ層，８－Ｃ区の壕，12・13－Ｃ区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。６～８－Ｃ・Ｄ区Ⅵ・Ⅶ層，

12・13－Ｃ区Ⅵ層の遺物出土状況，戦時中の壕など，８Ｄ区の地層実測。

１日：８Ｃ・Ｄ区の埋め戻しシラスから44㎜口径の砲弾出土。鹿屋警察署黒川氏へ引き渡し。

４日：鹿屋土木事務所有野氏へ引き渡し。５日：周辺清掃。発掘機材搬出。田中次長終了挨拶。

第４章　第２地点の確認調査概要

第２地点の確認調査は平成14年９月10日から11月12日まで鹿屋市教育委員会によって行われ，その結果は平成15年３月に『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書』71として刊行されている。ここではその概要を記し，集石遺構については本文中で扱うこととする。

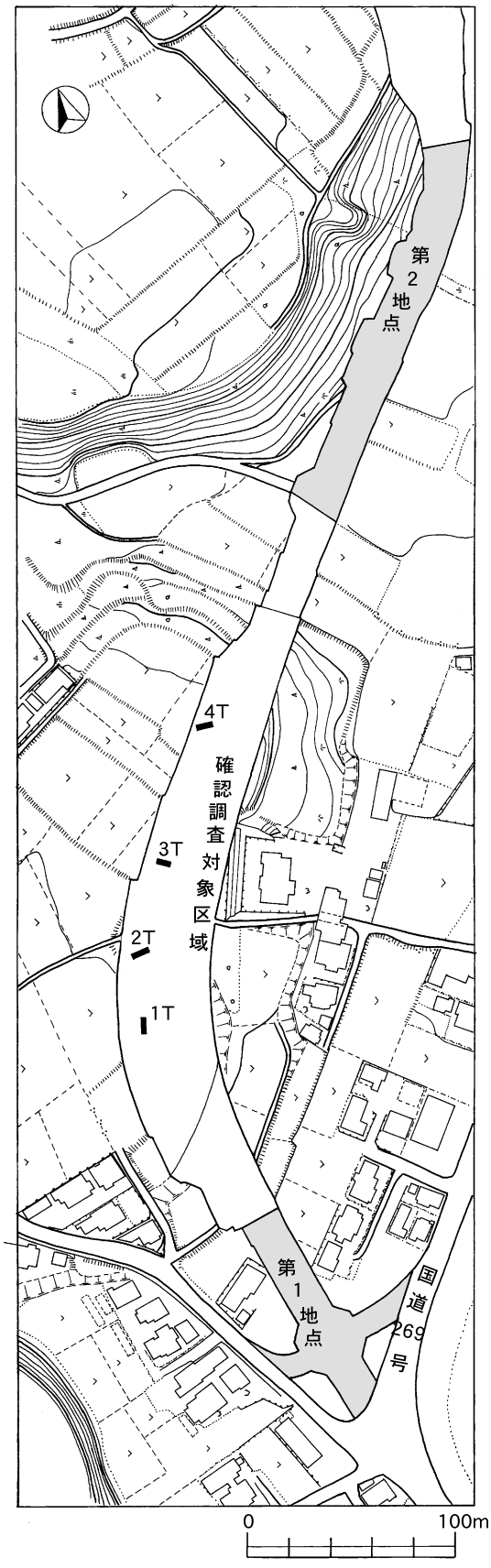
調査は９月10日（火）から11月12日（火）まで，社会教育課文化係の山口俊博主任主事，内久保博樹主事補，池袋文哉文化財調査員を調査担当者として行われた。

調査対象面積は約3,000㎡で，２ｍ×４ｍのトレンチを９か所に設定し，調査区の状況によって，一部拡張した。調査総面積は113.5㎡である。トレンチ配置は第28図のとおりである。調査の結果は以下の通りである。

トレンチ	遺　構	遺　　物
1	なし	なし
2	砲弾跡	縄文土器片3，機銃弾1，磁器片等２
3	砲弾跡	鉄片
4	ピット７	縄文土器片15，石皿１
5	なし	敲石1，石皿１
6	集石遺構	なし
7	ピット11	縄文土器片1，敲石１
8	ピット５	縄文土器片1，石器１
9	ピット１	遺物１

２・３トレンチでは第２次世界大戦時の空襲を受けた痕跡がみられた。４・７・８・９トレンチではピットがみられたが，規則性はみられず，性格は不明だとされている。６トレンチの集石遺構は縄文時代早期のものである。出土した縄文土器はいずれも早期のもので，前平式土器・吉田式土器・石坂式土器がある。

参考文献：山口・内久保・池袋『野里小西遺跡』（『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書』71）2003年３月　鹿屋市教育委員会



第１図　調査地点配置図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

第１章　地理的・地質的環境

野里小西遺跡は鹿児島県鹿屋市今坂町に所在する。隣接地には海上自衛隊鹿屋航空基地があり，鹿屋市街地の周辺地にあたるため，今日では宅地化が進みつつある。

鹿児島県は西側に薩摩半島，東側に大隅半島が南に延びている。鹿屋市は東側の大隅半島のほぼ中央部に位置し，大隅地方の政治・経済・文化の中心地としての機能を果たしている。北は霧島市，東は曽於郡大崎町・志布志市・肝属郡肝付町，南は肝属郡錦江町に，北西部は高隈山系を境として垂水市に接しており，西側は鹿児島湾に面している。

鹿屋市の北西部には大篦柄岳（1236.8m）を中心とする1000m級の山が連なる高隈山系があり，峻険な地形を呈している。この山系は砂質岩・泥質岩・花崗岩から成っている。西南部には安山岩，溶結凝灰岩から成る700～800m級の肝属山系が連なっている。その間には鹿児島湾奥の姶良カルデラから約24,000年前に噴出したといわれる入戸火砕流（シラス）の堆積によりできた標高50～150mの広大な笠野原台地が形成されている。シラスは一般的には貯水性に乏しく生産性の低い土壌であるが，昭和42年に北部の高隈山麓に高隈ダムが完成したことにより台地上への給水が始まり畑地として開発が進み，サツマイモや落花生などの産地として知られるようになった。また，水道施設や道路などの開発によって台地上に住宅も建ち並ぶようになっている。

高隈山系にその源を発する肝属川はこの笠野原台地を浸食しながら谷底平野を形成し，市の中心部を南へ流れ，市街地近くで東へ方向を変え，県内ではもっとも広い肝属平野を形成しながら志布志湾の南端で海へ流出している。また，鹿屋市の西側には肝属川と同様高隈山系に源を発する高須川がほぼ南へ流れ，高須付近で鹿児島湾に注いでいる。

遺跡のある今坂町は，市街中心部から西へ約５㎞離れており，笠野原台地の西端近くに当たる。西側には南西側からはいり込んだ谷があり，その中央部を高須川が南へ下降しながら蛇行し流れ，まわりには狭い水田がある。北側は高隈山地から延びた丘陵があり，南側も霧島ヶ丘などの山がふさいでいる。台地の標高は60～75mで，畑となっているが，近年は宅地化が進み住宅・工場などが建並んでいる。谷へはゆるやかに下降し林になっているが，ここに多くの防空壕が存在している。

第２章　歴史的環境

鹿屋市内（旧）の遺跡の数は，昭和50年には18か所であったが，分布調査やバイパスなどの建設に伴う発掘調査が行われたために，現在では約250か所を数えるほどに増えている。これらのなかには西丸尾遺跡や王子遺跡などのように全国的に注目された貴重な発見があったものも少なくない。

旧石器時代の遺構・遺物が西丸尾遺跡，榎崎Ａ・Ｂ遺跡などで多量に発見された。

ナイフ形石器文化期では西丸尾遺跡でブロック７か所と礫群５基が発見され，ナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器などが出土している。細石刃文化期では西丸尾遺跡でブロック２か所と礫群４基が発見され，細石刃核などとともに局部磨製石斧も出土している。榎崎Ｂ遺跡でも礫群９基とピット群が，榎崎Ａ遺跡ではブロックが３か所と礫群１基が発見され，水晶製の野岳型細石刃核や砂岩製の畦原型細石刃核などが出土した。根木原遺跡では旧石器時代終末期から縄文時代草創期の

ものと思われる落し穴12基が発見されている。

縄文時代の遺跡は市内各地で多く発見されており，各時期にわたっている。

草創期の遺跡としては西丸尾遺跡・伊敷遺跡などがある。西丸尾遺跡では墓の可能性もある配石遺構と，礫群２基が発見され，無文土器・石錐・礫器・敲石などが出土した。伊敷遺跡では隆帯文土器と磨製石斧が出土している。早期になると数が増えるとともに遺跡も広がりをみせる。前畑遺跡・榎崎Ａ遺跡・飯盛ヶ岡遺跡・打馬平原遺跡・岩之上遺跡など多くの遺跡がある。飯盛ヶ岡遺跡では126基の，榎崎Ａ遺跡では21基の，榎崎Ｂ遺跡では35基の集石遺構が発見されている。飯盛ヶ岡遺跡では石斧・スクレイパー５本，磨石４個のデポ遺構２基も検出されている。打馬平原遺跡では環状石斧やトロトロ石器・装身具も出土している。

前期の遺跡も多く神野牧遺跡や榎木原遺跡などで，轟式土器や曽畑式土器・深浦式土器などが出土し，集石遺構も発見されている。中期の遺跡は多くないが，榎木原遺跡では在地系の春日式土器と瀬戸内系の船元式土器が出土しており，根木原遺跡では多量の春日式土器が出土している。

後期の遺跡は多く，榎田下・榎木原・鎮守ヶ迫などの遺跡で岩崎上層式土器・指宿式土器・市来式土器などが出土し，鎮守ヶ迫遺跡では東九州系の綾式土器も出土している。晩期には榎崎Ｂ・飯盛ヶ岡などの遺跡で上加世田式土器・黒川式土器が，榎木原遺跡で入佐式土器・黒川式土器・夜臼式土器が出土している。榎崎Ｂ遺跡では集石２基と土坑51基が検出され，扁平打製石斧も多く出土している。榎木原遺跡でも打製石斧が多量に出土しており，農耕の崩芽がうかがえる。

弥生時代になっても遺跡は台地上に位置することが多い。前期の遺跡はほとんどないが，中期になると遺跡数が多くなり，多くの住居からなる集落も出てくる。王子遺跡・中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡・前畑遺跡・中原山野遺跡・飯盛ヶ岡遺跡などがそれで，これらの遺跡では掘立柱建物跡や高坏形土器など南九州ではあまりみられない瀬戸内系の遺構・遺物が発見されている。

王子遺跡では竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑を有する掘立柱建物などが発見され，土器には矢羽根すかしを有する高坏形土器や凹線文のある壺形土器なども出土している。中ノ丸遺跡・前畑遺跡では竪穴住居跡・掘立柱建物跡・円形周溝等が発見され，中ノ丸遺跡では磨製石鏃や土製勾玉なども出ている。中ノ原遺跡でも竪穴住居跡が発見され，うち１軒は焼失家屋であった。後期には遺跡数が減る。鎮守ヶ迫遺跡などが知られるくらいである。

古墳時代の志布志湾岸では多くの高塚古墳や地下式横穴墓が発見されているが，肝属川上流に位置する鹿屋市はその西端域にあたる。高塚古墳は今のところ発見されていないが，胃や短甲の出土した祓川遺跡の近くでは20基以上の地下式横穴墓群が発見されている。また，根木原遺跡では土坑墓２基が発見され，鉄剣などが出土している。この時期の土器は各地で発見されているが，性格のはっきりした遺跡は少ない。根木原遺跡では数十軒の竪穴住居跡が発見されており，連綿と続く集落群である。早山遺跡や榎木原遺跡でも竪穴住居跡が見つかっていることから，鹿児島湾沿いに多くの集落があるものと思われる。榎木原遺跡では高坏を利用したふいごの羽口も出土している。

古代・中世の遺跡は多いが，詳細のわかる遺跡が少ない。江戸時代に栄えた古江港の上の台地にある宮の脇遺跡では青銅製の帯金具が出土しており，平安時代頃の役所の可能性がある。榎崎Ａ遺跡では周溝墓５基が検出され，土師器の埦・皿が副葬されていた。榎崎Ｂ遺跡では竪穴住居跡１軒・掘立柱建物４棟などとともに，「〇箇」と書かれた墨書土器が７～８点出土している。

第２図　周辺の遺跡分布図

第１表　周辺の遺跡地名表

番号	遺　跡　名	所　在　地	地　　形	時　　代	遺　　物　　等	備　　考
1	郷之原	鹿屋市郷之原町	山麓	縄文，古墳	土器片・石器	
2	前畑	鹿屋市郷之原町前畑	台地	縄文（早・晩），弥生（中），古墳，近世	石坂式・平栫式・塞ノ神式・山ノ口式・磨製石鏃・打製石斧・砥石	県埋文報(52)，市埋文報(18)(25)(36)
3	中原山野	鹿屋市郷之原町中原山野	台地	縄文（早・晩），弥生（中），古墳	下剥峯式・平栫式・石鏃・打製石斧・磨製石斧・磨石・山ノ口式・投弾	県埋文報(52)，市埋文報(45)
4	川ノ上	鹿屋市大浦町松橋川ノ上	独立丘陵	古墳	土器片	県埋文報(48)
5	中ノ丸	鹿屋市大浦町中ノ丸	台地	縄文（前・後・晩），弥生（中），近世	轟式・曽畑式・指宿式・市来式・入佐式・山ノ口式・磨製石鏃・勾玉	県埋文報(48)
6	中ノ原	鹿屋市大浦町中ノ原	台地	縄 文（早・前・後・晩），弥生（中），古墳	石坂式・轟式・指宿式・丸尾式・納曽式・磨製石斧・山ノ口式	県埋文報(48)(51)(52)，市埋文報(34)(35)(46)
7	榎田下	鹿屋市大浦町榎田下	台地	縄文（前・後）	集石・轟式・曽畑式・阿高式・指宿式・市来式・石鏃・石斧・石皿	県埋文報(48)
8	榎崎Ｂ	鹿屋市郷之原町榎崎	台地	旧石器，縄文，弥生，古墳，古代	ナイフ形石器・細石刃・細石核・前平式・石坂式・礫器・黒川式・打製石斧・土師器・墨書土器	県埋文報(63)，県センター埋文報(４)，市埋文報(33)
9	榎崎Ａ	鹿屋市郷之原町榎崎	台地	旧石器，縄文，弥生，古墳，平安	細石刃・細石核・前平式・石坂式・押形文・弥生土器・土師器・須恵器・周溝墓	県埋文報（63）
10	飯盛ヶ丘	鹿屋市上野町飯盛ヶ丘	台地	縄文, 弥生, 古墳, 古代	石坂式・平栫式・塞ノ神式・集石	県埋文報(63)，県センター埋文報(３)
11	高橋	鹿屋市上野町	台地	弥生，古墳	土器片	
12	久恵城跡	鹿屋市西原町	丘陵	中世（南北朝初～戦国）		
13	小野原Ａ	鹿屋市小野原町	台地	縄文, 弥生, 古墳, 歴史	土器片	市埋文報(61)(65)(68)(70)
14	柳	鹿屋市上野町柳	台地	古墳		
15	野里城跡	鹿屋市野里町	台地	中世（戦国）		県埋文報(43)
16	大津	鹿屋市野里町	台地	弥生，古墳	土器片	県埋文報(25)
17	野里小西	鹿屋市野里町	台地	縄文（早），古墳	土器片	本報告書, 市埋文報(71)
18	小牧城跡	鹿屋市野里町岡泉	台地	中世（南北朝・戦国）		県埋文報(43)
19	岡泉	鹿屋市野里町岡泉	台地	縄文，弥生，古墳	土器片	市埋文報(12)(13)(20)(21)(22)(27)(28)(30)(39)
20	野里の古墳	鹿屋市野里町1826－1	丘陵	古墳	円墳３基	
21	キタバイ	鹿屋市高須町キタバイ	台地	弥生（後），古墳	土器片・石器	
22	霧島ヶ丘	鹿屋市霧島ヶ丘公園	山頂	縄文(早･晩), 弥生, 古墳	吉田式・塞ノ神Ａａ式	県埋文報(25)，市埋文報(17)
23	横山１	鹿屋市横山町	台地	古墳	土器片	県埋文報(25)
24	横山２	鹿屋市横山町	台地	古墳	土器片	県埋文報(25)
25	白崎城跡	鹿屋市白崎町	台地	中世（南北朝～戦国）		

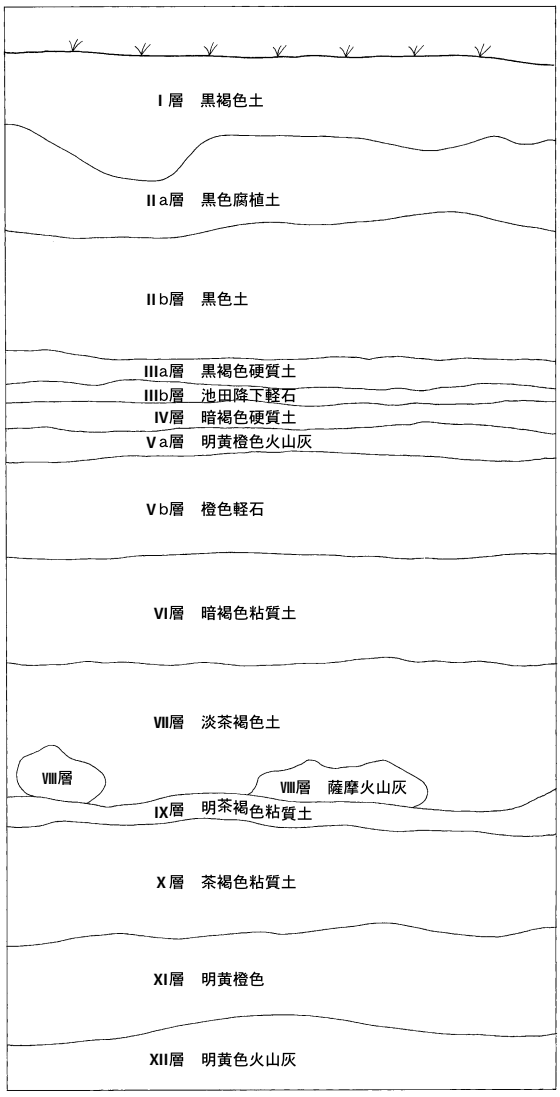
Ⅲ　地　　層

第１地点・第２地点とも同じ台地に位置しているため，基本的には地層は同じである。基本的な地層は次のとおりである。

Ⅰ層は黒褐色をした表土（耕作土）である。Ⅱ層は黒色腐植土で，やや粘質を帯びている。やや色の薄いａ層と，濃いｂ層とに分かれる。Ⅲ層は淡黄色パミスまじりの黒褐色硬質土である。このパミスは約5500年前に池田カルデラから噴出した軽石・火山灰である。土の層をａ層，軽石をｂ層とした。なお，第１地点と第２地点の間にある谷部では確認調査をした結果，Ⅱ層とⅢ層の間に黒っぽい茶褐色土・黒色土・茶褐色土などの層が挟まっていた。Ⅱ層堆積前に２次的な流出土が堆積したものと思われる。Ⅳ層は暗褐色をした硬質土である。Ⅴ層は明黄橙色をした層で，ａ層とｂ層に分かれ，ａ層はｂ層の腐植土でやや硬質である。ｂ層は約6400年前に鬼界カルデラから噴出したアカホヤ火山灰・幸屋火砕流などと呼ばれる火山灰で，軽石も含まれている。Ⅵ層は暗褐色粘質土で，縄文時代早期の包含層である。Ⅶ層は淡茶褐色のやや粘質を帯びた土で，これも縄文時代早期の包含層である。Ⅷ層は明黄色パミス混じりの淡茶褐色土で，パミスは薩摩火山灰と呼ばれる約11,500年前の桜島噴出物である。Ⅸ層は明茶褐色，Ⅹ層は茶褐色の粘質土で，これらは細石器の包含層に該当する。Ⅺ層は明黄橙色パミスまじりの黄灰色ロームである。Ⅻ層は灰褐色あるいは明黄色をした火山灰で，姶良カルデラを噴出源とする約24,000年前の火山灰（シラス）である。

第１地点は台地の中ほどに立地していることから，地層はほぼ水平に堆積しており，Ⅱ層以下，良く残っている。

第２地点の地層も良く残っており，ほぼ水平であるが，台地端であるため，西側の谷部へ向かってやや下降している。１～８区付近では南側へ向かってゆるやかに下降し，１区あたりになると，やや強く下降している。



第３図　基本地層図

Ⅳ　第１地点

第１章　発掘調査の概要

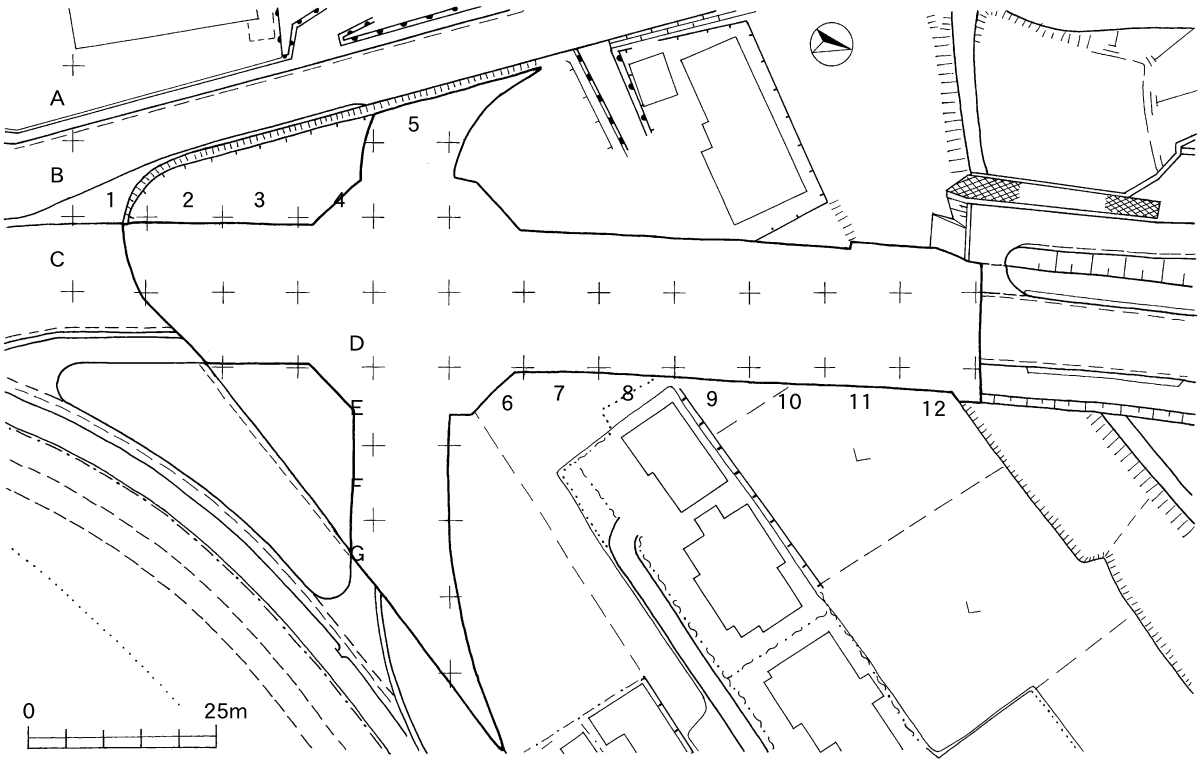
第１地点は国道269号線と市道の分岐点付近で，西原バイパスの南側起点部分にあたる。調査はその取り付け部分と，本線部分のあわせて2,800㎡を対象として行った。

試掘調査は文化財課児玉健一郎文化財主事が担当した。重機を利用し，工事予定部分約100mの路線内に幅２m，長さ３mを基本とするトレンチ６か所を設定して行った。その結果，１トレンチを除いて５か所のトレンチで縄文時代早期の遺物包含層が確認され，本調査の対象区域を設定した。

なお，平成12年10月５日に第１地点と第２地点の中間にあたる谷部についても試掘調査を行っている。調査は文化財課倉元良文文化財主事が担当し，重機を利用し，必要に応じて人力でも掘った。延長300m，幅40mほどの路線内に幅2.5m，長さ６mあるいは８mのトレンチを４か所設定し，深さ2.5m～2.8m掘り下げて行った。その結果，１トレンチ以外は遺構・遺物とも確認されなかった。１トレンチについても確認した土器片が２点のみで小破片であること，この付近が谷部にあたること，他のトレンチで遺物の出土がないことなどから本調査は必要ないと見なした。

調査区は調査対象地のほぼ中心線に近い工事用の中心杭№６と№７を結んだ線を基準線とし，10m四方の方眼を組んだ。中心杭№６を０と１の境，CとDの境にし，南から北へ向かって１・２・３・・・・，西から東へ向かってA・B・C・・・・と名付けた。調査範囲は１～12区，A～Ⅰ区までとなる。10m四方の方眼により，それぞれの区は１A区・２A区などと呼ぶ。

地表面の高さはほぼ平坦であるが，やや北へ下がっている。もっとも低い所で70.35m，もっと



第４図　第１地点の全体図

も高い所で70.83mである。

調査は縄文時代早期の包含層であるVI層の直上までは重機で剥ぎ取り，VI層を人力によって掘り下げたが，北側では近代の爆弾破裂跡が４か所で発見されたため，この遺構を処置後に重機でVI層の直上まで掘り下げた。

調査の結果，縄文時代早期の遺構（集石遺構９基，配石遺構１基）・遺物（石坂式土器・下剥峯式土器・桑ノ丸式土器・石鏃・礫器・石皿・磨石など），近代の爆弾破裂跡が４か所で発見された。

第２章　縄文時代

早期の遺構・遺物が発見されている。

第１節　遺構

集石遺構９基と配石遺構１基が発見されている。集石遺構は７～９Ｄ区に７基，11Ｄ区に２基あるが，８Ｄ区にある２号と５号は同一遺構の可能性がある。６号と９号もくっついており，これも同一遺構となる可能性がある。

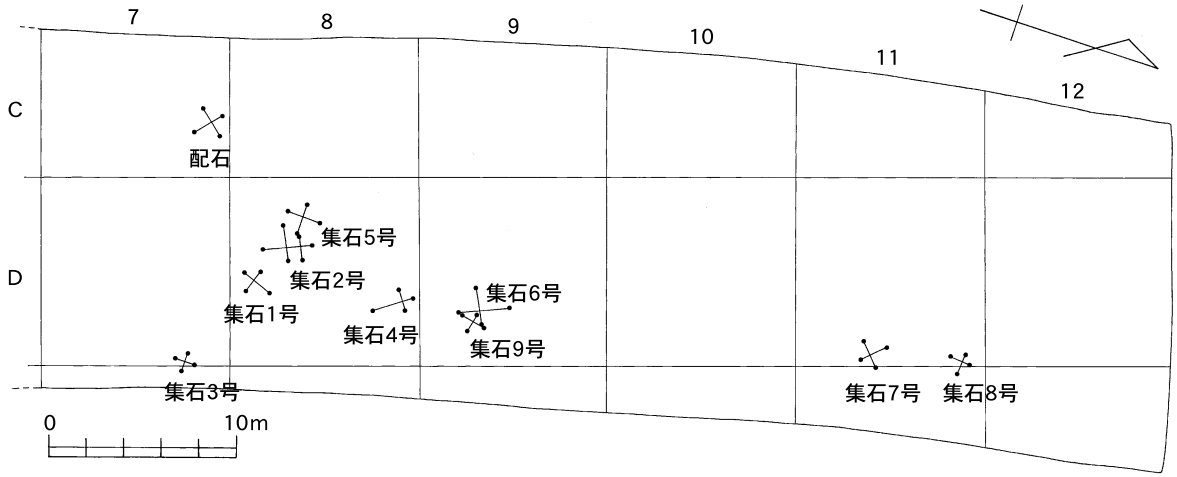
１　集石遺構１号

８Ｄ区で検出された集石遺構で，１m四方に散らばっているが，そのうちの40㎝四方には集中して存在している。砂岩系の石が50個あり，当初は楕円形あるいは円形の礫だったと思われるが，熱を受けてほとんどが破砕していた。集中部の石は割と大きく，長径が20㎝近くあるものも含まれている。掘り込みはなく，ほぼ平坦に散布している。周辺に土器２点がある。

土器の外面は綾杉状の貝殻条痕，内面は繊維状のていねいなヘラナデあるいはヘラ横ナデである。２の焼成度は良好で内面にみみず張れ状の突起がある。茶褐色を呈し，石英・白色石・茶色石などの細かい石が多く，２は５㎜大の石も含んでおり，分厚い。

２　集石遺構２号

８Ｄ区で検出された集石遺構で，2.2m×２mの広い範囲に散布している。まとまりはなく，かなり散乱しているが，1.5m×0.8mの範囲にはやや集中している。安山岩や砂岩などの石170個ほどからなる。火を受けて小さく破砕されているものが多いが，長辺が20㎝ある大きな砂岩礫も含まれている。土器が３点含まれている。



第５図　第１地点の縄文時代遺構配置図

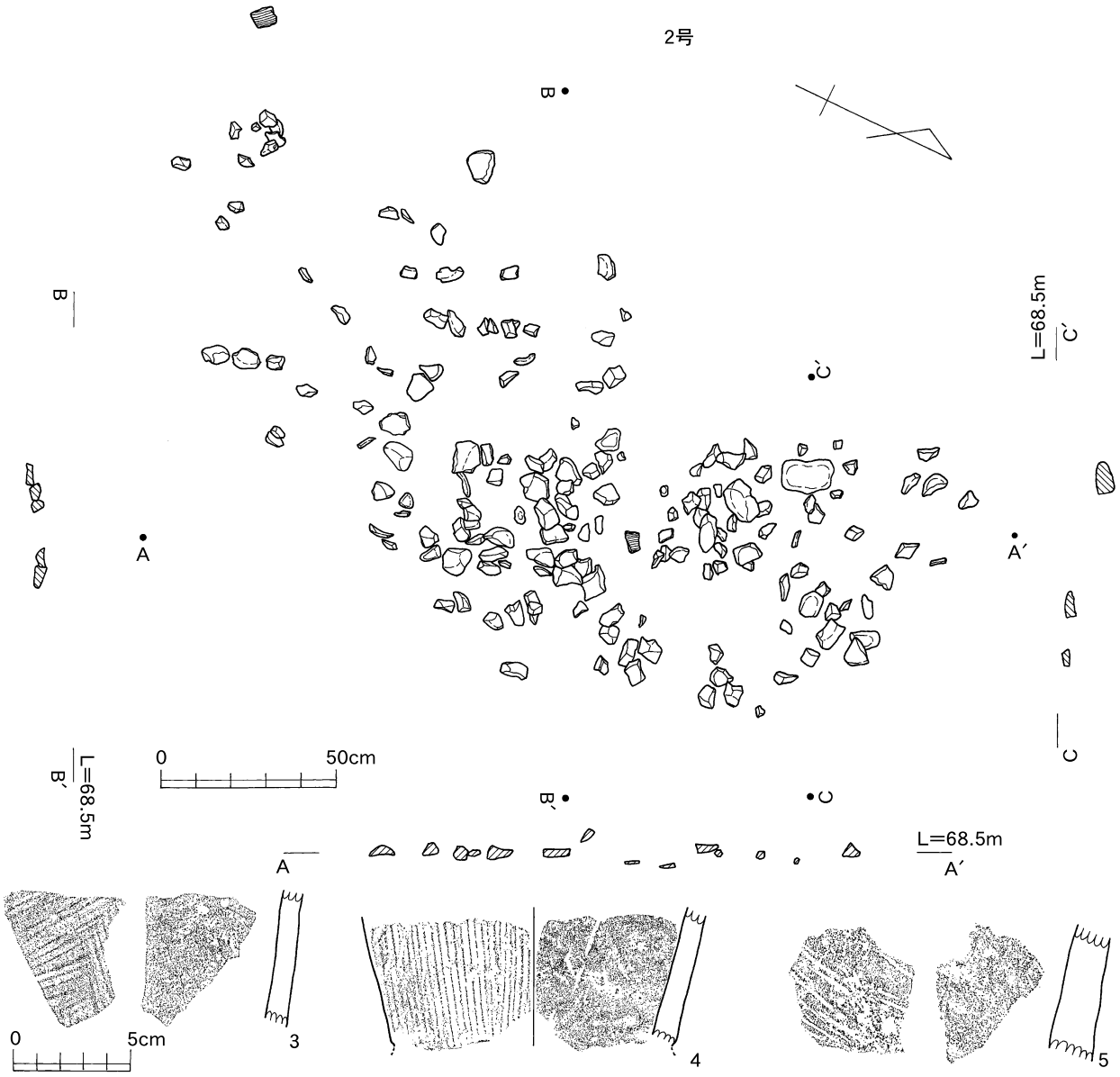
第６図　第１地点の集石遺構１号・３号と出土遺物

３は外面が綾杉状の貝殻条痕，内面がていねいな繊維状ハケナデである。４は上部が縦方向，下部が横方向の貝殻条痕で，縦方向は下から上へ，調整は下から上へ，つまり横方向から縦方向へ行っている。内面はヘラ横ナデである。５は外面は斜方向の貝殻条痕のあとヘラ縦ナデ，内面がヘラ縦ナデで仕上げ，分厚いことから底近くと思われる。

３　集石遺構３号

７Ｄ区で検出された集石遺構で，50㎝×60㎝の範囲にこぶし大の円礫14個が集中している。ほとんど砂岩で，中に磨石・敲石２点も含まれている。掘り込みはなく薩摩火山灰層の直上，Ⅶ層最下面に平坦にある。

長さ11.3㎝，幅10.3㎝，厚さ4.6㎝，重さ700ｇの安山岩製磨石（Ｓ２）と，長さ11㎝，幅10㎝，



第７図　第１地点の集石遺構２号と出土土器

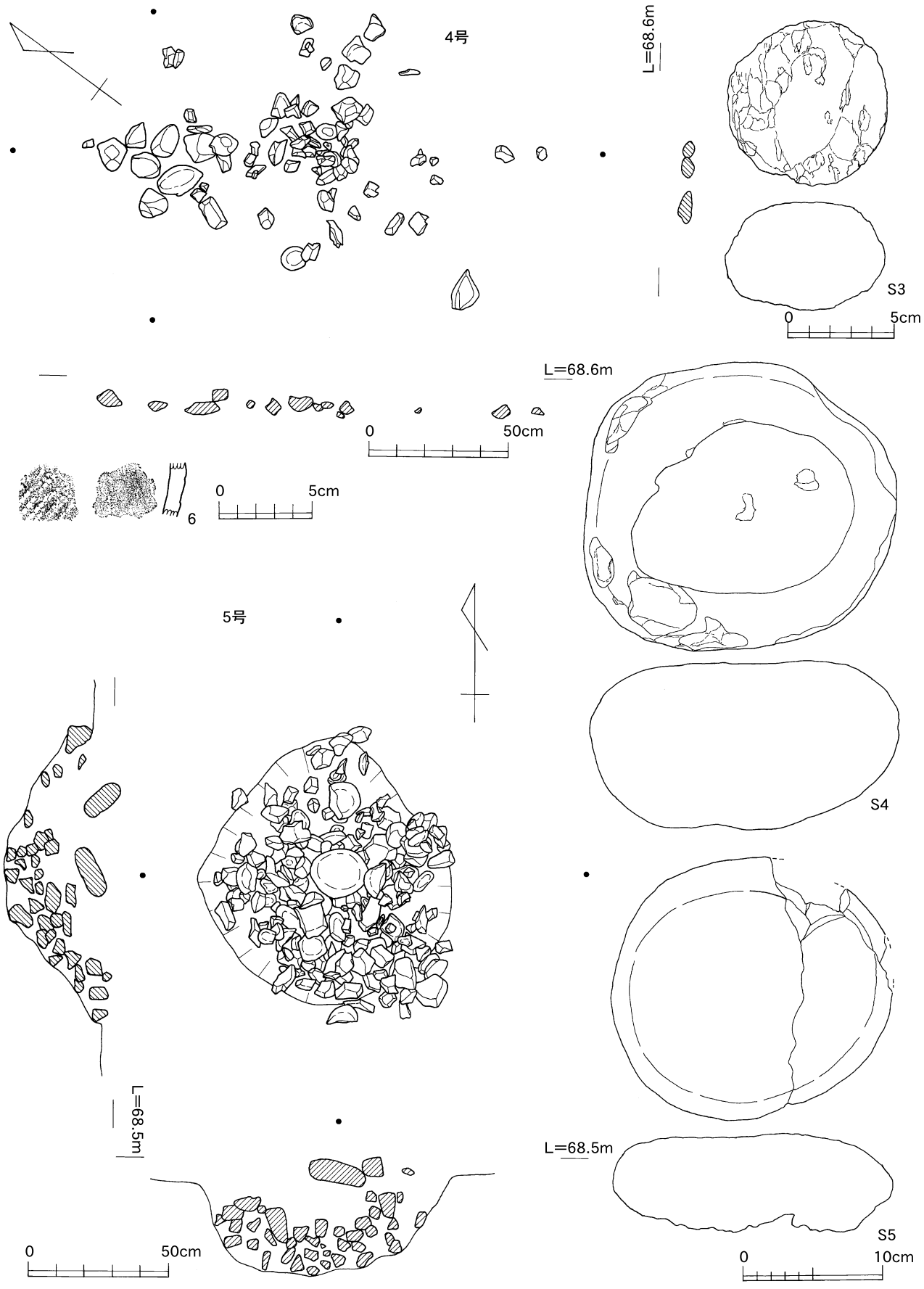
厚さ7.4㎝，重さ1100ｇの安山岩製敲石（Ｓ１）がある。磨石は一部が欠けているが，側面は良く使っている。敲石は一部に欠損部があるが，敲打痕はほとんどみられない。

４　集石遺構４号

８Ｄ区で検出された集石遺構で，90㎝×160㎝の範囲にあるが，北西側にはこぶし大の石８個を含む15個が40㎝×60㎝の範囲に集中している。その東側には40㎝四方に小さい石がややまとまって存在している。石は砂岩が多く，安山岩もある。掘り込みはない。中に土器片・磨石があり，集中礫付近にはまばらに炭がみられる。

土器片（６）は一辺が３㎝ほどの小さい破片で，外面がヘラナデのあと二枚貝の斜方向押圧文，内面が縦方向の繊維状ハケナデで仕上げている。色調は外面が明茶褐色，内面が黒っぽい灰褐色を呈し，焼成度は普通である。胎土には白色石・石英・茶色石などの細かい石を含んでいる。

磨石（Ｓ３）は長さ7.8㎝，幅7.6㎝，厚さ6.2㎝，重さ300ｇの円形をした厚めの溶結凝灰岩製で，側面を使用しているが，顕著な使用痕はない。表面はでこぼこしている。



第８図　第１地点の集石遺構４号・５号と出土遺物

５　集石遺構５号

２号の西側部分で重なって検出された集石遺構で，90㎝×100㎝のほぼ円形の範囲に約250個の石が集中している。深さ40㎝ほどの掘り込みの下20㎝部分にぎっしりとつまっており，間を置いて上に３個の石皿が置かれている。石材は砂岩・安山岩で，石の多くは火を受けて破砕している。埋土は黒褐色土で，多くの炭が含まれている。

石皿はともに片面のみを使用し，ほとんど平坦である。Ｓ４は最大長22.3㎝，最大幅20.5㎝，厚さ12.1㎝，重さ8200ｇで花崗岩製である。周囲には欠損がみられ，使用部は12㎝×16㎝と狭い。Ｓ５は最大長20㎝，最大幅18.6㎝，厚さ7.1㎝，重さ2100ｇの凝灰岩製である。一部が欠損し，反対側の面はでこぼこが目立つ。

６　集石遺構６号

９Ｄ区で検出された集石遺構で，180㎝×250㎝の範囲に100個近くの石が散らばっている。掘り込みはなく，ほぼ平坦な面に広がっている。一辺が10㎝を超えるものもあるが，小さいものも多い。

土器２点が含まれている。７は分厚い作りで，底近くの破片かと思われる。外面は斜方向の貝殻条痕のあと，ヘラ縦ナデで仕上げ，内面はヘラ横ナデである。色調は黄みがかった淡茶褐色を呈し，焼成度は普通であるが，内外とも剥脱が目立つ。胎土には石英・白色石・黄白色石などの細かい石を含んでおり，なかには５㎜大の大粒の石もある。８は直径15㎝の円筒形の深鉢で，外へ開きながらまっすぐ伸びる器形を呈する。外面は上から一段の横向き八の字状ヘラ押圧，三段の巻貝殻頂による刺突文，二段の横向き八の字状ヘラ押圧，横長ヘラ押圧，ヘラ突き刺し文と続く文様を呈し，口唇部はミガキに近いヘラ横ナデ，内面はていねいなヘラ横ナデで仕上げる。黒っぽい灰褐色を呈し，焼成度は良い。胎土には石英・白色石などの細かい石を含んでいる。

７　集石遺構７号

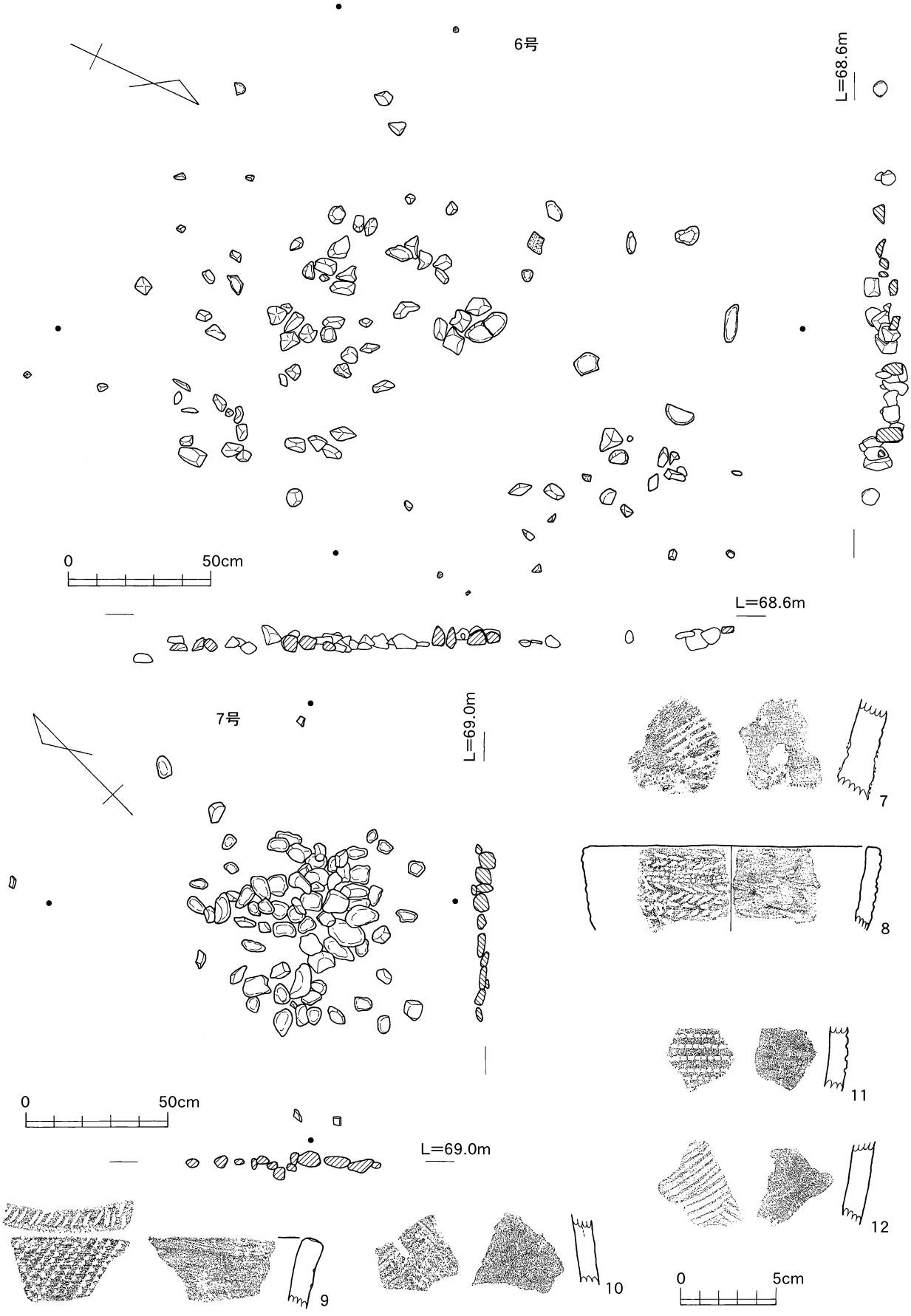
11Ｄ区で検出された集石遺構で，80㎝四方に集中している。こぶし大の石，約90個から成り，ほとんどは砂岩である。破砕礫は２，３個と少なく，ほとんどは元の石の形を残している。周辺から土器４点が出土している。

９は分厚い口縁部で，外へ開きながらやや外反して伸びている。内外ともヘラ横ナデで仕上げ，外面には左下がりの二枚貝腹縁の押圧が並行に施されている。口唇部には斜方向のヘラ刻みがあり，一部がややふくらんでいることから突起があるものと思われる。10と12は綾杉状となる貝殻条痕で，10は浅い。内面はていねいな繊維状ハケナデである。11は外面がヘラナデのあと二枚貝の貝殻腹縁刺突文，内面がていねいなヘラ横ナデである。色調は茶褐色・灰がかった茶褐色あるいは淡茶褐色・黒っぽい明茶褐色・赤っぽい淡茶褐色・茶がかった黒灰褐色などを呈し，焼成度は10は良いが，あとは普通である。胎土には石英・黄白色石・茶色石・白色石などの細かい石を含んでおり，９には５㎜大の石もある。

８　集石遺構８号

11Ｄ区で検出された集石遺構で，35㎝×40㎝の狭い所に25個の石が集中しているが，少し離れて径10㎝の石がある。火を受けて破砕したと思われる石が半数近くある。検出面はⅦ層上面で，周辺に塞ノ神式土器が散布している。掘り込みはなく，土器１点が含まれている。

13は小破片で，外面が浅い綾杉状の貝殻条痕，内面がていねいなヘラナデで仕上げている。淡茶



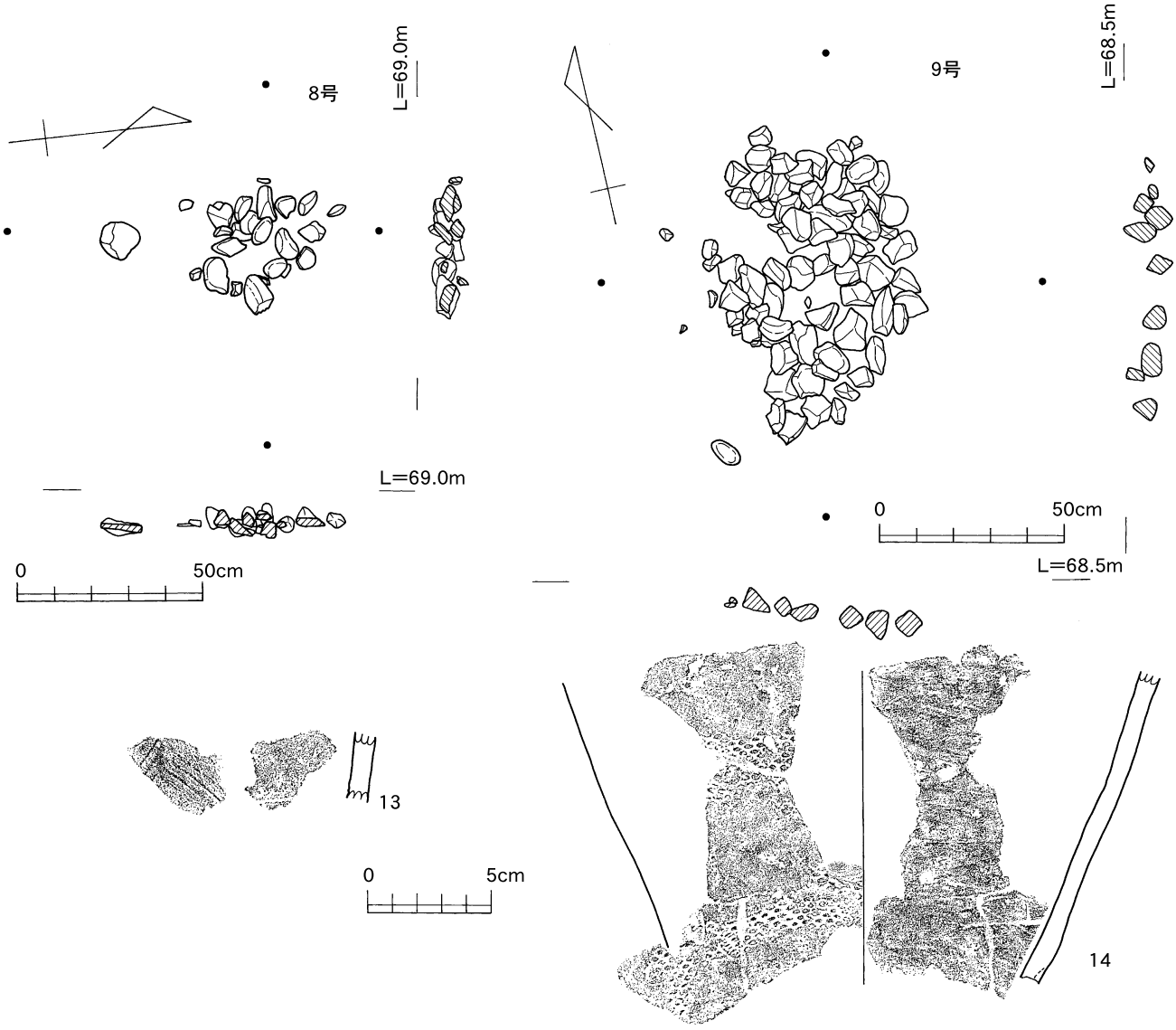
第９図　第１地点の集石遺構６号・７号と出土土器

褐色を呈し，焼成度は良好である。白色石・石英・黒い輝石・茶色石などの細かい石を含む胎土だが，なかには６㎜大の小石もある。

９　集石遺構９号

９Ｄ区で検出された集石遺構で，60㎝×90㎝の範囲に80個近くのこぶし大の石が集中している。掘り込みはないが，ややくぼんでおり，石の下に１点の土器がある。

14は薄い作りの押型文土器で，丸みをもって底部へ向かっていることから丸底もしくは尖底の器形と思われる。集石遺構９号のほかに７Ｃ区・８Ｄ区・10Ｄ区出土の破片と接合している。外面は細かい楕円押型文を転がしたあと，ヘラ横ナデを施しているため，幅２～３㎝ほどの帯状の押型文が残る。内面はややでこぼこしているが，ヘラ横ナデで仕上げている。下のほうに粘土の貼付痕跡がみられる。色調は外面が淡茶褐色，内面が明茶褐色あるいは黒褐色を呈し，外面には黒斑がみられる。焼成度は良好で，白色石・石英・茶色石などの細かい土を胎土に含んでいる。



第10図　第１地点の集石遺構８号・９号と出土土器

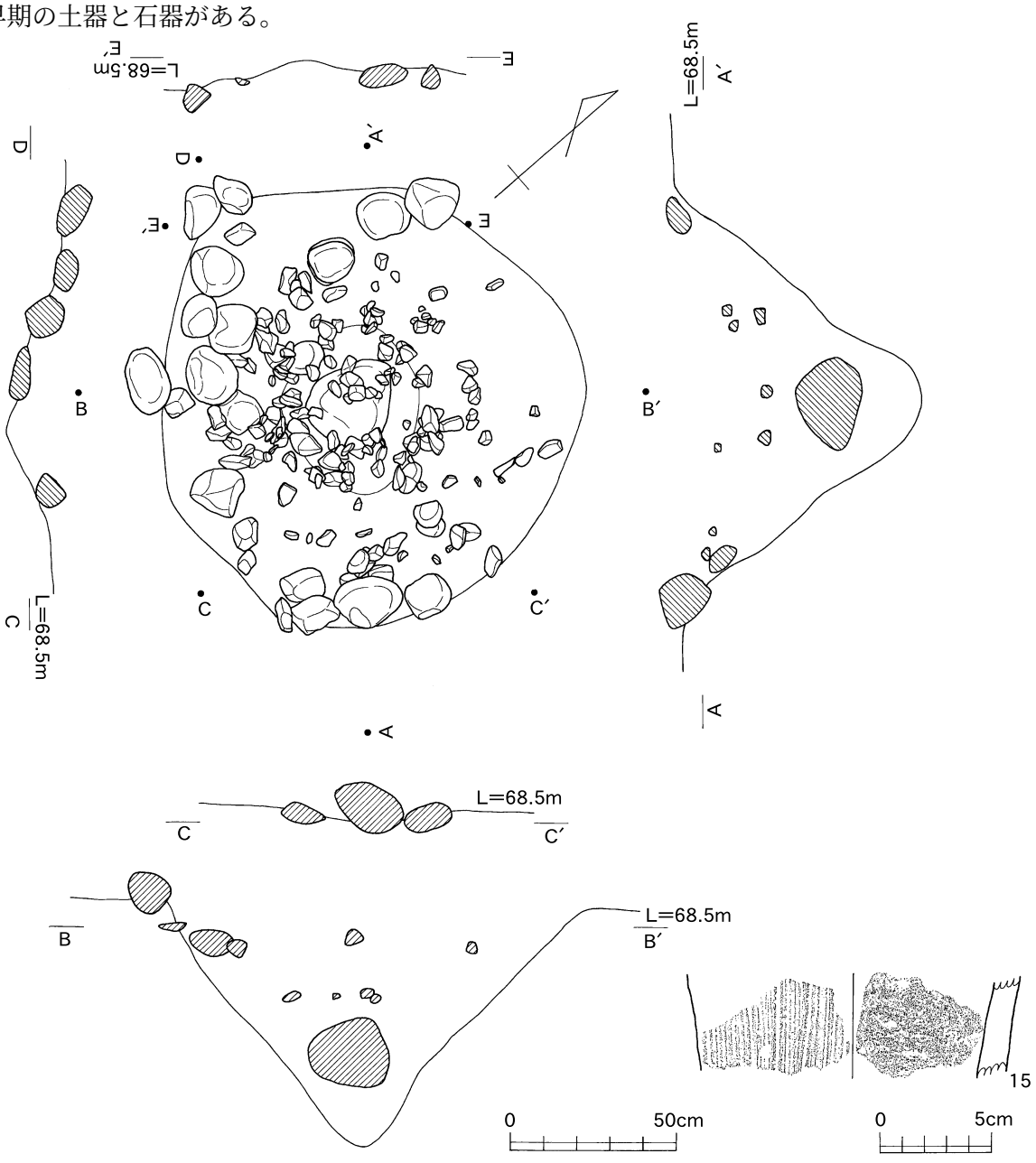
10　配石遺構

７Ｃ区のⅦ層上面で検出された集石遺構で，径10㎝～20㎝の大きな礫が直径130㎝ほどの円形の範囲に配置してある。この中央部は断面がＶ字状を呈する深さ70㎝の土坑となっており，埋土は黒褐色を呈し，炭化物が多く含まれている。底付近に大きな円礫が置かれているが，この下にも炭化物を含む埋土がある。石は砂岩・安山岩・花崗岩から成り，火を受けた痕跡は確認されていない。上面には小さな礫が散在しており，土器も含まれている。

外面が茶褐色，内面が黒褐色を呈する直径14㎝～15㎝ほどの分厚い深鉢で，外面は縦方向の貝殻条痕，内面はていねいな縦方向の繊維状ハケナデで仕上げている。白色石・石英・茶色石などの細かい石を含んだ土を用い，焼成度は良い。

第２節　遺物（第12図～第21図，16～152）

早期の土器と石器がある。



第11図　第１地点の配石遺構と出土土器

1　土器

16は，口縁部が外反して胴部に貝殻押引文を施文するものである。

17～76は，当遺跡の主体を成す一群である。胴部に貝殻綾杉文を施文するタイプであるが，中には縦位の貝殻条痕文が施文されているものもある。口縁部は，外反するもの（17～21）と直行するもの（22～56）とに分けられ，後者には瘤状突起が付着する資料が多い。18は，口縁部が強く外反するもので，口唇部は丸みを呈して米粒状のキザミ目が施されている。胴部の綾杉文も整然としている感がある。22～35は直行する口縁部形態のものの中で，瘤状突起あるいはわずかな波状口縁を呈さない，もしくは確認できなかった資料である。場合によっては，瘤状突起を有する資料との接合もあり得る。23は，器高約10㎝の小形土器である。口唇端部は先細りに仕上げられ，口縁部には貝殻刺突文が横位に３条施文される。胴部は，貝殻条痕文が縦位に施文されている。底部から胴部への立ち上がり部分の器壁が肥厚している。28・29には円穿孔の補修孔が穿たれている。30の口縁部貝殻刺突文は格子状に組み合わされている。この特徴は50にも見られ，同一個体の可能性もある。36の綾杉文は底部から口縁部にかけて一度に施文しており，右上がりと左上がりとを組み合わせることで綾杉文としている。この施文の後に口縁部をナデ消して口縁部施文を行っている。なお，外面の使用によると考えられる赤化・黒色化が器高２／３付近に境があり，内面の黒色化もやはり器高２／３付近に境がある。底部接地面には磨滅が観察され，これを図示した。37は，比較的筒形を呈する資料である。口縁部に横位の貝殻刺突文を場所によっては11条施文している。このため，口縁部文様帯は，瘤状突起下よりも胴部へはみ出すようになっている。胴部の綾杉文は，36と同様である。38・39は同一個体で，ウンモを多量に含んでいる。口縁部の貝殻刺突文は，はみ出した胴部施文がナデ消されることなく重ねられており，このことから胴部施文の後，口縁部施文を行っていることがわかる。42の瘤状突起は細長く口縁部から突き出るように貼り付けられている。47・48は同一個体で，49もその可能性が考えられる。48には未完通の穿孔があり，補修孔を穿つ途中であったものと思われる。52は口縁部をわずかに内傾させて図化したが，波頂部と波頂部との間に位置すると考えられ，もう少し外傾させても良いかも知れない。53・54は同一個体である。口縁部に縦位の貝殻刺突文を施し，その下位には貝殻刺突文を横位に施文して口縁部と胴部との境を示す。口唇部には，円周に沿って貝殻刺突文が施されている。56も同様の口縁部施文であるが，胴部施文は斜位の貝殻条痕文で，それぞれの間隔が広くやや粗雑な施文である。57は口縁部付近の破片である。58～69は胴部片である。胴部片も多量に出土しているが，口縁部ほど細分できず径が復元できた代表的なものを掲載している。70～76は底部資料である。これらに共通して言える特徴は，胴部の貝殻綾杉文を施文した後に底部付近に横位の貝殻条痕文を施している点である。口縁部資料中に述べたが，口縁部施文より胴部施文が先に施文されている資料もあり，底部資料と接合してはいないものの，全体的に胴部施文を先に行った後に口縁部や底部の施文が行われていた可能性が考えられる。この際に，72のように胴部施文と違って底部施文の条痕が深く器面に入り込んでいるものもある。均一な器面を意識しての行為であろうか。また，70・71・74のように粘土接合面が観察できる資料があった。70や74の場合，底部となる円盤の外側に粘土を貼り付けて胴部を立ち上げたと考えられ，71は，さらに立ち上がり内面に粘土を貼り付けて補強している様子が窺える。なお，74・75の底部接地面の端部には米粒状のキザミ目が施されている。76は，小形の底部で23に類似する。

77～103は器外面に貝殻刺突文を施すものである。器形は，口縁部が直行するタイプ（81～85）と，内弯するタイプのもの（86～88）の２種類が見られる。78・79は口唇部が平坦なもので同一個体であると思われる。81・82は瘤状突起が付く。81が口唇部と一体感があるのに対して82は口縁部外面と一体感がある。87・88は口縁部が内弯して肥厚する。90～100は胴部片である。横位の貝殻刺突文をほぼ全面に施文するタイプ（91～93）と鋸歯状施文のタイプ（94～100）とがある。これらの多くは，内面の調整が丁寧である。101～103は底部片である。102は底面よりも胴部の器壁が厚い特徴がある。103は底盤の外側に粘土を貼り付けて胴部を立ち上げている。

104～113は連続する小粒な羽状文が施されているものである。口縁部は直行ないし内弯する。105は口縁部が強く内弯する。施文は破片右側で羽状文が施文されているのに対して左側では縦位の羽状文になっている。これよりさらに左側では107のように部分的に肥厚するかのような盛り上がりがわずかに認められる。109～111は口縁部を欠損している。基本となる施文は小粒な羽状文であるが，部分的に貝殻刺突文が施文されている特徴がある。あるいは先の資料も場所によってはこのような施文パターンを有している可能性もある。112・113は同一個体である。口縁部が内弯し，器外面には羽状文が施される。口縁部内面はミガキに近い丁寧な調整である。

119・120は胎土・色調から同一個体と思われる。口縁部はほぼ直行し，胴部でわずかに膨らむ。口縁部文様は，縦位の貝殻条痕文を無文部を設けて施し，その上から横位に貝殻条痕文を施している。120にはケズリ状の調整痕が見られる。

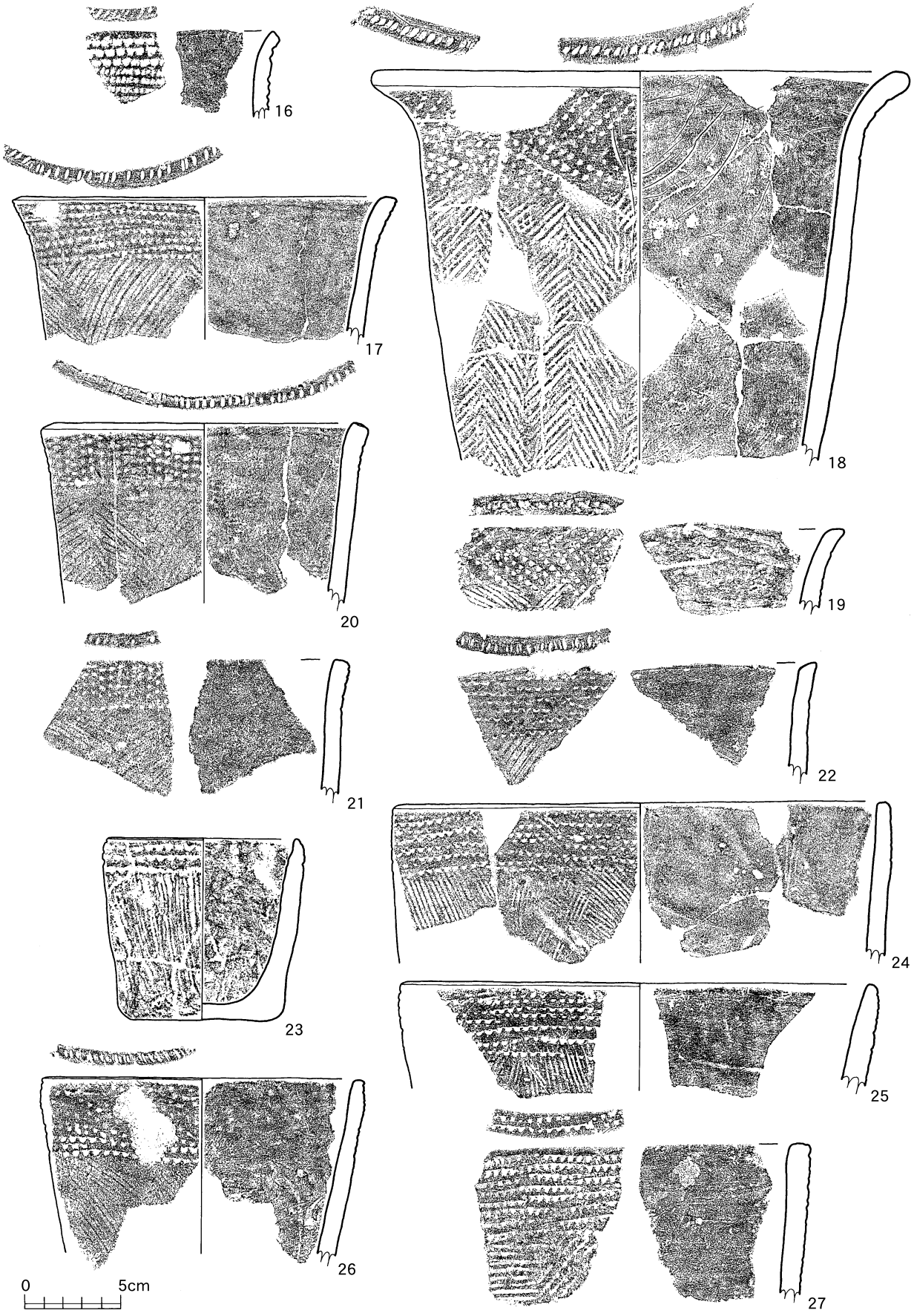
121～123はこれまでに報告してきた貝殻施文の一群に近いと思われるが，明確にその類に位置づけられなかったものを一括した。

124～127は押型文土器である。これらの特徴は小粒な楕円文を横位に無文帯を設けて施文されているというところにある。器形は，口縁部は直行して緩やかな曲線を描いて底部へ至る胴部を有する。底部資料の出土は確認できなかったが，124から尖底あるいはそれに近い底部形態を有すると思われる。124は，底部を除くほぼ全体像が掴める資料である。口縁部には回転穿孔により補修孔が穿たれている。127は，他の資料と比べて胎土粒子が粗い印象を受ける。

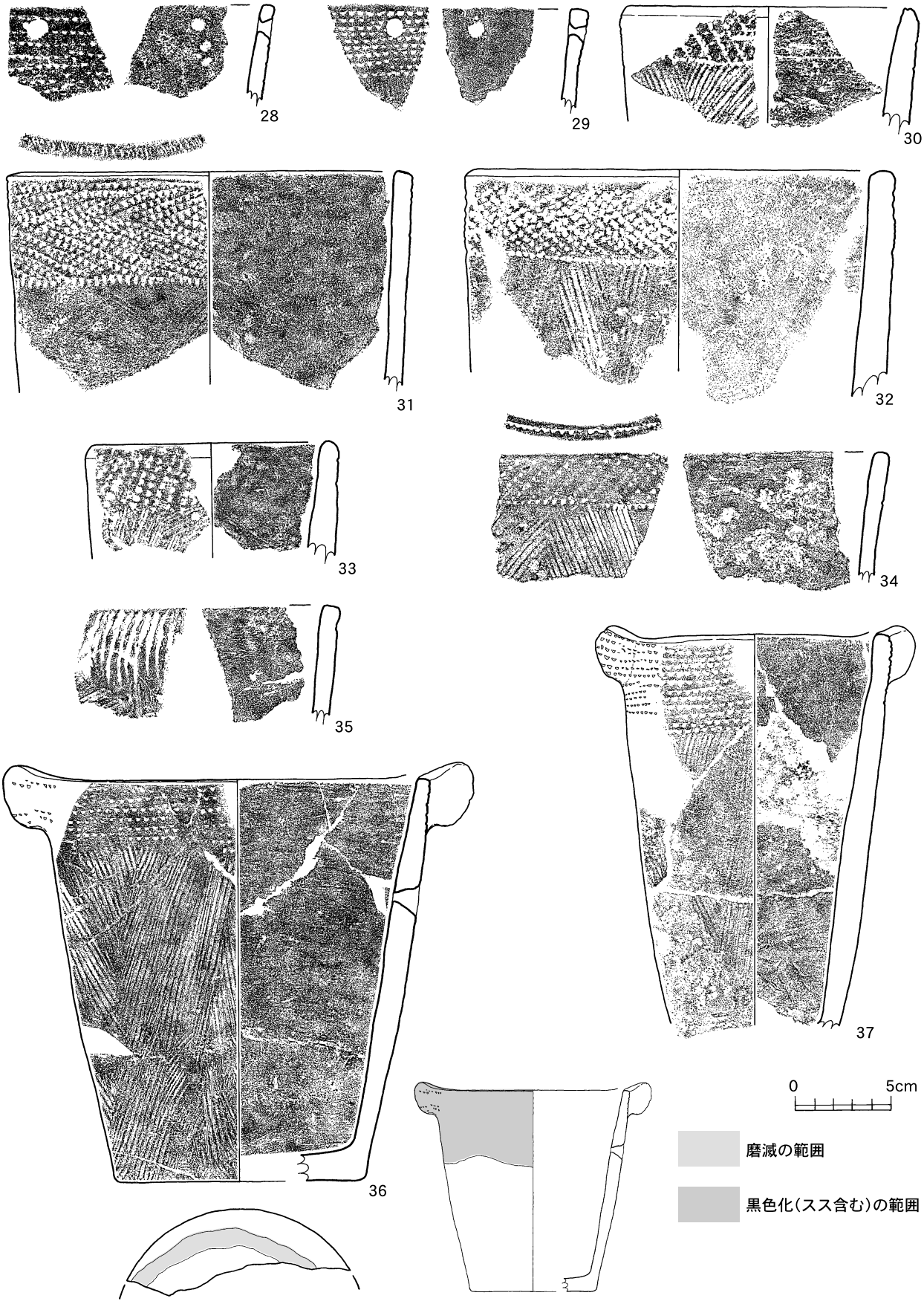
128～147は胴部に撚糸文を施す一群である。口縁部形態は，強い屈曲部を有するもの（128・129）とラッパ状に外反するもの（130～132）とに分けられる。128・129は胎土色調などから同一個体である。131は口縁部がラッパ状に外反して，沈線文が施される。胴部には縦位に間隔を持って撚糸文が縦位に施文されている。132はこの131と同一個体と思われる。133は頸部に明確な稜を持たない。134～145は胴部片である。基本的には，撚糸文を縦位に無文帯を設けて施文している特徴が認められる。145は施文後にナデ調整が行われており，文様の大部分が不鮮明になっている。あるいは小粒な楕円文である可能性も考えられる。146・147は底部片である。

148・149は壺形土器である。口縁部外面には横位の沈線文が施されている。

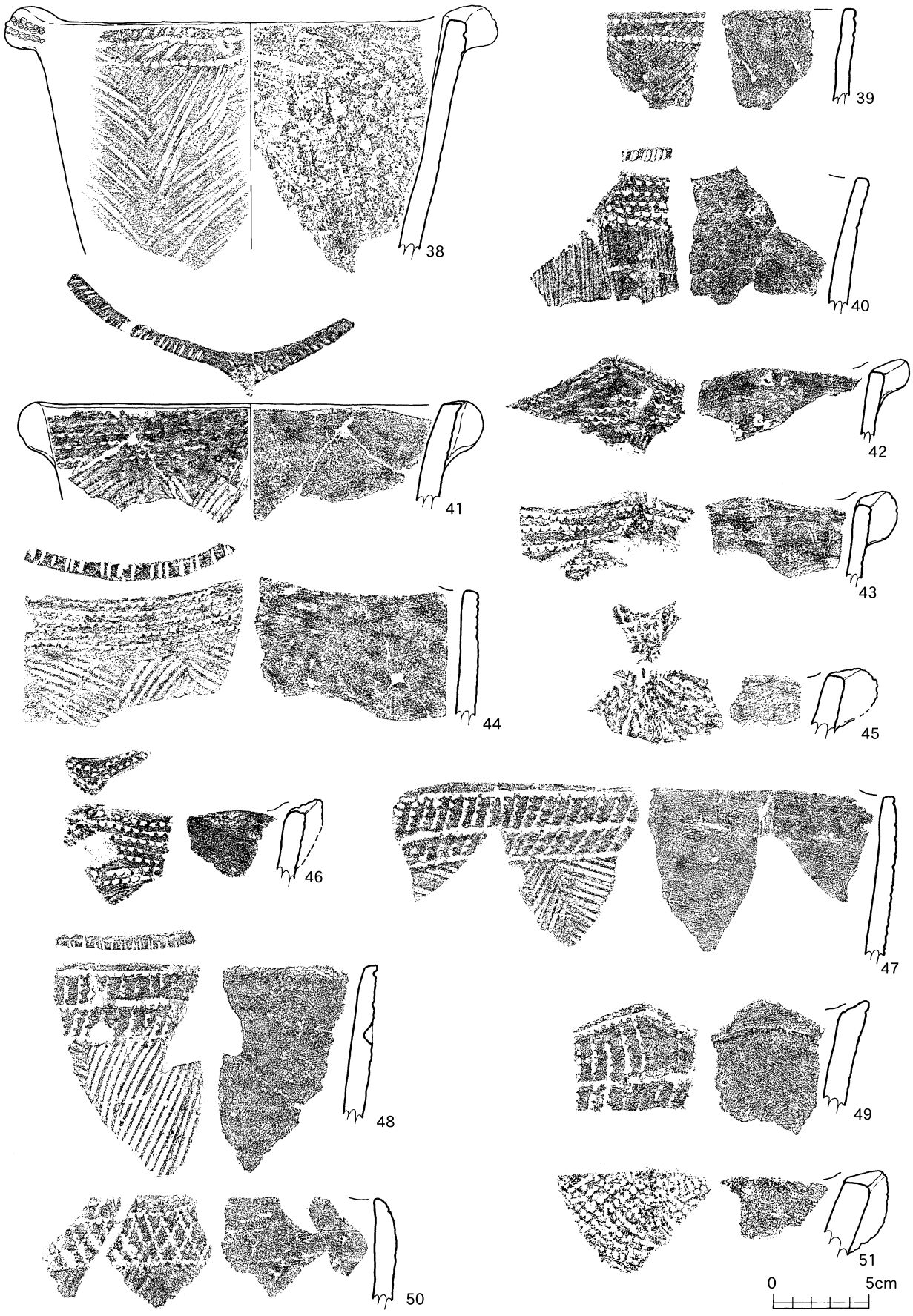
150～152は無文土器である。150は，口唇部が平坦であるが器形的な特徴は124などに類似しており，これも底部を欠くが，尖底ないし尖底に近い底部が予想される。151・152は口縁部が直行している。胎土色調などは17～76の雰囲気がある。



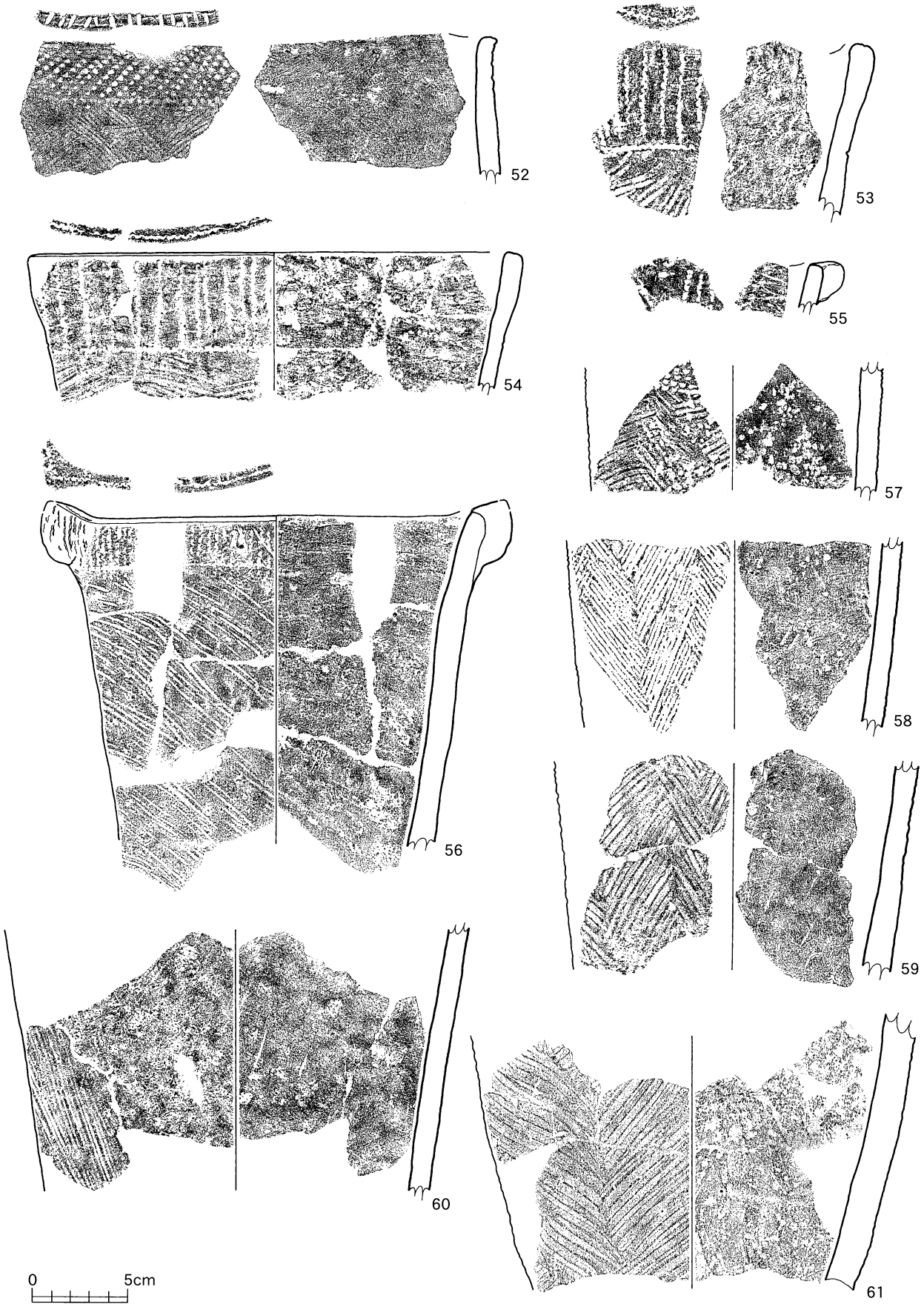
第12図　第１地点の縄文土器(1)



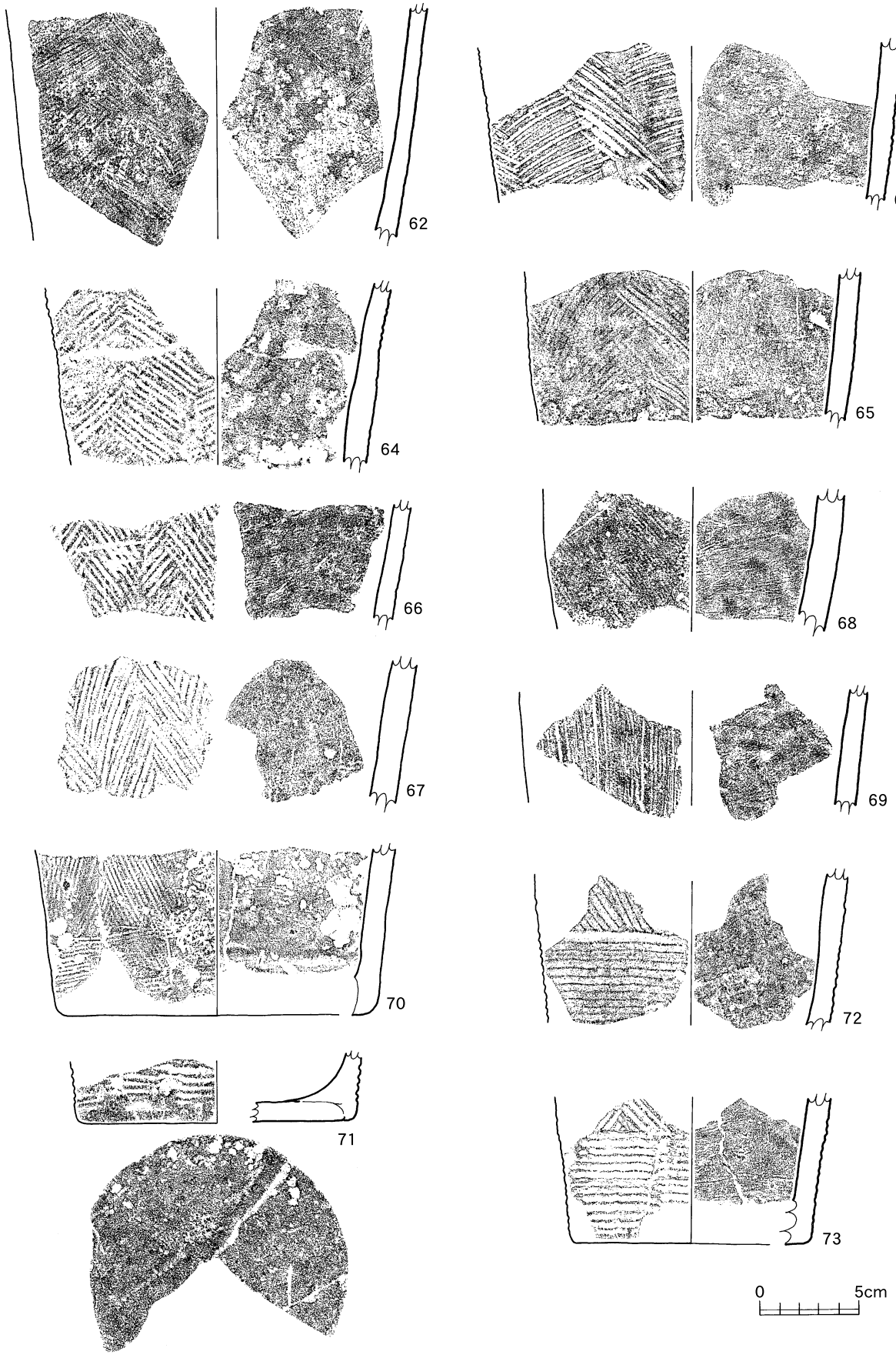
第13図　第１地点の縄文土器(2)



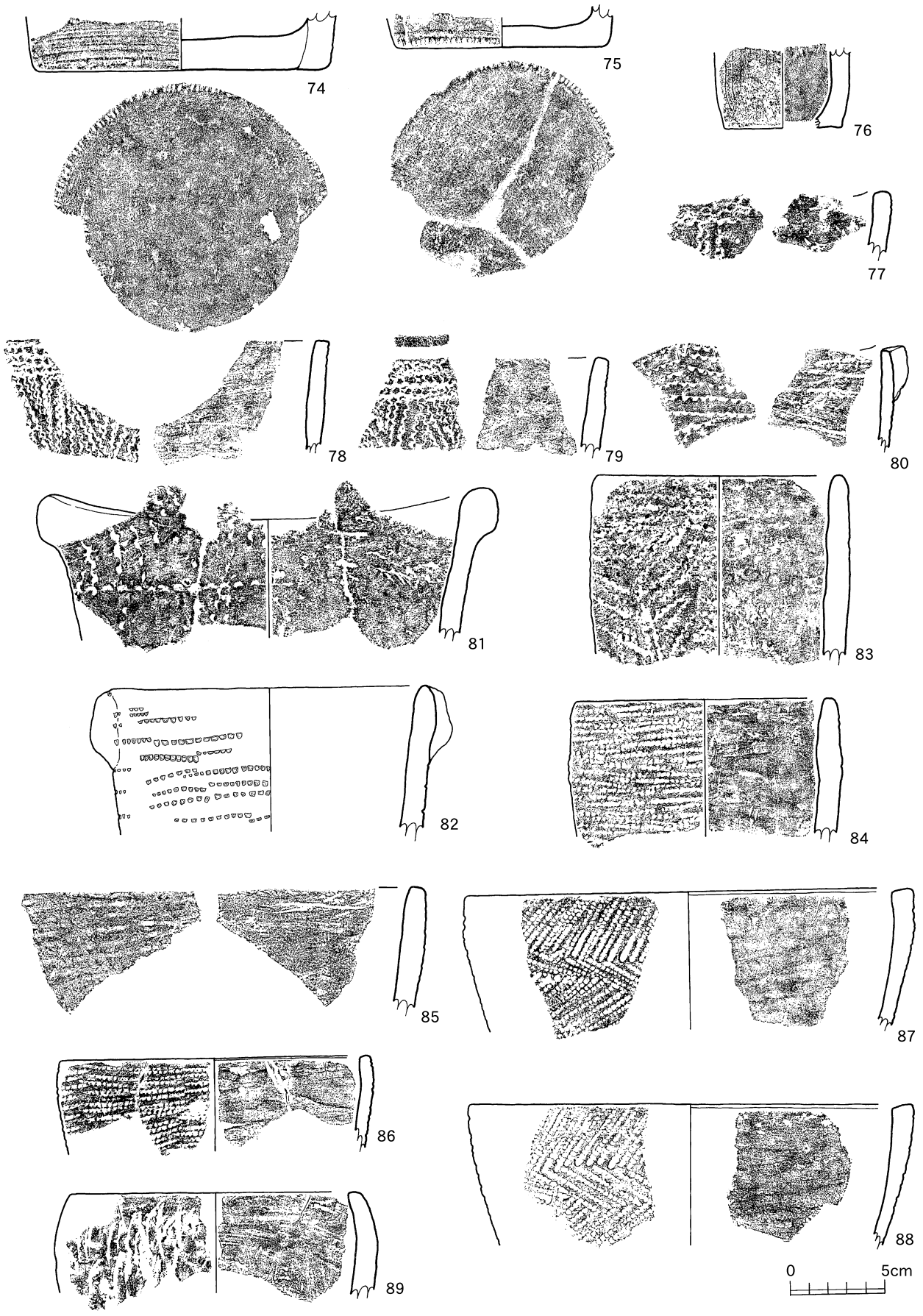
第14図　第１地点の縄文土器(3)



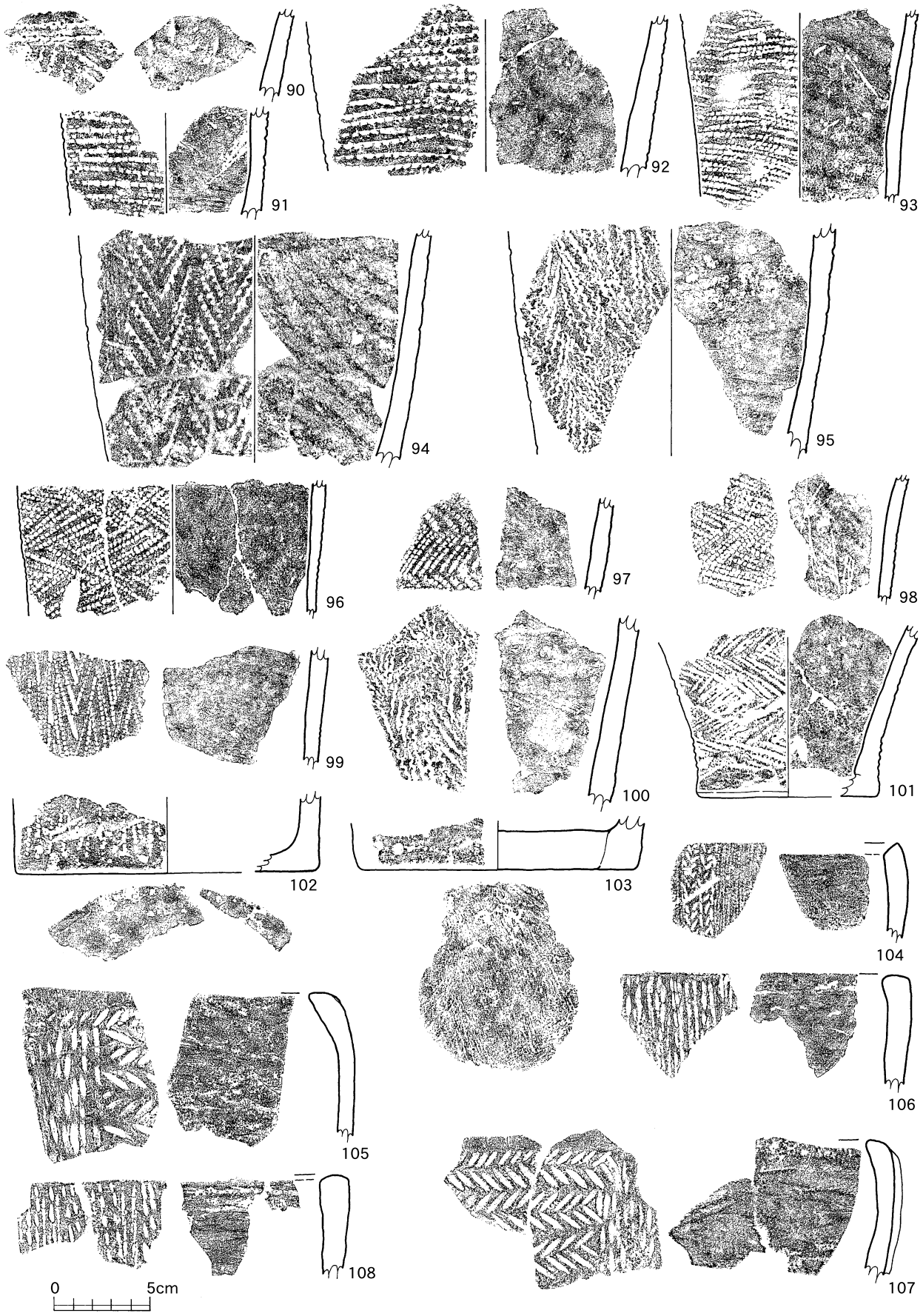
第15図　第１地点の縄文土器(4)



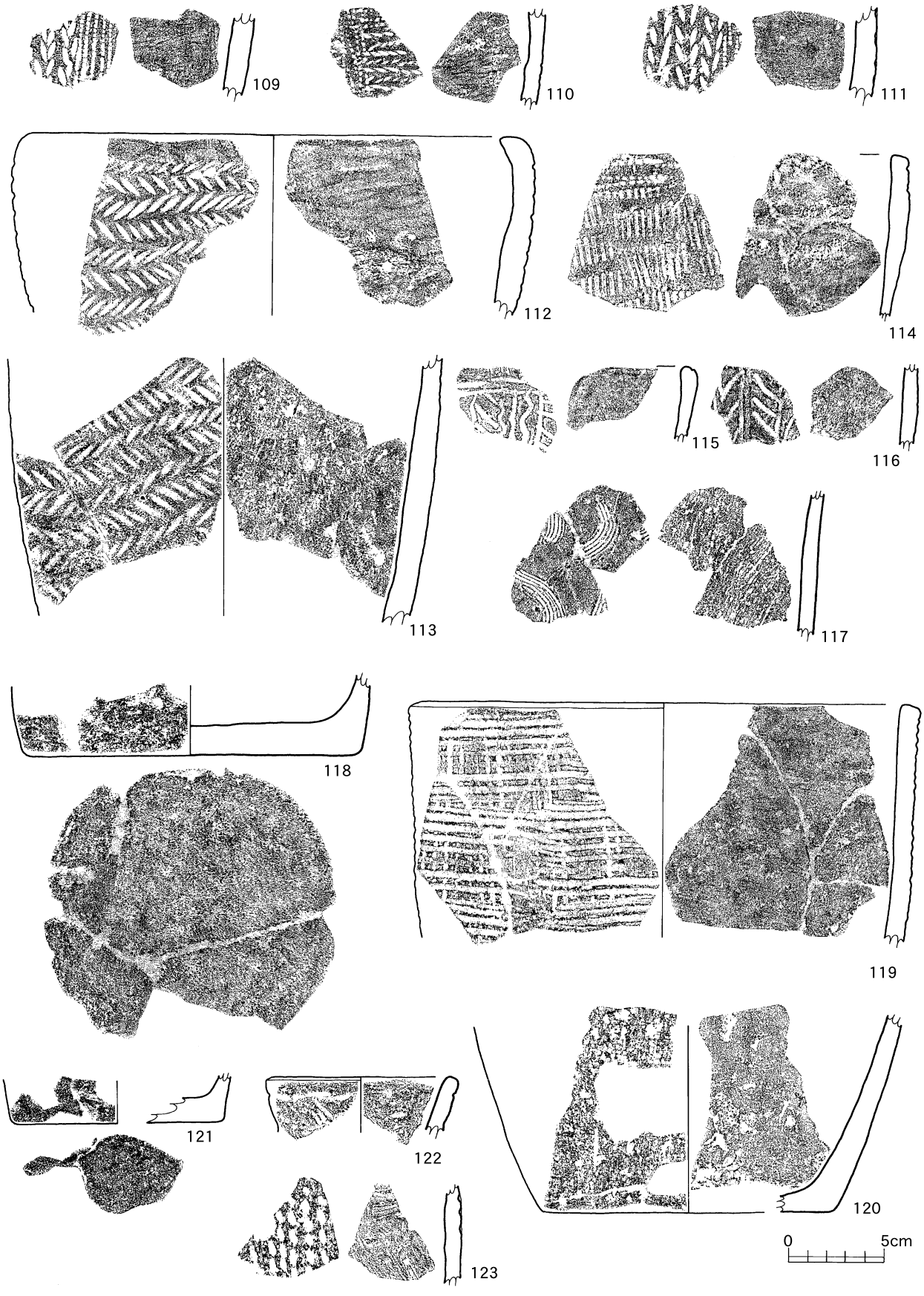
第16図　第１地点の縄文土器(5)



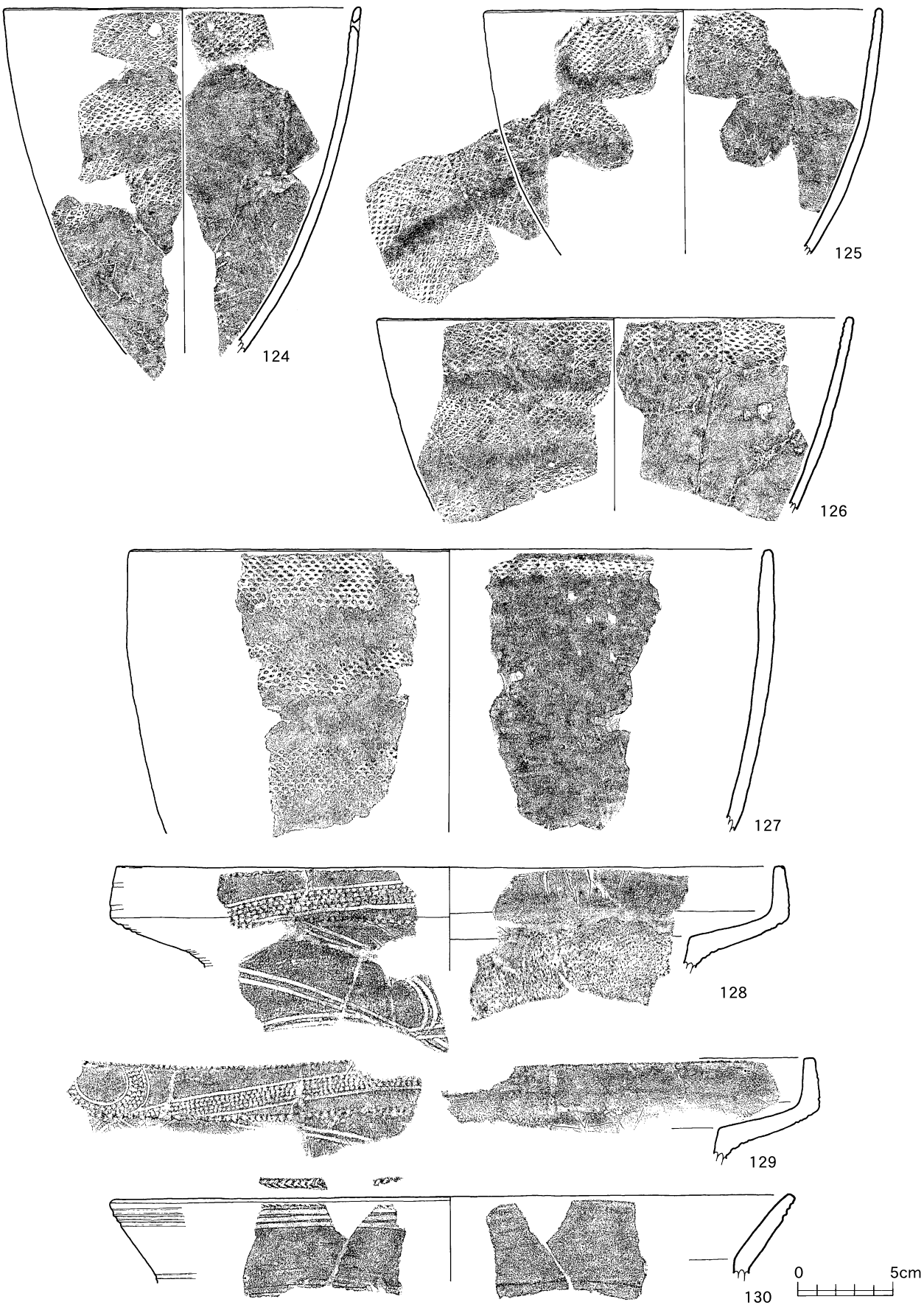
第17図　第１地点の縄文土器(6)



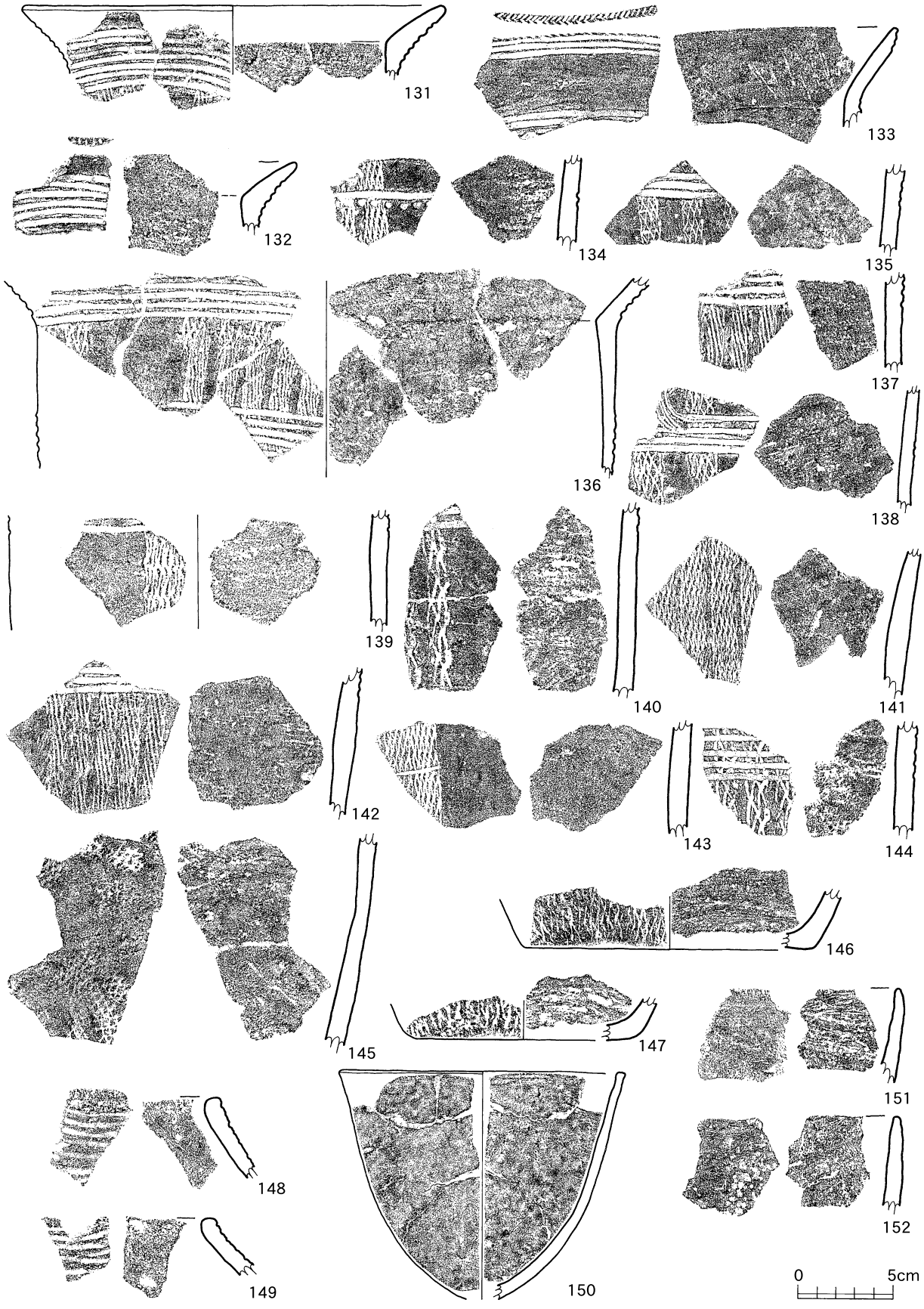
第18図　第１地点の縄文土器(7)



第19図　第１地点の縄文土器(8)



第20図　第１地点の縄文土器(9)



第21図　第１地点の縄文土器⑽

第２表　第１地点の縄文土器観察表(1)

挿図	番号	区	層	取上番号	調整		色調		胎土						備考
					外面	内面	外面	内面	石英	長石	カクセン石	輝石	ウンモ	小礫	
12	16	11E	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	灰茶褐色	黒褐色	○	○			○	○	
	17	11D	Ⅶ	394	ナデ	ていねいなナデ	灰茶褐色	灰黄茶褐色	○	○				○	
	18				ナデ	ていねいなナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	19	12D	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	灰黄褐色	赤茶褐色	○	○				○	
	20	10D	Ⅶ	418 395	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○	
	21				ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○	
	22	11D	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○	
	23	10D 11D	Ⅶ	329 333	ナデ	ナデ	赤茶褐色	黒褐色	○	○				○	
	24	11C 10C	Ⅶ	410	ナデ	ていねいなナデ	灰褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	25	11C	Ⅶ	411	ナデ	ていねいなナデ	灰褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	26	7D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○	
	27	6C	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
13	28	10D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	29	11D	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	30	11C	Ⅵ	一括	ナデ	ケズリのちナデ	暗茶褐色	暗褐色	○	○				○	
	31	10D	Ⅶ	319	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	32	10D 11C	Ⅵ Ⅶ	409	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○	
	33	11D	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	34	9C	Ⅶ	256	ナデ	ナデ	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色	○	○				○	
	35	12C	Ⅵ	一括	ナデ	ケズリのちナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○			○	
	36	11D	Ⅶ	323・338 344・346 422	ナデ	ていねいなナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○	
	37	11D 10D	Ⅶ Ⅵ	428 368	ナデ	ていねいなナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
14	38	7C 7D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	灰茶褐色	茶褐色	○	○			○	○	
	39	7C	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	黄茶褐色	黒褐色	○	○			○	○	
	40	10D	Ⅶ	308	ナデ	ナデ	暗赤茶褐色	黒褐色	○	○				○	
	41	10D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○	
	42	10D	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	43	11D	Ⅶ	一括	ナデ	ていねいなナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	44	11D	Ⅶ	325	ナデ	ていねいなナデ	暗茶褐色	赤茶褐色	○	○	○			○	
	45	6C	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○			○	○	
	46				ナデ	ていねいなナデ	茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	47	10C	Ⅶ	一括	ナデ	ていねいなナデ	暗茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	48	10C	Ⅶ	一括	ナデ	ていねいなナデ	暗茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	49	10C	Ⅶ	一括	ナデ	ていねいなナデ	暗茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	50	11D	Ⅶ	367	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	51	11C	Ⅶ	406	ナデ	ナデ	茶褐色	明茶褐色	○	○				○	
15	52	11D	Ⅶ	346	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○	
	53	11D	Ⅶ	357	ナデ	ナデ	灰黄茶褐色	黄茶褐色	○	○	○			○	
	54	8D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	灰茶褐色	赤茶褐色	○	○	○			○	
	55	11D	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○		○		○	
	56	11C	Ⅶ	413	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○	
	57	7C	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○			○	○	
	58	11D	Ⅶ	371	ナデ	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	59	11D	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	60	11D	Ⅶ	387	ナデ	ナデ	黄茶褐色	赤茶褐色	○	○				○	
	61	11D	Ⅶ	373	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○	

第３表　第１地点の縄文土器観察表(2)

挿図	番号	区	層	取上番号	調整		色調		胎土						備考
					外面	内面	外面	内面	石英	長石	カクセン石	輝石	ウンモ	小礫	
16	62	６C	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	灰茶褐色	灰茶褐色	○	○				○	
	63	11D	Ⅶ	398	ナデ	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	64	10D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	65	11D	Ⅶ	355	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○			○	○	
	66	８C	Ⅶ	293	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○	
	67	10D	Ⅶ	397	ナデ	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	68	11D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	69			一括	ナデ	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	70	11D 10C ８C	Ⅶ Ⅶ Ⅶ	396 223	ナデ	ナデ	赤茶褐色	明茶褐色	○	○	○			○	
	71	７D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	灰黄褐色	○	○				○	
	72	11D	Ⅶ	421	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黒褐色	○	○				○	
	73	11D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	赤褐色	○	○	○			○	
17	74	11D	Ⅶ	377	ナデ	ナデ	黄茶褐色	暗茶褐色	○	○				○	
	75	10D	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	76	11D	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色	○	○				○	
	77	10C	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	灰茶褐色	灰茶褐色	○	○			○	○	
	78	７D	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	79	７D	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	80	７D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	灰茶褐色	灰茶褐色	○	○				○	
	81	10C	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	82	10D	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	暗茶褐色	○	○				○	
	83	10D	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	赤茶褐色	暗茶褐色	○	○				○	
	84	10D	Ⅶ	一括	ナデ	ていねいなナデ	灰褐色	灰褐色	○	○				○	
	85	11D	Ⅶ	353	ナデ	ていねいなナデ	暗茶褐色	茶褐色	○	○			○	○	
	86	７C	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○				○	
	87	10C	Ⅶ	一括	ナデ	ていねいなナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○			○	○	
	88	10C	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○			○	○	
	89	８D	Ⅵ	一括	ナデ	ケズリのちナデ	黄褐色	灰黄褐色	○	○				○	
18	90	９D	Ⅶ	336	ナデ	ていねいなナデ	黄茶褐色	暗褐色	○	○				○	
	91	８D	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	茶褐色	黒褐色	○	○				○	
	92	10D	Ⅶ	415	ナデ	ていねいなナデ	黄茶褐色	暗褐色	○	○				○	
	93	７C	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	黄茶褐色	灰黄褐色	○	○				○	
	94	７D	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	黄茶褐色	灰黄褐色	○	○				○	
	95	６D	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	明茶褐色	茶褐色	○	○		○		○	
	96	10C	Ⅶ	一括	ナデ	ていねいなナデ	灰黄褐色	灰褐色	○	○				○	
	97	９D	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	灰黄褐色	灰褐色	○	○			○	○	
	98	10C	Ⅶ	一括	ナデ	ていねいなナデ	灰黄褐色	黒褐色	○	○			○	○	
	99	９C	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	暗茶褐色	黒褐色	○	○				○	
	100	７D	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	明茶褐色	明茶褐色	○	○		○		○	
	101	９C	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	赤茶褐色	黒茶褐色	○	○			○	○	
	102	９D ９D	Ⅵ Ⅶ	一括	ていねいなナデ	ていねいなナデ	茶褐色	黒茶褐色	○	○			○	○	
	103	11D	Ⅵ	一括	ていねいなナデ	ナデ	黄茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	104	７D	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	黄茶褐色	灰茶褐色	○	○	○			○	
	105	10D	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	○	○			○	○	
	106	８D	Ⅶ	一括	ナデ	ていねいなナデ	黒褐色	茶褐色	○	○			○	○	
	107	７C 10D	Ⅵ Ⅶ	一括	ナデ	ていねいなナデ	灰褐色	灰褐色	○	○				○	
	108	６C ８D	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	黒褐色	茶褐色	○	○			○	○	

第４表　第１地点の縄文土器観察表(3)

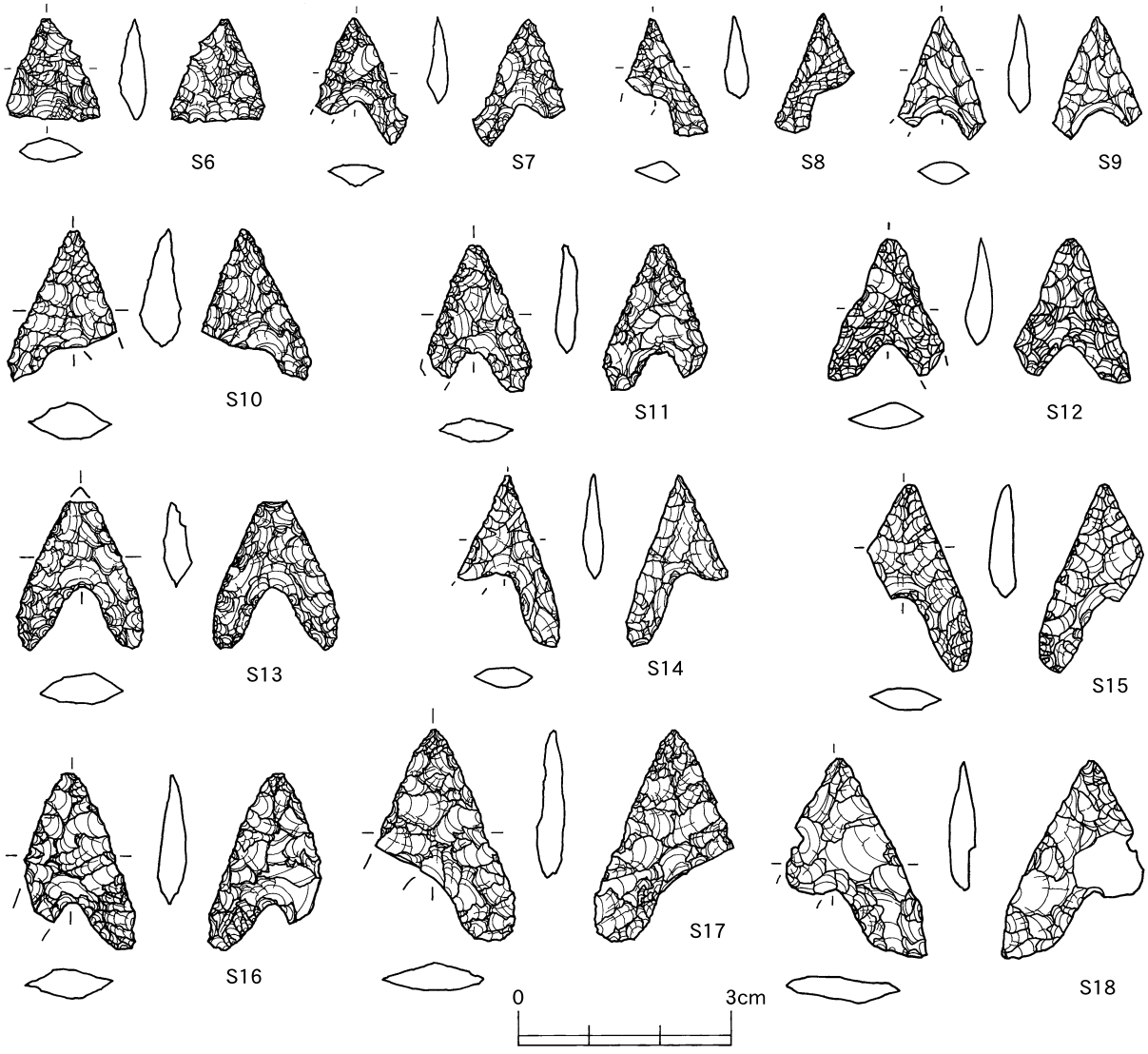
挿図	番号	区	層	取上番号	調整		色調		胎土						備考
					外面	内面	外面	内面	石英	長石	カクセン石	輝石	ウンモ	小礫	
19	109	９D	Ⅶ	一括	ナデ	ていねいなナデ	茶褐色	茶褐色	○	○			○	○	
	110	９D	Ⅶ	一括	ナデ	ていねいなナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	111	８D	Ⅶ	一括	ナデ	ていねいなナデ	茶褐色	茶褐色	○	○			○	○	
	112	10D	Ⅶ	一括	ナデ	ていねいなナデ	灰黄茶褐色	灰黄褐色	○	○				○	
	113	10D 10D	Ⅶ Ⅶ Ⅶ	417	ナデ	ナデ	黄茶褐色	灰茶褐色	○	○				○	
	114	５C	Ⅵ	12	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	○	○			○	○	
	115	８D	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	○	○				○	
	116	９D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	○	○				○	
	117	９C	Ⅵ	一括	ナデ	ケズリのちナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○	
	118	10D	Ⅶ	313	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	119	７D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	○	○	○			○	
	120	６C	Ⅵ	20	ケズリ	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○	○			○	
	121	９D	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○	○			○	
	122	11C	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○	○			○	
	123	10C	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	茶褐色	灰茶褐色	○	○				○	
20	124	９C ９C	Ⅶ Ⅵ	一括	ていねいなナデ	ていねいなナデ	茶褐色	黄茶褐色	○	○					
	125	９C ９C 10C	Ⅵ Ⅶ Ⅶ	一括	ていねいなナデ	ていねいなナデ	茶褐色	黄茶褐色	○	○					
	126	９C	Ⅶ	一括	ていねいなナデ	ていねいなナデ	茶褐色	黄茶褐色	○	○					
	127	８D	Ⅵ	一括	ていねいなナデ	ていねいなナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○				○	
	128	11D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	○	○				○	
	129	11D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	○	○				○	
	130	10D	Ⅵ	一括	ナデ	ていねいなナデ	黄茶褐色	明茶褐色	○	○	○			○	
21	131	12C	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	132	11D	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	133	11C	Ⅶ	414	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○	○			○	
	134	10D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	135	10D	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	灰茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	136	10D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	灰茶褐色	灰茶褐色	○	○			○	○	
	137	10D	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	138			一括	ナデ	ケズリのちナデ	黄茶褐色	灰黄茶褐色	○	○				○	
	139	10D	Ⅵ	一括	ナデ	ケズリのちナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	140			一括	ナデ	ナデ	茶褐色	黒褐色	○	○				○	
	141	10D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	142	10D	Ⅶ	一括	ナデ	ケズリのちナデ	茶褐色	黒褐色	○	○				○	
	143	10D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	○	○				○	
	144			一括	ナデ	ケズリのちナデ	茶褐色	黒褐色	○	○				○	
	145	10D 11D	Ⅶ	327 332	ナデ	ナデ	灰茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	146	10D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	明茶褐色	茶褐色	○	○				○	
	147	10D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○	
	148	12D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○			○	○	
	149	11D	Ⅵ	一括	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○			○	○	
	150	11D	Ⅶ	一括	ナデ	ナデ	灰黄茶褐色	暗茶褐色	○	○	○			○	
	151	10D	Ⅵ	312	ナデ	ケズリのちナデ	茶褐色	暗茶褐色	○	○				○	
	152	10D	Ⅵ	一括	ナデ	ケズリのちナデ	茶褐色	灰茶褐色	○	○				○	

2　石器

石器には打製石鏃・スクレイパー・打製石斧・局部磨製石斧・磨石・石皿がある。

1）打製石鏃（第22図・第23図S６～S26）

36点出土しており，９・10－Ｃ・Ｄ区付近に多い。いずれも無茎鏃だが，平基のもの，凹基のものがあり，圧倒的に凹基のものが多い。Ｓ６は正三角形をした平基のもので，長さ1.4㎝と小型である。Ｓ７～S24・S26は凹基のもので，ほとんどが深いものだが，S23・S24は浅い。片脚を欠いたものが多く，完全な形をしたものはS22・S24・S26だけである。また，先端部の欠けたものもS11～S13・S21・S25などがあり目立つ。Ｓ８は細かい剥離で，側縁がサメ歯状を呈する。S13やS14は表面がやや摩耗している。S18・S20・S23は加工が粗く，剥片鏃状となっている。S20は頂部とえぐり部分のみを細かく加工している。S19も加工が粗く，製作途中で片脚が折れた未製品の可能性もある。S22は長さ2.8㎝の長身鏃で，途中がややくびれている。茶がかった黄褐色を呈する玉髄を使用した華美な形態を呈している。S24は両側からの打撃が深く多角形状を呈している。S25・S26は分厚い作りで，S26は長さ3.7㎝と大型である。S25は脚部が丸くしており円



第22図　第１地点の石器(1)　石鏃

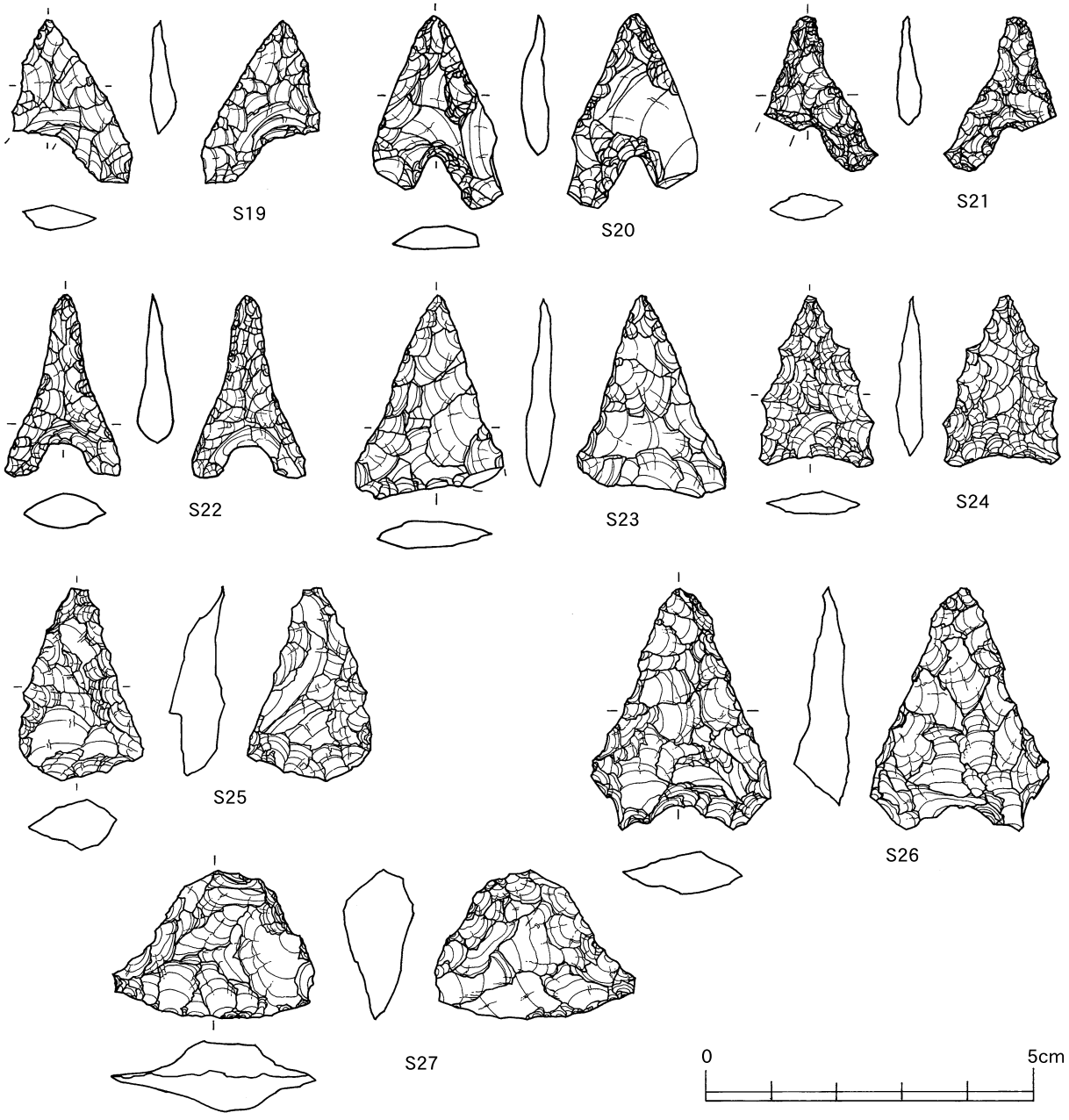
基状を呈している。石材はチャート・黒曜石・安山岩・玉髄があるが，チャートが多い。

２）スクレイパー（第23図・第24図Ｓ27・Ｓ28）

小型のものと中型のものとがある。Ｓ27は刃部が丸みをもったチャート製のもので，基部は分厚い。刃部も粗い加工である。Ｓ28は片面に自然面を広く残す縦４㎝，横6.5㎝，厚さ2.2㎝の隅丸長方形を呈する分厚い粘板岩の剥片を利用している。周辺から打ち欠いて形を整えて，長側辺の一辺を刃部としている。短側辺の一辺にはえぐりらしきものもあるが，はっきりしない。刃部も分厚い。

３）打製石斧（第24図Ｓ29）

頭部のみの破片であるが，粘板岩の薄い剥片を利用したもので，頭部は丸みをおびている。



第23図　第１地点の石器⑵　石鏃・スクレイパー

４）局部磨製石斧（第24図Ｓ30）

長さ14.7㎝，幅6.2㎝，厚さ3.9㎝の分厚い安山岩製のものである。周辺の敲打によって形を整え，表面をていねいにみがき蛤刃状の刃をこしらえている。刃部がやや狭くなっている。

５）磨石（第24図・第25図Ｓ31～Ｓ42）

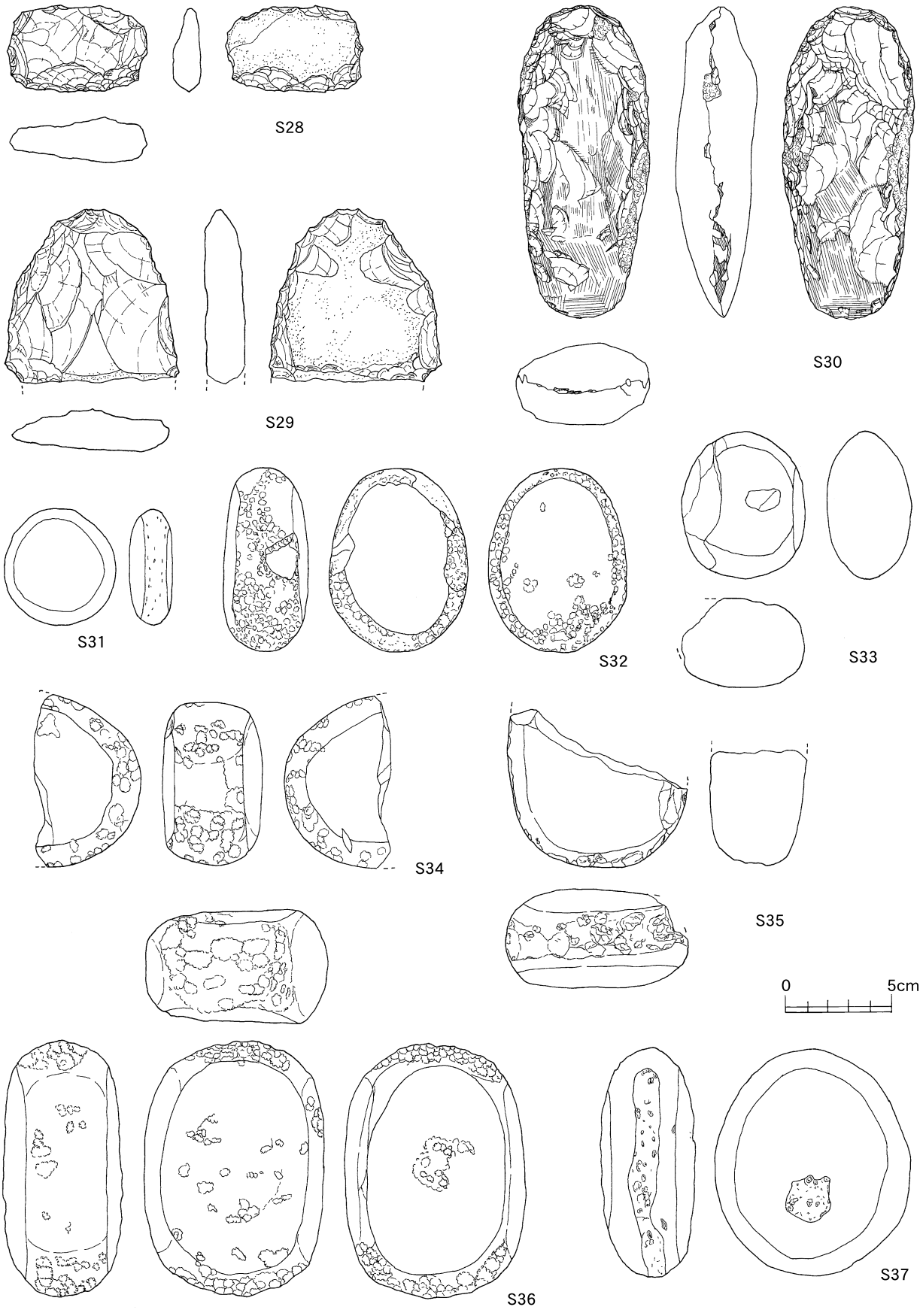
12点出土しているが，10Ｄ区に集中している。円形のもの，楕円形のもの，石けん形のものとがあり，分厚いものや薄いものがある。大きさも様々である。欠損しているものもあり，敲石兼用のものもみられる。石材は花崗岩・安山岩・砂岩があり，安山岩製が多い。

６）石皿（第25図Ｓ43～Ｓ45）

両面使用したものと（Ｓ43・Ｓ45）と片面使用のものがある。Ｓ43は砂岩，Ｓ44・Ｓ45は安山岩

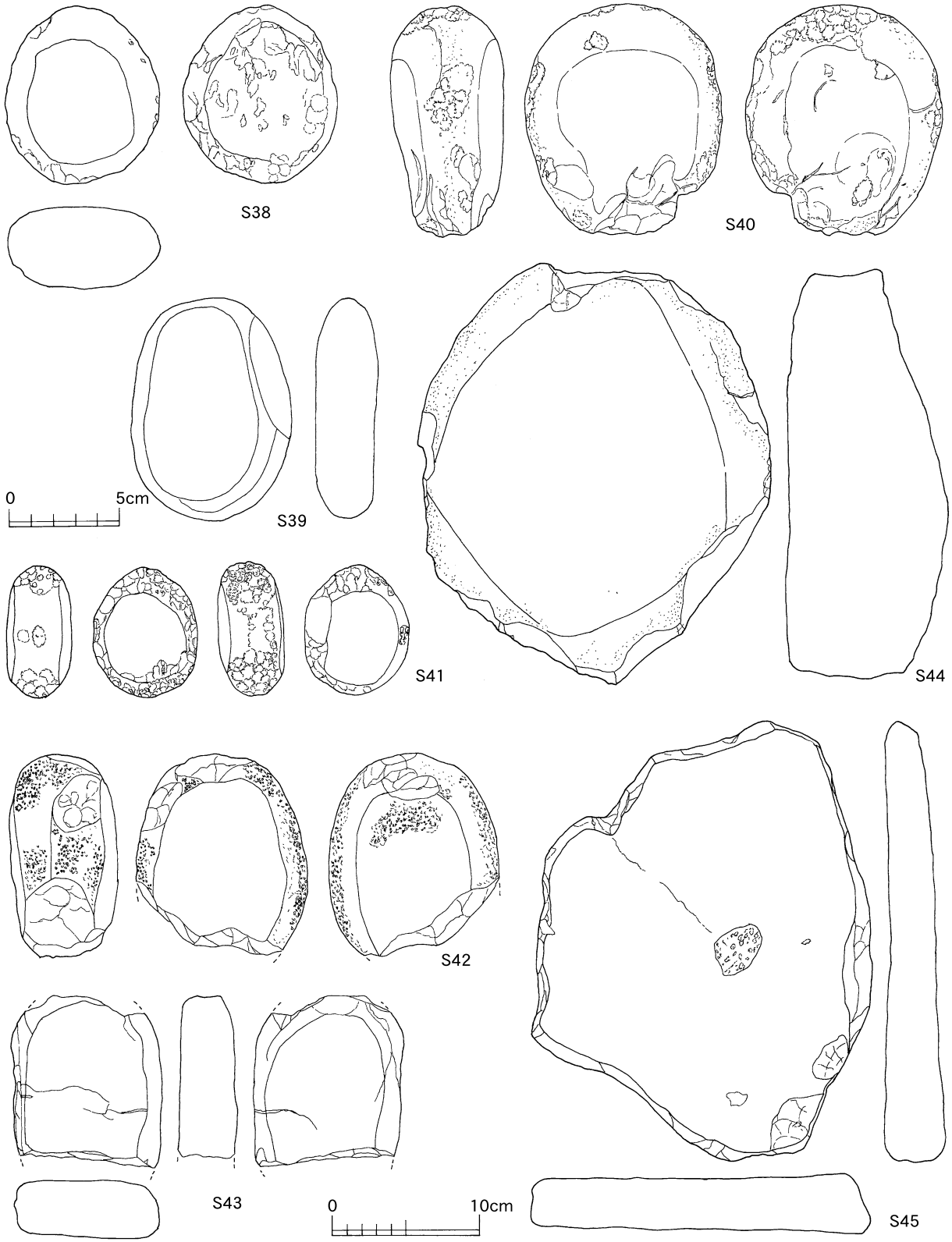
第５表　第１地点の石器観察表

番	器　種	出土区	層	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	備　考
6	石　鏃	10C	Ⅵ	黒曜石	1.4	1.3	0.4	0.46	
7	石　鏃	10C	Ⅵ	黒曜石	1.8	(1.2)	0.3	0.36	片脚折れ
8	石　鏃	9 C	Ⅶ	チャート	1.7	(1.1)	0.3	0.28	片脚折れ
9	石　鏃	8 C	Ⅵ	安山岩	1.8	(1.2)	0.3	0.4	片脚折れ
10	石　鏃	9 D	Ⅶ	チャート	2.1	(1.5)	0.5	0.98	片脚折れ
11	石　鏃	9 D	Ⅵ	安山岩	(2.0)	(1.4)	0.3	0.7	片脚・先端部折れ
12	石　鏃	7 D	Ⅵ	チャート	(2.0)	(1.6)	0.4	0.72	片脚・先端部折れ
13	石　鏃	7 D	Ⅵ	安山岩	(2.1)	1.8	0.5	0.99	先端部折れ
14	石　鏃	9 D	Ⅶ	チャート	2.4	(1.4)	0.3	0.57	片脚折れ
15	石　鏃	9 D	Ⅵ	チャート	2.6	(1.4)	0.3	0.77	片脚折れ
16	石　鏃	10C	Ⅶ	チャート	2.5	(1.5)	0.4	1.16	片脚折れ
17	石　鏃	7 D	Ⅵ	チャート	3.0	(2.0)	0.4	1.33	片脚折れ
18	石　鏃	9 D	Ⅵ	チャート	2.8	(2.0)	0.4	1.19	片脚折れ
19	石　鏃	6 D	Ⅵ	チャート	2.5	(1.8)	0.4	1.04	片脚折れ
20	石　鏃	5 C	Ⅵ	チャート	3.0	(2.0)	0.4	1.79	片脚折れ
21	石　鏃	4 D	Ⅵ	チャート	(2.4)	(1.7)	0.4	0.83	片脚・先端部折れ
22	石　鏃	10C	Ⅶ	玉髄	2.8	1.7	0.5	1.06	
23	石　鏃	9 D	Ⅵ	チャート	3.0	(2.3)	0.4	1.99	片脚折れ
24	石　鏃	4 D	Ⅵ	チャート	2.6	1.7	0.4	1.45	
25	石　鏃	12C	Ⅵ	安山岩	(2.9)	1.9	0.8	3.13	先端部折れ
26	石　鏃	9 D	Ⅶ	チャート	3.7	2.7	0.8	5.55	
	石　鏃	4 C		黒曜石	1.7	(1.3)	0.4	0.56	片脚折れ
	石　鏃	4 C		チャート	2.4	(1.8)	0.4	1.22	片脚折れ
	石　鏃	4 C		チャート	1.6	1.4	0.3	0.57	平基
	石　鏃	4 C		チャート	1.9	2.0	0.3	1.27	未製品
	石　鏃	6 C	Ⅵ	黒曜石	1.9	(1.3)	0.3	0.42	片脚折れ
	石　鏃	9 C	Ⅶ	チャート	(2.0)	(1.9)	0.3	0.65	両脚折れ
	石　鏃	10C	Ⅶ	黒曜石	2.7	(1.9)	0.5	1.76	平基
	石　鏃	4 D	Ⅵ	チャート	2.6	(1.5)	0.4	1.01	片脚折れ
	石　鏃	4 D	Ⅵ	チャート	(1.9)	(1.3)	0.3	0.66	両脚折れ
	石　鏃	10D	Ⅶ	チャート	2.5	(1.1)	0.3	0.77	平基，半欠
27	スクレイパー	8 D	Ⅵ	チャート	2.2	3.0	1.1	5.06	
28	スクレイパー	10C	Ⅶ	粘板岩	4.1	6.6	2.2	48	
29	打製石斧	10C	Ⅶ	粘板岩	(8.2)	8.2	1.9	156	頭部
30	局部磨製石斧	3 C	Ⅶ	安山岩	14.7	6.2	3.9	460	
	磨製石斧	9 D	Ⅵ	粘板岩	(3.8)	(2.7)	(0.4)	4.51	欠損品
31	磨　石	9 C	Ⅶ	砂岩	5.5	5.2	2.1	84	
32	磨　石	10D	Ⅶ	安山岩	8.6	6.5	4.0	314	
33	磨　石	10D	Ⅶ	砂岩	6.9	5.8	4.2	199	
34	磨　石	10D	Ⅶ	安山岩	8.1	(5.0)	4.7	261	半欠
35	磨　石	10D	Ⅶ	安山岩	(7.4)	8.4	4.6	309	半欠
36	磨　石	5 C	Ⅶ	安山岩	12.0	8.4	5.5	930	
37	磨　石	10D	Ⅶ	安山岩	10.7	9.1	4.4	620	
38	敲　石	10D	Ⅶ	花崗岩	8.1	6.9	3.7	274	
39	敲　石	10D	Ⅶ	花崗岩	10.1	7.2	2.8	323	
40	磨石・敲石	10D	Ⅵ	花崗岩	10.4	8.9	5.1	640	
41	磨石・敲石	11D		花崗岩	6.0	4.8	2.9	119	
42	磨石・敲石	10D	Ⅶ	安山岩	9.1	7.8	4.9	465	欠損
43	石　皿	7 D	Ⅵ	砂岩	11.7	10.2	4.0	816	両面使用，半欠品
44	石　皿	6 C	Ⅵ	安山岩	28.7	23.8	10.8	6800	片面使用
45	石　皿	10C	Ⅶ	安山岩	29.8	23.2	4.2	3400	両面使用



第24図　第１地点の石器(3)　スクレイパー・石斧・磨石

製である。S43は半欠品で幅が10㎝ほどしかない。細長いものである。S44は完形品で，使用していないほうは丸みをおびて厚く，上面は周辺へ向かってやや下降している。S45は扁平なもので，あと一方のほうは面がややでこぼこしている。



第25図　第１地点の石器⑷　磨石・敲石・石皿

第３章　近代

遺跡は戦時中，航空隊のあった地の隣接地に位置し，さらに当時も市街地周辺であったことから，周辺には多くの防空壕が存在しているとともに，多くの空襲を受けていることから砲弾が打ち込まれていることが予測できた。防空壕跡は工事計画時に調査し，その処置はしてあった。周辺の山林では地面が沈み込んでいる場所もみられる。

調査では，８～10－Ｃ・Ｄ区で爆弾破裂跡が４か所発見された。これも第２次世界大戦時のもので，検出状況の写真を佐賀陸上自衛隊爆発物処理係へ送って調べてもらったところ，これは10kg爆弾で，すでに爆発しているということがわかった。

４か所は約20m×30mの範囲に集中している。

１　爆弾破裂跡１号

７Ｄ区で検出された遺構で，検出面では直径４ｍほどの円形をしている。検出面では同心円状に埋土があり，中央は現在の耕作土よりやや黒みが強い黒灰褐色土である。量は少ないが砂質土を含んでいる。その外はアカホヤ火山灰層のかたまりが多く含まれる黒褐色土で，鉄の砂片が含まれている。その外は黒色土，さらに橙色火山灰となり，橙色火山灰中には多くの鉄くずが含まれている。断面は逆台形をしており，底は直径1.7mほどの略円形をしている。中には爆弾の破片が多量含まれているが，特に壁に近いほど多くなる。

２　爆弾破裂跡２号

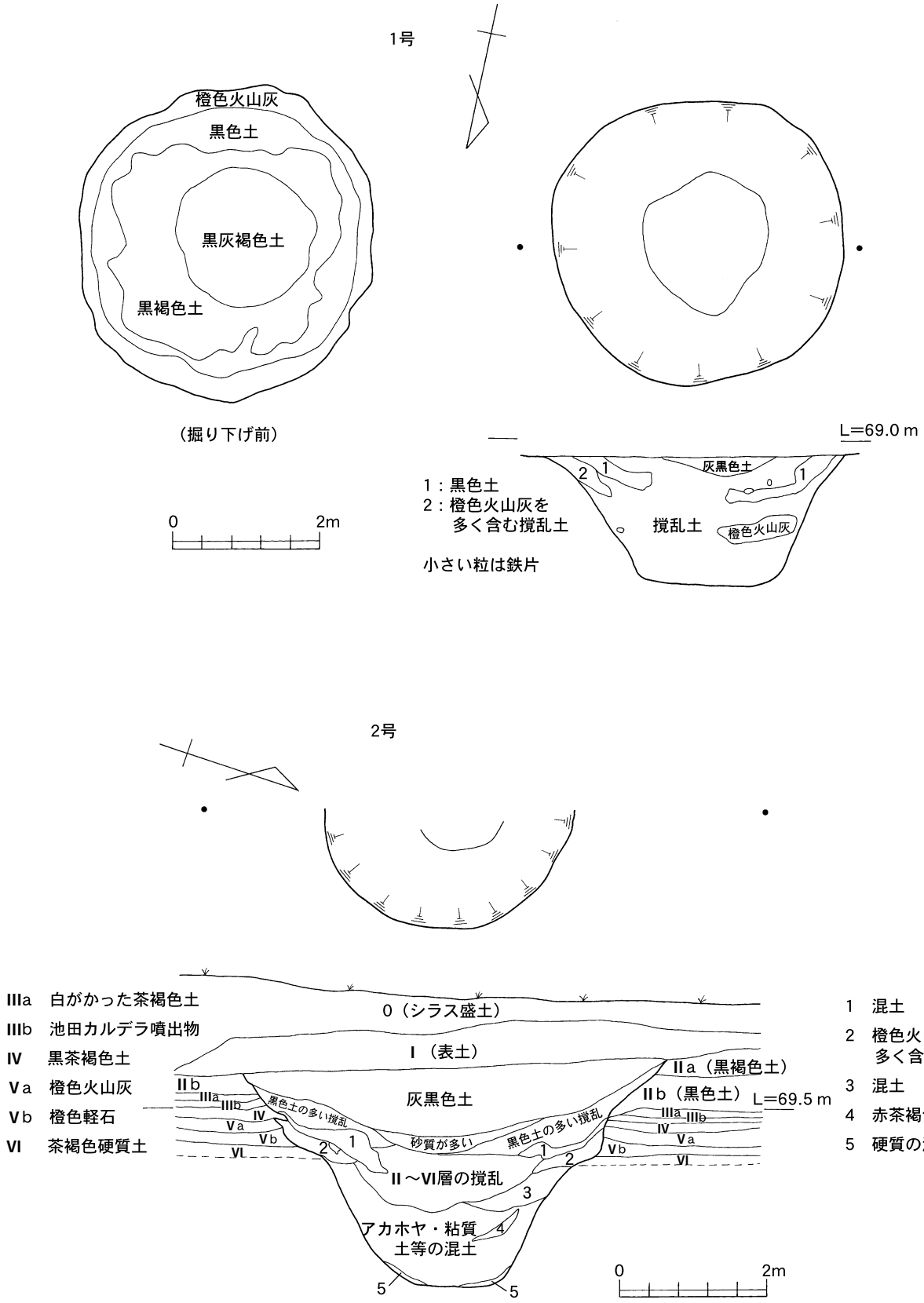
８Ｃ区の西壁に接して検出されたため，東半分しか調査できなかった。検出面では直径3.4mほどの円形をしているが，本来は直径５ｍほどであったことが予測できる。底は直径1.1mほどとなっている。深さは約３ｍあり，Ⅱ層からⅥ層までの土が混ざっている。底から1.8mの間は土のまざり具合から爆発直後，あるいは同時に埋もったようで多くの鉄片がはいっているが，鉄片が多いのは中央付近で，中でも中央部のやや厚い部分である。そのあと除々に埋もったようで，中央の窪みには砂の層がある。その上には白色の軽石を多く含む灰黒色土が厚く堆積している。

３　爆弾破裂跡３号

９Ｄ・Ｅ区の東端，壁際にあり，４分の１ほどは調査区外にある。検出面（Ⅵ層上面）での直径は約3.7mで，底は直径0.9mほどである。元々は直径５ｍ，深さ2.4mほどの穴である。下部はⅡ～Ⅵ層の土が混在した層だが，上のほうは黄褐色・茶褐色・黒褐色・黒色等のブロック状をした硬質土が主体となる土で，シラスなどの砂質土もあることから，自然堆積でなく，人為的に埋めたものと思われる。

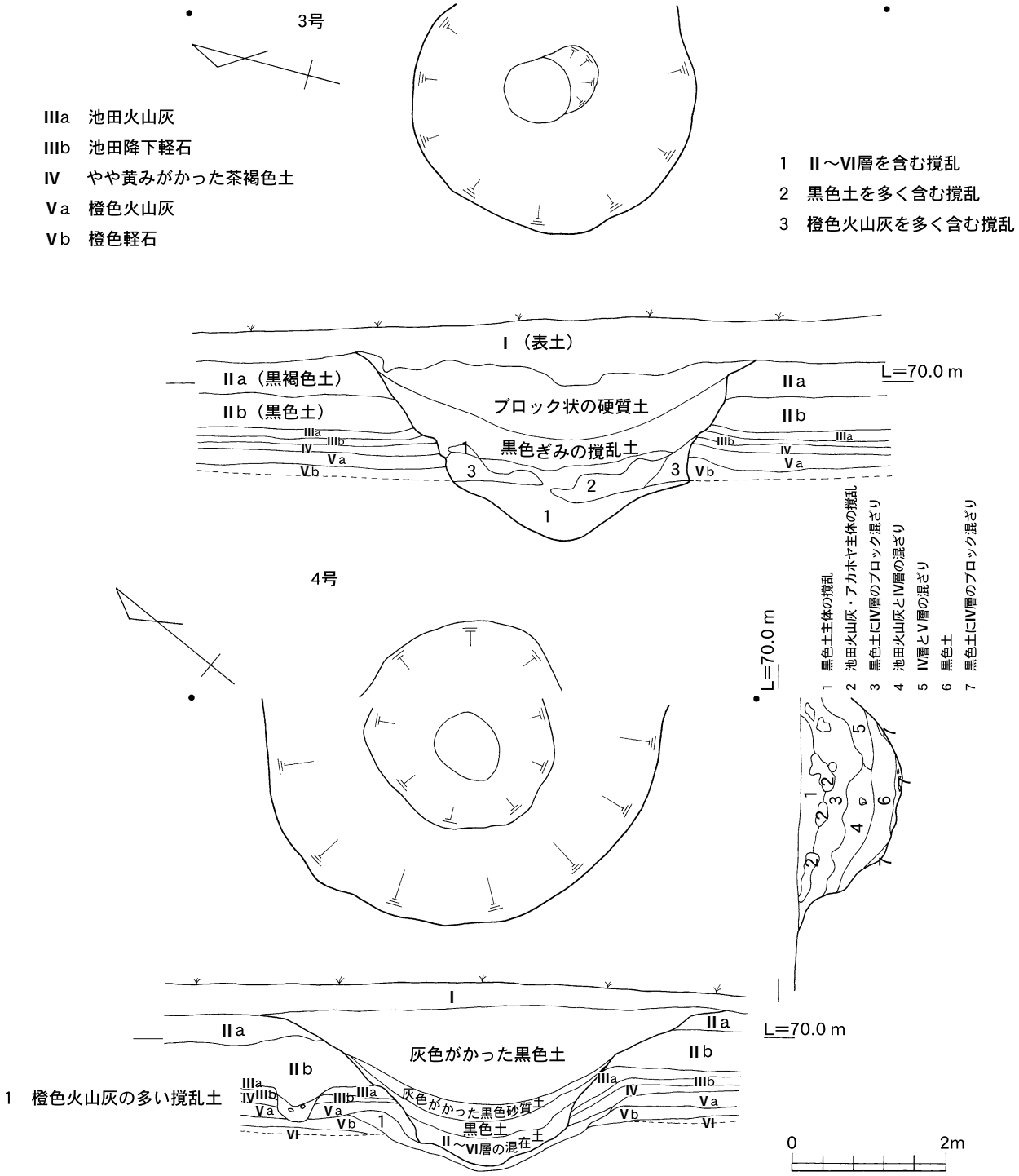
４　爆弾破裂跡４号

９Ｃ区の東端，壁際にあり，一部は調査区外にある。上面の直径５ｍ，底の直径0.8mの穴で，深さ2.1mである。底のほうから60㎝ほどはⅡ～Ⅵ層の土が混在した土や橙色火山灰を多く含む撹乱土などで，これには多くの鉄片が含まれている。その上には水の作用を受けた砂質土があり，長い間窪地として残っていた様子がうかがえる。その上には最も厚い所で1.2mある，灰色がかった黒色土があり，この層には軽石が混在し，鉄片も含まれている。北側断面でみると鉄片は下になるほど多くなり，底は鉄片のサビで茶褐色を呈している（Ⅶ層）。１号にみられたほど大きな破片はなかったようである。この穴の脇には幅0.5mのⅡｂ層のくぼみがあり，爆発時にできた窪みの可



第26図　第１地点の爆弾破裂跡(1)

能性がある。この穴でも下部が爆発直後に埋まったもので，自然堆積層がブロック状に堆積し，その上は人為的に埋めたようである。



第27図　第１地点の爆弾破裂跡(2)

Ⅴ　第２地点

第１章　発掘調査の概要

第２地点は第１地点に続く同じ台地の北側に位置しているが，バイパス用地でみると，その間に西側から谷がはいっている。

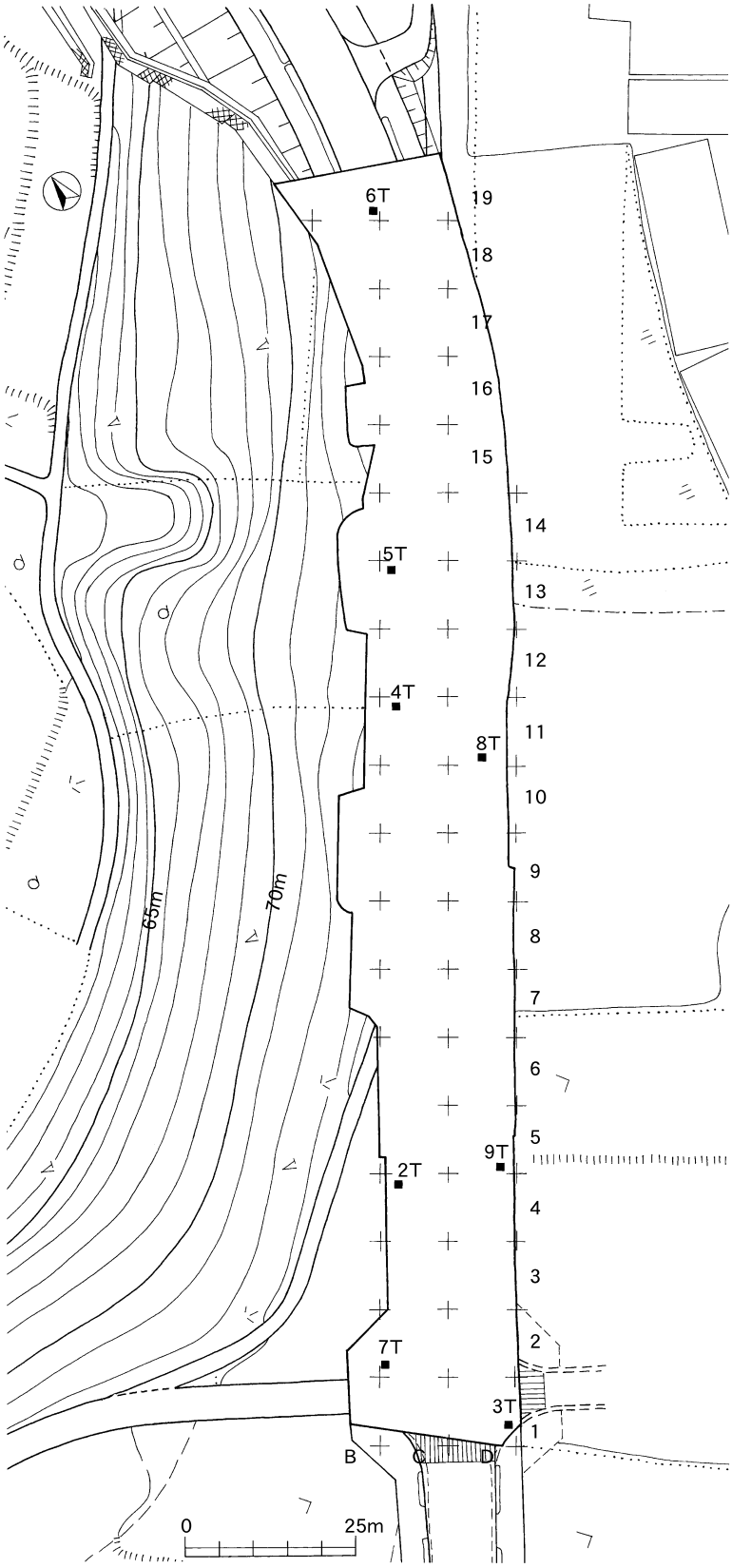
調査地点は台地の西端近くにあたり，標高約74m～76mのほぼ平坦地である。

確認調査の結果を受けて，第Ⅵ層から第Ⅶ層にかけての縄文時代早期遺物包含層を中心に本発掘調査は実施された。

測量基準として，施工計画図のセンター杭№32と№33の２点間を結ぶ線を基軸に，南北方向に１・２・３‥‥，東西方向にＡ・Ｂ・Ｃ‥‥，とする10m間隔の調査用区割り（グリッド）を設定して実施した。なお，レベル原点は，同じく施工計画路線内のＫＢＭ３（Ｈ＝73.172m）を基準として利用した。

調査方法としては，重機（バックホウ）によって表層，あるいは無遺物層を除去した後，Ⅵ層から人力（山鍬・手鎌・ジョレン）による掘り下げを実施し，Ⅷ層（薩摩火山灰層）上面までを調査した。また，各遺物包含層上面では遺構検出作業を行い，検出遺構については段階的に移植ゴテ等を使って掘り下げ，写真撮影，実測図作成を行った。

調査の結果，縄文時代早期の石



第28図　第２地点の全体図

坂式土器，下剥峯式土器，辻タイプ，桑ノ丸式土器，押型文土器，打製石鏃，磨製石斧，磨石，石皿，黒曜石，頁岩片等が出土し，同時期のものと考えられる集石６基が検出された。

また，第Ⅵ～第Ⅶ層にかけて，縄文時代早期のものと考えられる石片のブロックが３基検出された。石材は黒曜石を中心に頁岩や石英質のものが見られ，同質の石材を使用した未製品の石鏃も数点出土していることから，打製石鏃を中心とした石器製作跡と考えられる。

第２章　縄文時代

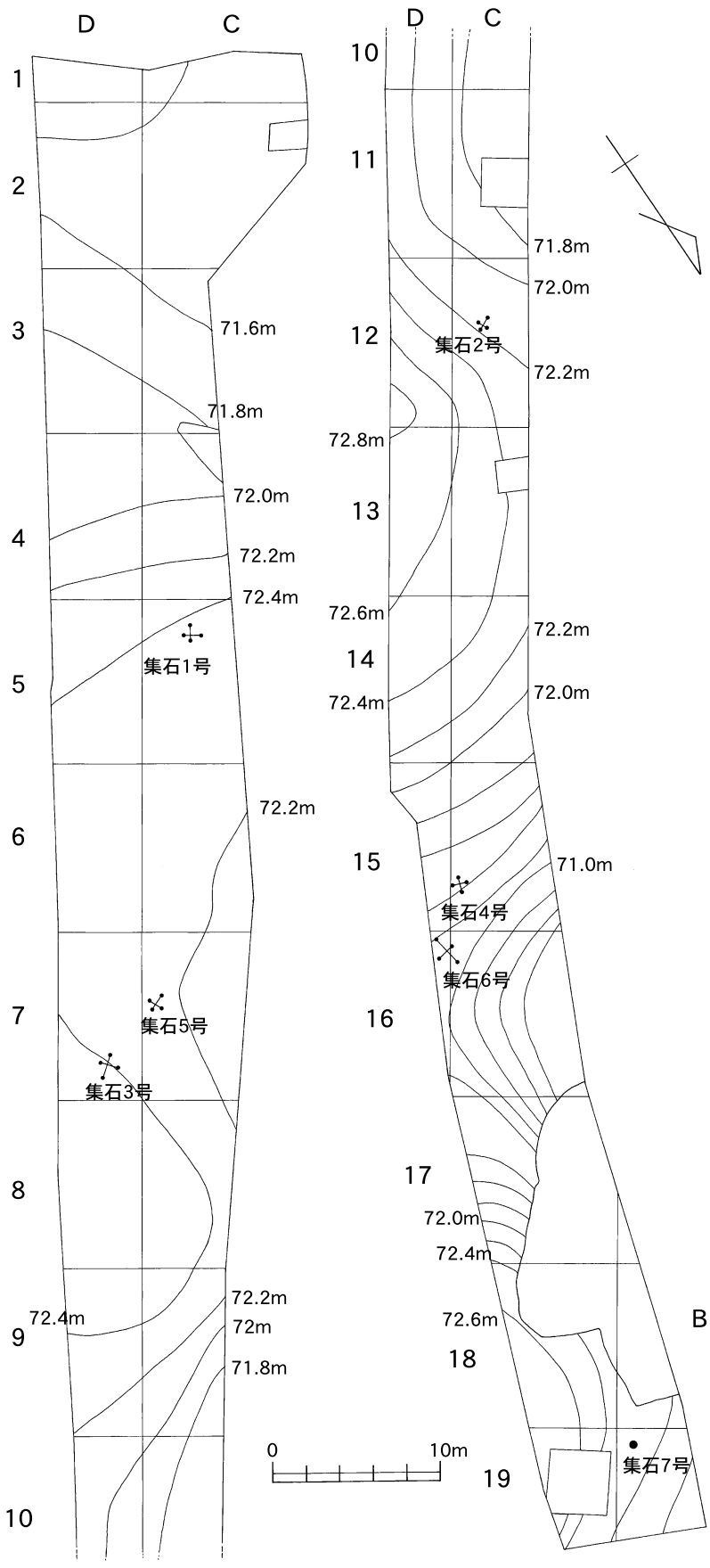
早期の集石遺構が６基，石片のブロック３基が検出され，土器・石器が出土している。

第１節　遺構

集石遺構６基がある。５Ｃ区に１基，7Ｃ・Ｄ区に２基，12Ｃ区に１基，15・16－Ｃ・Ｄ区に２基と第１地点に比べて散在している。ほとんど同じ面にあるが，北側の４・６号がやや下がっている。なお，確認調査の６トレンチ（19Ｂ区）でも集石が１基発見されている。集石遺構７号と呼ぶ。

１　集石遺構１号（第31図Ｓ46・Ｓ47）

５Ｃ区で検出された集石遺構で，90㎝×180㎝の範囲に15個の石が平坦に散在している。礫はほとんどが砂岩円礫で割れているものが多い。中に石皿２個が含まれている。石皿はともに花崗岩製の



第29図　第２地点の縄文時代遺構配置図

破片で，S46は四方を欠いているが，S47は端部の破片で，ともに両面を使用しているが，くぼんではいない。厚さはS46が8.5㎝，S47が5.8㎝である。

2　集石遺構２号（第31図）

12C区で検出された集石遺構で，40㎝×55㎝の範囲に15個の石がまとまって存在している。掘り込みはなく，周辺には少量の炭化物がある。人頭大の石を含み，石の多くは破砕しており凝灰岩・砂岩などであり，人工遺物は含まれていない。

3　集石遺構３号（第31図S48）

７D区で検出された集石遺構で，１m四方の範囲に挙大の円礫63個がほぼ平坦にまとまっている。砂岩と凝灰岩が多く，炭化物がまばらにある。中に石皿が１点含まれている。石皿（S48）は花崗岩製で四方を欠いている。厚さは6.6㎝で，片面のみを使用しているが，くぼんではいない。

4　集石遺構４号（第32図）

15C区で検出された集石遺構で，60㎝四方の範囲に集中し，２個だけが少し離れて存在している。安山岩・砂岩など40個位の石から成っているが，安山岩が圧倒的に多い。深さ15㎝～25㎝の掘り込みがあり，石は底まではいっている。人工遺物はない。

5　集石遺構５号（第32図）

７C区で検出された集石遺構で，70㎝四方の範囲に13個の石が散在しているが，中央の30㎝×40㎝の範囲に９個が集中している。砂岩円礫と安山岩角礫から成る。掘り込みはなく，人工遺物も含まれていない。

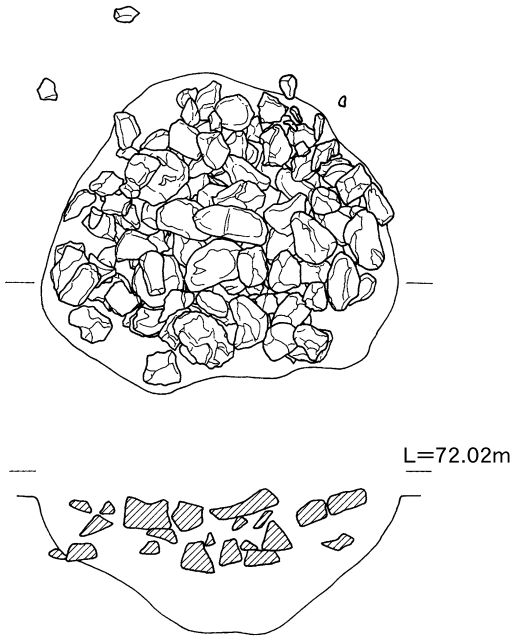
6　集石遺構６号（第32図153）

16C・D区で検出された集石遺構で，90㎝×170㎝の範囲にやや大きい15個の石が散在している。安山岩・凝灰岩・砂岩などの円礫・角礫から成り，破砕しているものが多い。掘り込みはなく，平坦である。

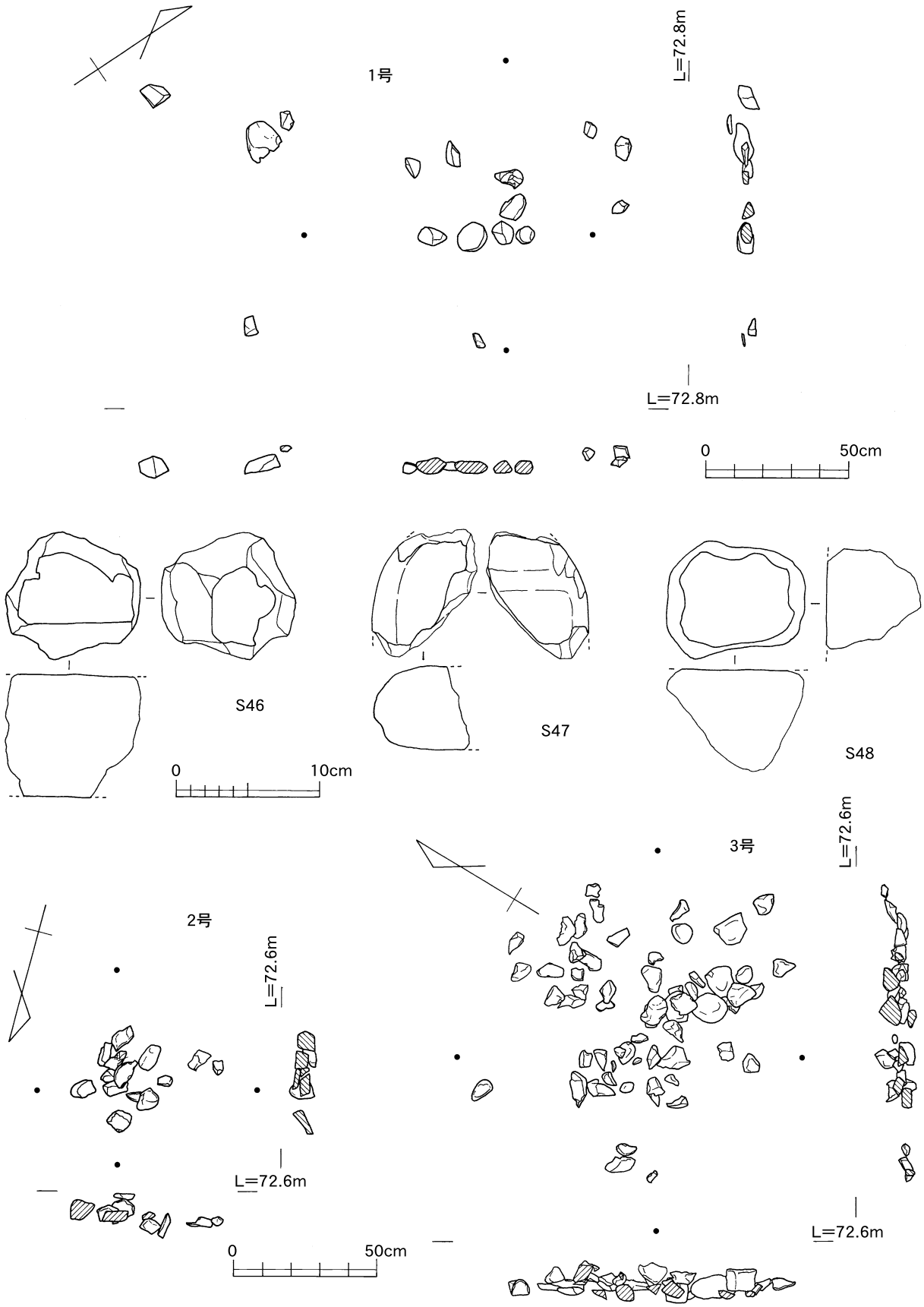
土器が１点含まれている。深鉢の丸みをもった平底で，直径が6.8㎝ある。胴部の外面は縦方向の二枚貝条痕であるが，底はヘラナデである。内面はやや磨滅しているが，横方向のヘラナデである。外面は淡茶褐色，内面は黒褐色を呈し，焼成度は普通である。石英・黄白色石・白色石などの細かい石を多く含んでいるが，６㎜大の石もある。

7　集石遺構７号（第30図）

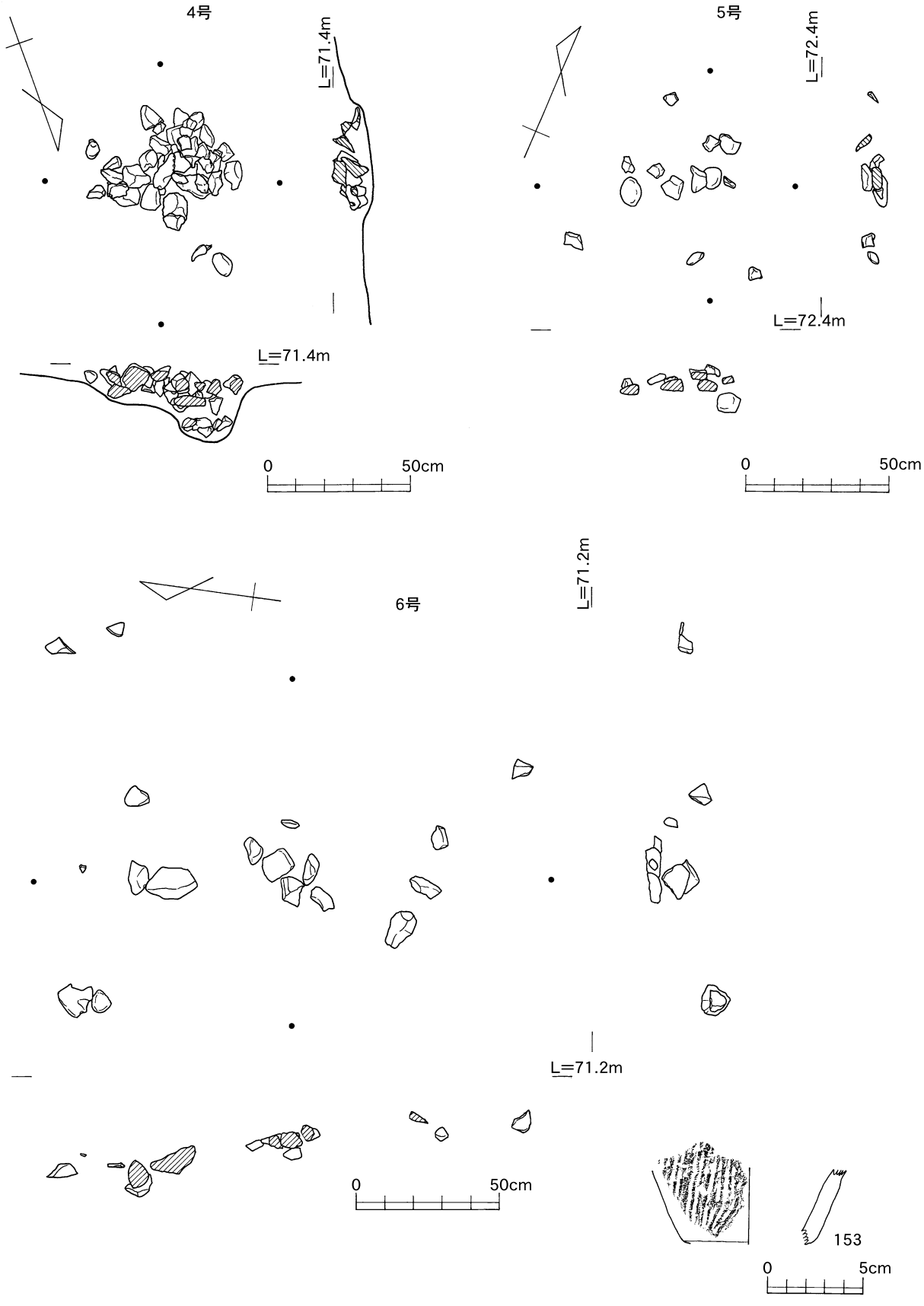
19B区で検出された集石遺構で，75㎝×90㎝の範囲に154個の石が集中しており，深さ30㎝の掘り込みがある。人頭大のもの・挙大のものもあるが，破砕礫が多く，人工遺物はない。（第30図は『鹿屋市埋文報』71から作図）



第30図　第２地点の集石遺構７号



第31図　第２地点の集石遺構１号～３号と出土石器



第32図　第２地点の集石遺構４号～６号と出土土器

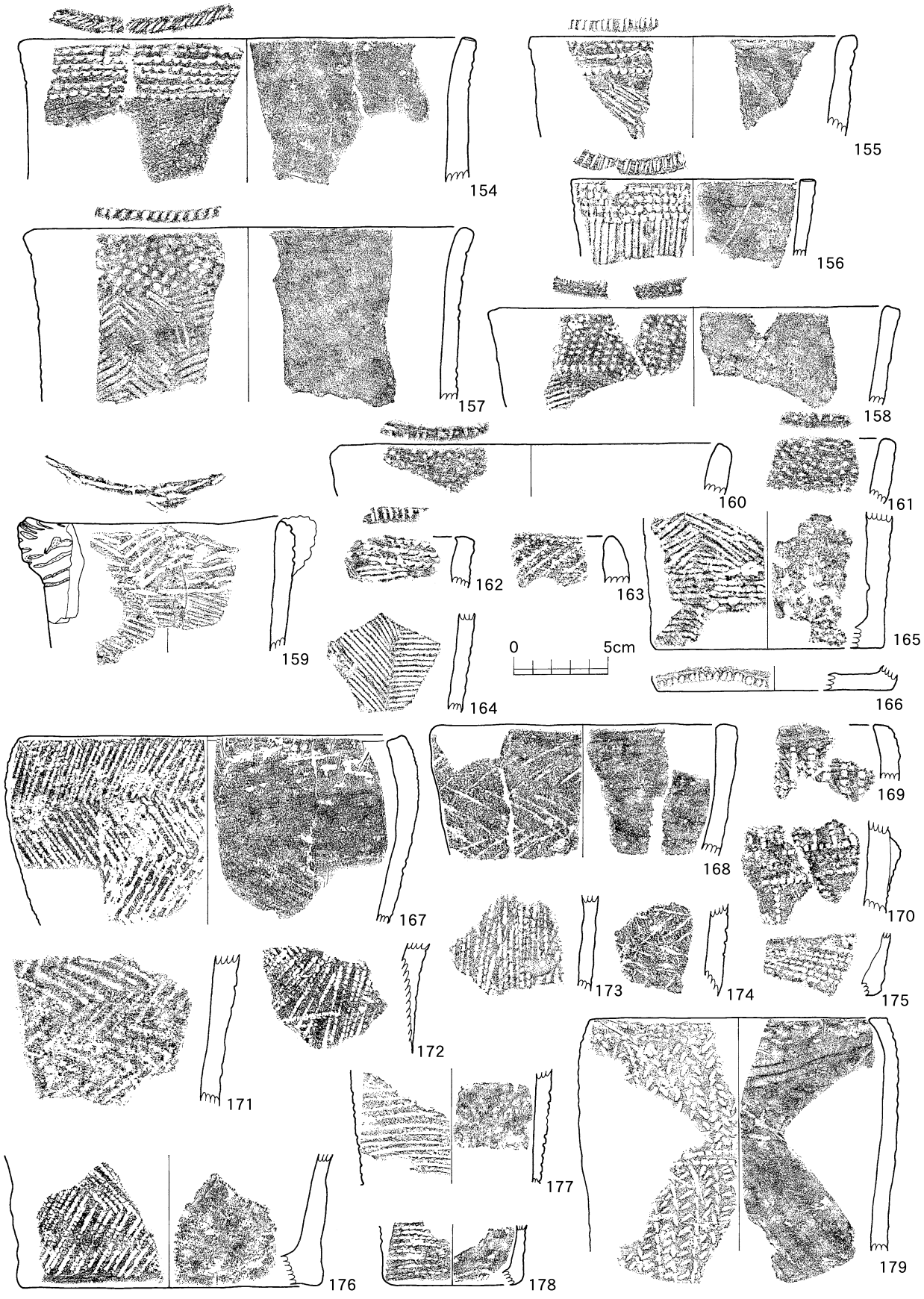
第２節　遺物

１　土器（第33図・第34図，154～197）

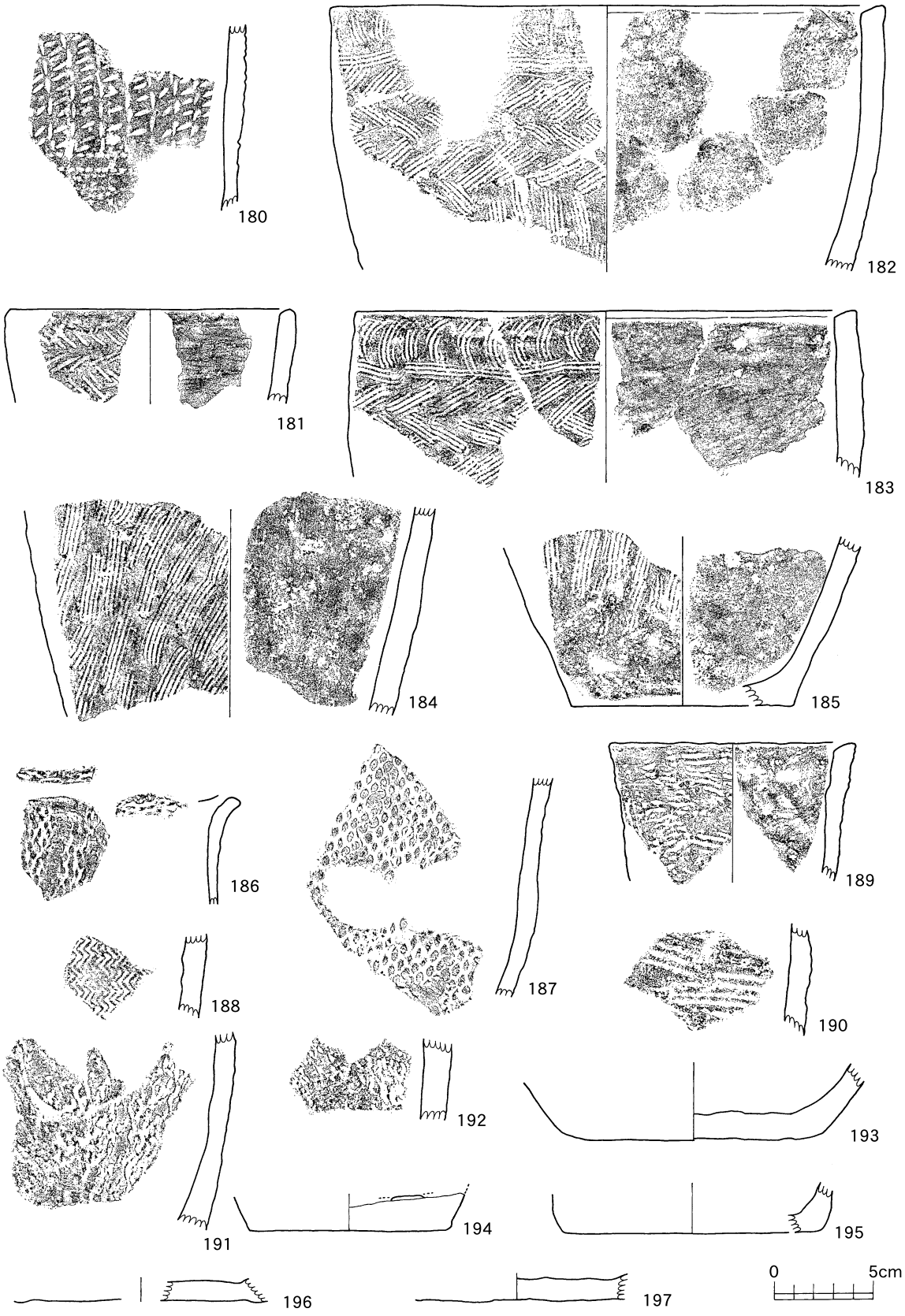
154～166は，胴部に貝殻綾杉文を施すものである。口縁部は直行ないしわずかに外反する。159は瘤状突起が付く。167～178は，胴部に貝殻刺突文を施すものである。器形は，口縁部が内傾するものや直行するものなどがある。170のように口縁部下位に瘤状突起が付着するものも見られる。167は，口縁部文様帯部分にススが付着している。177・178は色調等の特徴から同一個体と思われる。179・180は，貝殻刺突文と短沈線文による羽状文とを同一器面上に施文するものである。181～185は，短い貝殻条痕文を羽状に施すものである。器形は，口縁部が内傾する。182～185は，同一個体の可能性がある。186～188は，押型文土器である。楕円文の186・187，山形文の188とがある。189・190は，短い貝殻条痕文が施される。191・192は，粗い撚糸文を施すものである。193～197は，上記154～192に分類できなかった底部片を一括している。

第６表　第２地点の縄文土器観察表(1)

挿図	番号	区	層	取上番号	調整		色調		胎土							備考
					外面	内面	外面	内面	石英	長石	カクセン石	輝石	ウンモ	小礫	その他	
33	154	4 D 4 D	VI VI	245 246	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○		
	155	3 C	VI	446	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○		
	156	3 D 4 D	VI VI	460 232	ナデ	ナデ	赤茶褐色	暗茶褐色	○	○				○		
	157	3 C	撹乱	－	ナデ	ナデ	暗褐色	暗褐色	○	○				○		
	158	2 C 3 D	VI	92 328	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○		
	159	1 C	VI	3	ナデ	ケズリ	赤茶褐色	暗茶褐色	○	○				○		
	160	1 C	VI	71	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○		
	161	3 C	VI	218	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○		
	162	3 C	VI	442	ナデ	ナデ	灰茶褐色	灰茶褐色	○	○				○		
	163	8 D	Ⅶ	1696	ナデ	ナデ	赤茶褐色	灰茶褐色	○					○		
	164	3 C	VI	225	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○		
	165	4 C 3 C	VI	466 435	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○		
	166	3 C	VI	175	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○		
	167	2 C 2 C 3 D	VI	40 105 547	ナデ	ていねいなナデ	赤茶褐色	暗茶褐色	○	○			○	○		
	168	5 C	VI	481 483	ナデ	ていねいなナデ	灰黄茶褐色	灰茶褐色	○	○			○	○		
	169	5 C 5 D	VI	470 512	ナデ	ていねいなナデ	茶褐色	茶褐色	○	○			○	○		
	170	5 C	VI	469 473	ナデ	ナデ	赤茶褐色	灰茶褐色	○	○			○	○		
	171	8 D	VI	1275	ナデ	ナデ	赤茶褐色	黒褐色	○	○			○	○		
	172	3 C	VI	183	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○			○	○		
	173	7 C	VI	931	ナデ	ナデ	茶褐色	灰褐色	○	○			○	○		
	174	5 C	VI	480	ナデ	ナデ	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	○	○			○	○		
	175	3 C	VI	173	ナデ	－	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○			○	○		
	176	3 C	VI	423	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○			○	○		
	177	13D	VI	1195	ナデ	ナデ	黄茶褐色	灰茶褐色	○	○			○	○		
	178	13D	VI	1161	ナデ	ナデ	灰茶褐色	灰茶褐色	○	○			○	○		
	179	16C	VI	1364 1366	ナデ	ていねいなナデ	茶褐色	灰褐色	○	○				○		
34	180	15C 16C	VI	1363 1367	ナデ	ていねいなナデ	茶褐色	灰褐色	○	○			○	○		
	181	2 C	VI	538	ナデ	ていねいなナデ	灰茶褐色	暗茶褐色	○	○			○	○		
	182	3 C 3 D	VI	145 147 148 151 160 330	ナデ	ケズリのちナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○		



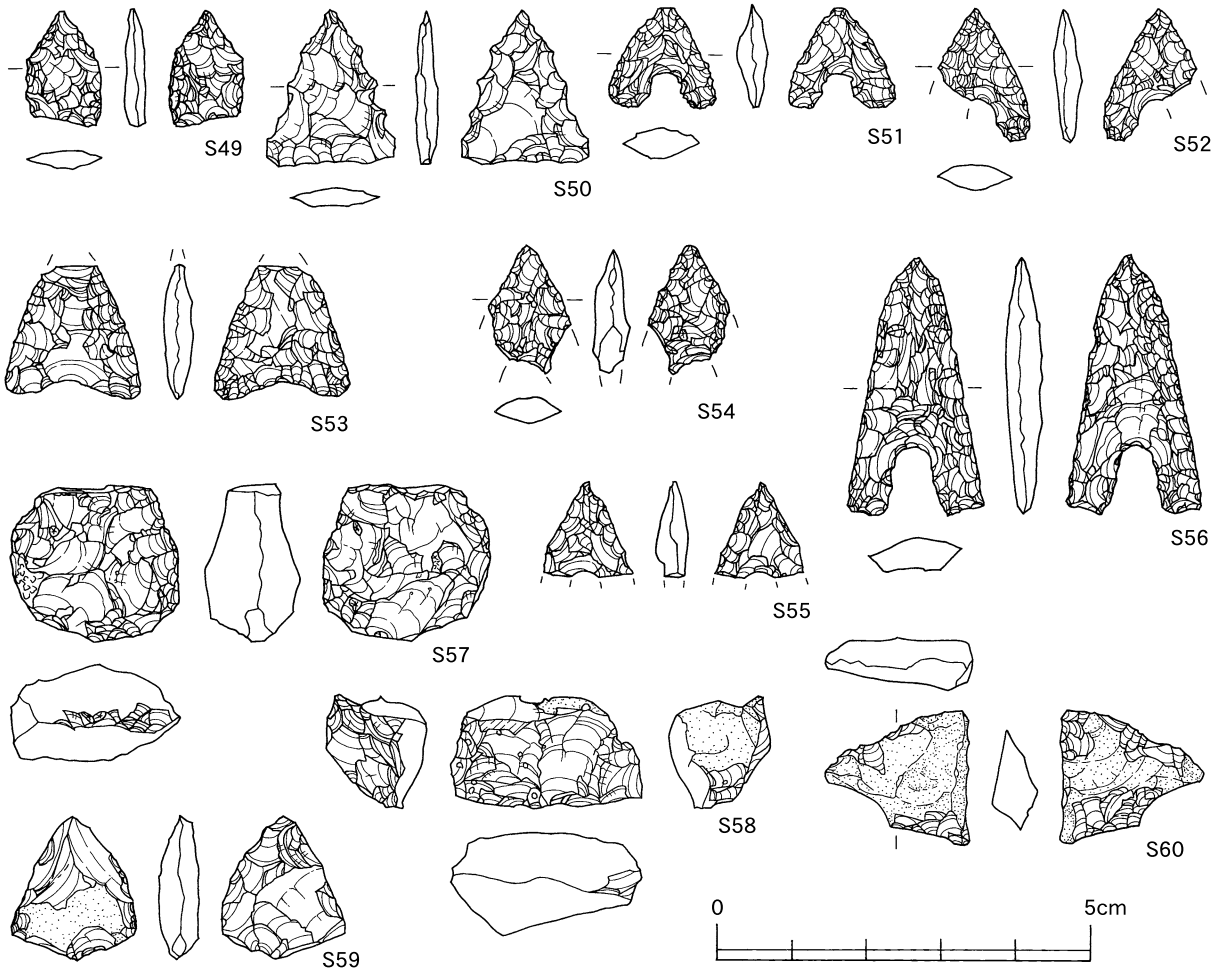
第33図　第２地点の縄文土器(1)



第34図　第２地点の縄文土器(2)

第７表　第２地点の縄文土器観察表(2)

挿図	番号	区	層	取上番号	調整		色調		胎土							備考
					外面	内面	外面	内面	石英	長石	カクセン石	輝石	ウンモ	小礫	その他	
34	183	12C	VI	1633 1595	ナデ	ケズリのちナデ	暗褐色	暗赤茶褐色	○	○				○		
	184	12C	VI	1600	ナデ	ケズリのちナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○		
	185	12C	VI	1602 1607	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○		
	186	13G	VI	1160	ナデ	ナデ	灰茶褐色	灰茶褐色	○	○			○	○		
	187	2C	VI	47 61	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○		
	188	19B	VI	629	ナデ	ナデ	灰茶褐色	灰茶褐色	○	○				○		
	189	16C	VI	1357 1384	ナデ	ケズリのちナデ	赤茶褐色	暗茶褐色	○	○				○		
	190	2C	VI	136	ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○				○		
	191	11C	VI	593 594 621	ナデ	ナデ	赤茶褐色	暗茶褐色	○	○				○		
	192	12C	VI	574	ナデ	ナデ	赤茶褐色	暗茶褐色	○	○				○		
	193	11C	VI	579 585 592 614	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○		
	194	5C	VI	482 485	ナデ	ナデ	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	○	○			○	○		
	195	3C	VI	223	ナデ	ナデ	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	○	○				○		
	196	5C	VI	487	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○			○	○		
	197	3C	VI	440	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○				○		



第35図　第２地点の石器(1)

2　石器

打製石鏃・ピエス・エスキーユ・スクレイパー・打製石斧・礫器・磨石・石皿が出土している。

1）打製石鏃（第35図S49～S56）

8点の打製石鏃が出土している。形態的には平基と凹基に大別でき，小型のものと大型のもの，鍬先形のもの，正三角形のもの，長身鏃のものと多様である。S49は5角形をしているが，基部が折れているため，全形は不明である。S50は正三角形に近く整った形をしている。S51は先端部が丸みをおび鍬形鏃に近い。S52は片脚が折れている。S53は正三角形を呈し，浅いえぐりのもので，先端部を欠いている。S54とS55は両脚を欠いているが，えぐりを有するものである。S56は長さ3.4㎝と長身のもので，えぐりも丸く，両脚とも方形を呈している。ていねいな作りで華美となる。石材は黒曜石・安山岩・チャート・粘板岩があるが，第1地点はチャートが70%近くを占めているのに対し，第2地点では黒曜石が50%を占める。

2）ピエス・エスキーユ（第35図S57・S58）

ともに分厚い作りを呈している。天井部は平坦とし，S57は円形，S58は船底形を呈している。刃部に使用痕がみられる。石材はともに黒曜石である。

3）加工痕のある剥片（第35図S59）

分厚い剥片の周辺に細かい加工が部分的にみられるが，下部分が欠けているため全体形は不明である。

4）スクレイパー（第35図S60・第36図S61）

小型のものと大型のものとある。S60は黒曜石製の小型品で，欠損した破片である。刃部は両側からていねいに打ち欠いた痕跡がみられる。

S61は砂岩の縦剥ぎ剥片の長側辺に加工したもので，分厚い作りである。両面とも一部に自然面が残っており，刃部のみに細かい剥離がみられる。

5）礫器（第36図S62～S64）

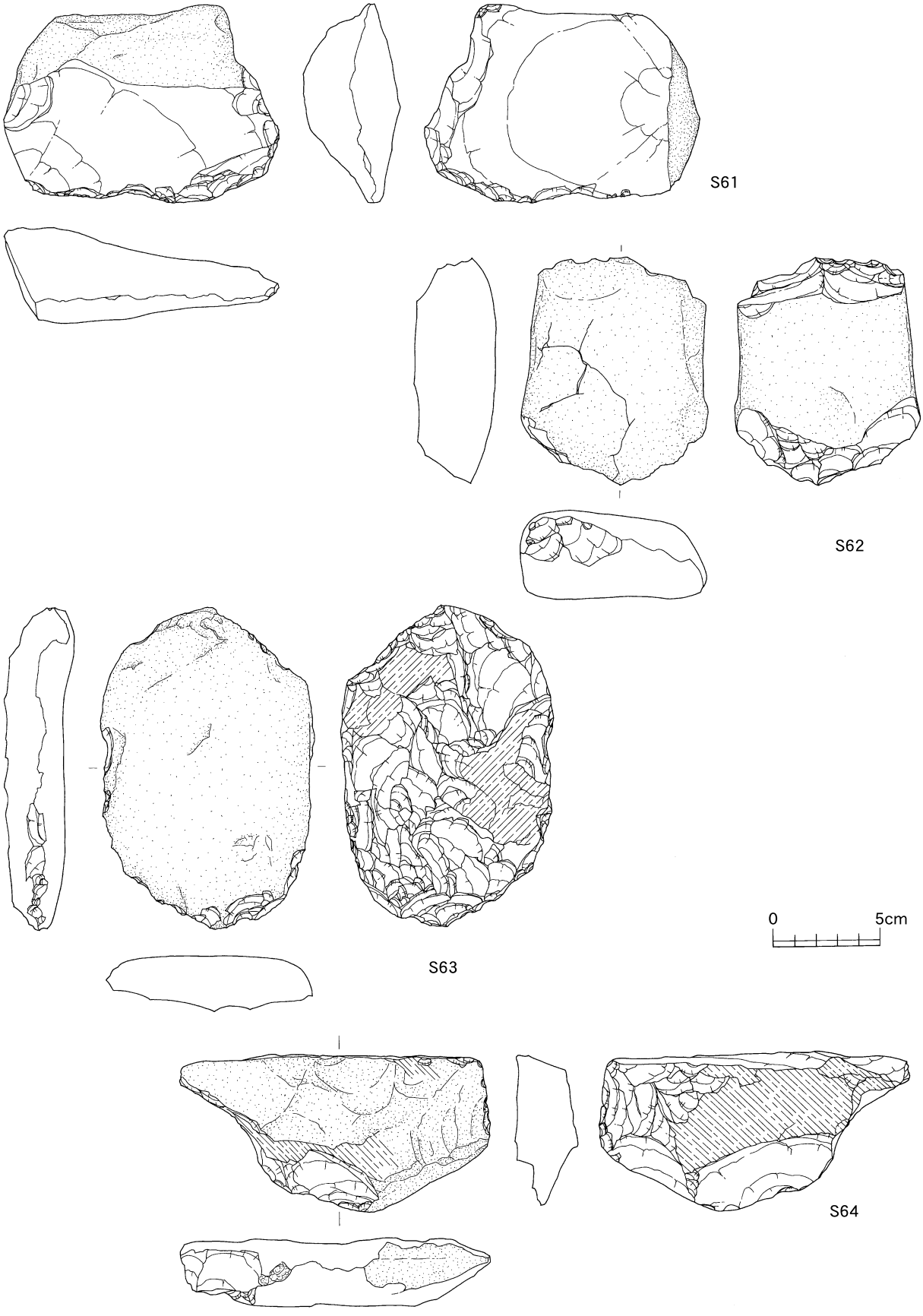
3点出土している。S62は砂岩製で，上下両短側辺を片面から打ち欠いて片刃の刃部としている。両面とも両端以外は自然面を広く残している。S63とS64は安山岩製である。S63は片面に自然面を残す剥片を用いて，短側辺を両面から打ち欠いて刃部とし，長側辺も周辺には粗い加工をしている。S64は天井部が平坦な横長の剥片を利用しているが，刃部調整は粗く，顕著な刃部は見られない。

6）磨石（第37図S65・S66）

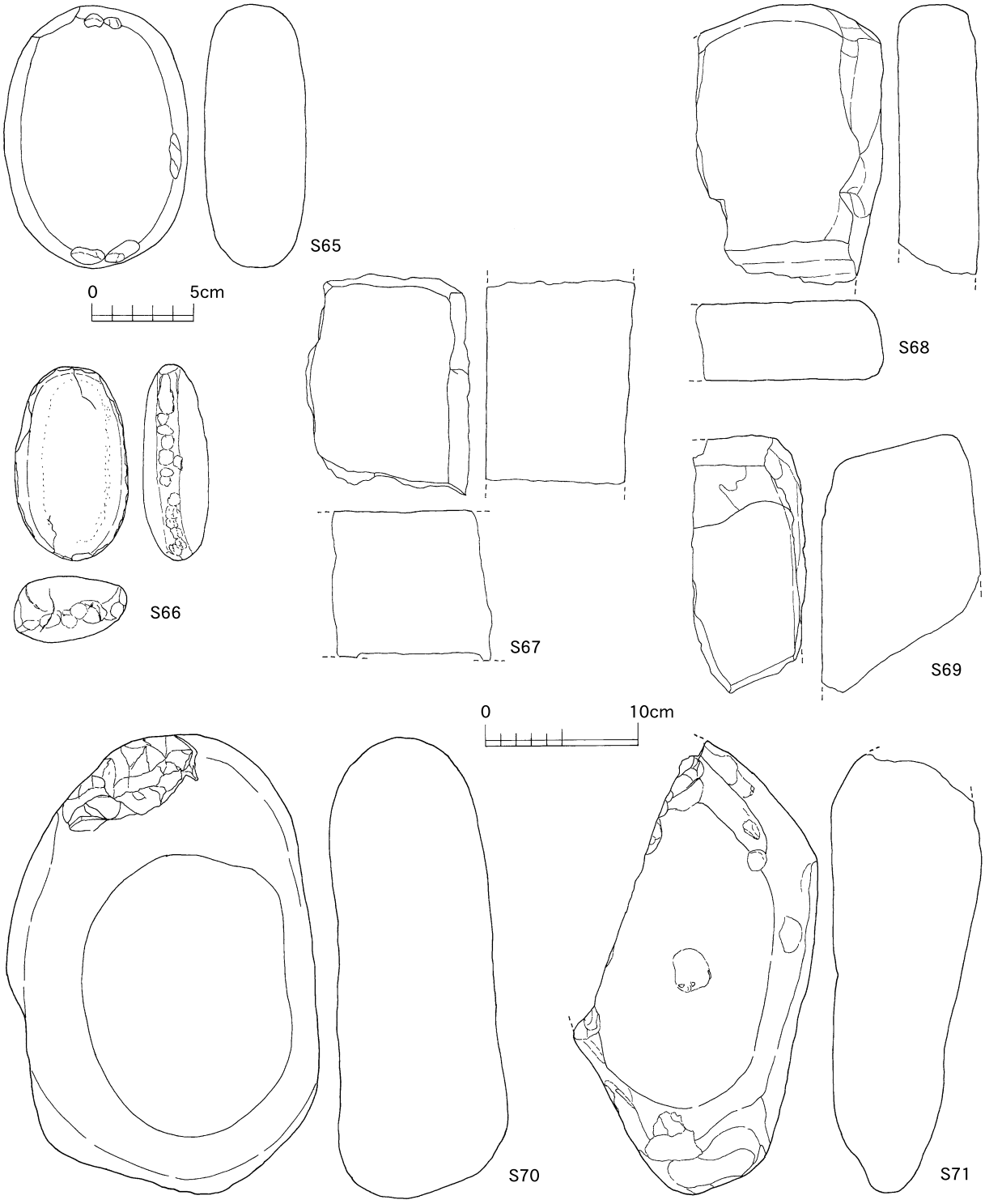
砂岩製のものが2点出土している。S65は楕円形をしており，両面ともツルツルしている。側面も良く使用しており，全面に磨痕跡がみられる。S66も楕円形をしているが，やや細長い。表面にはヒビが目立ち，側面の磨痕跡は全面にみられる。短側辺には敲打痕が目立ち，敲石としても良く使われている。

7）石皿（第37図S67～S71）

安山岩製のもの（S67～S69・S71）と花崗岩製のもの（S70）とがある。S67は周辺が欠損した破片で，厚さは6.5㎝と厚い。両面を良く使用してツルツルしており，ややくぼんでいる。片面は大きく剥脱している。S68・S69も両面を使用しており，S68は扁平であるが，S69は厚い。ともに礫の端部である。S70は平面が30㎝×20㎝の楕円形をした厚い礫で，片面のみを使用している。



第36図　第２地点の石器(2)　スクレイパー・礫器



第37図　第２地点の石器(3)　磨石・石皿

第８表　第２地点の石器観察表

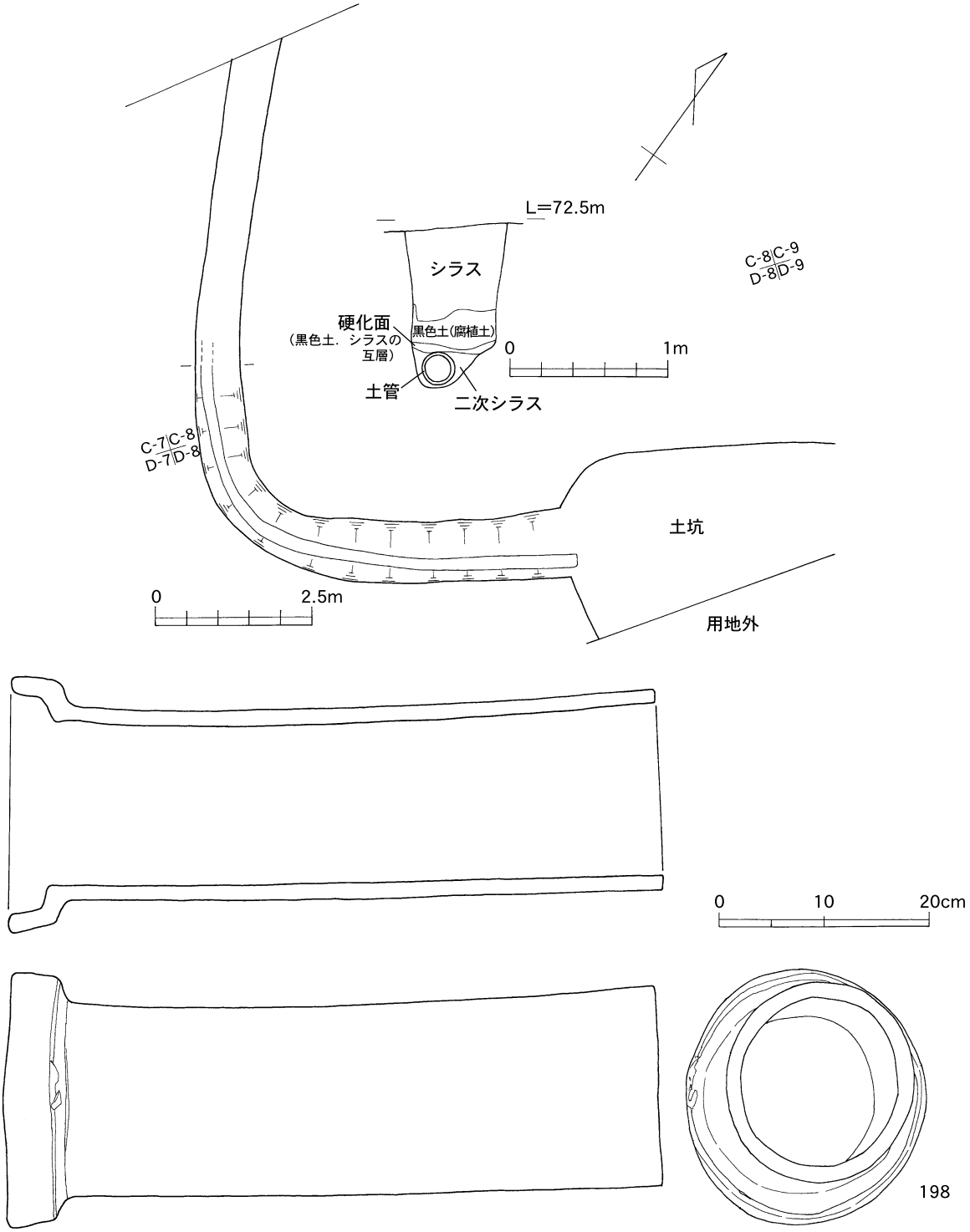
番	器　種	出土区	層	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	備　考
49	石　鏃	７Ｄ	Ⅵ	黒曜石	(1.6)	1.0	0.3	0.42	
50	石　鏃	２Ｄ	Ⅵ	粘板岩	2.1	1.7	0.3	0.80	
51	石　鏃	７Ｄ	Ⅵ	安山岩	1.3	1.4	0.4	0.48	
52	石　鏃	７Ｄ	Ⅵ	黒曜石	1.8	(1.2)	0.4	0.56	
53	石　鏃	７Ｄ	Ⅵ	黒曜石	(1.8)	1.8	0.4	1.21	
54	石　鏃	７Ｄ	Ⅵ	黒曜石	(1.7)	(1.1)	0.5	0.73	
55	石　鏃	７Ｄ	Ⅵ	安山岩	(1.2)	(1.2)	0.4	0.48	
56	石　鏃	２Ｄ	Ⅵ	チャート	3.4	1.8	0.5	2.22	
57	ピエス・エスキーユ	９Ｄ	Ⅵ	黒曜石	2.0	2.2	1.3	5.93	
58	ピエス・エスキーユ	８Ｃ	Ⅶ	黒曜石	1.5	2.5	1.4	5.00	
59	加工痕のある剥片	７Ｄ	Ⅵ	安山岩	1.9	1.6	0.5	1.72	
60	スクレイパー	４Ｃ	Ⅵ	黒曜石	1.9	1.8	0.7	1.60	
61	スクレイパー	７Ｃ	Ⅵ	砂　岩	9.3	11.8	4.5	459	
62	礫　器	８Ｄ	Ⅵ	砂　岩	10.5	8.7	4.2	557	
63	礫　器	７Ｃ	Ⅶ	安山岩	15.0	10.0	3.3	535	
64	礫　器	16Ｃ	Ⅵ	安山岩	14.5	7.3	3.2	392	
65	磨　石	表採		砂　岩	11.4	8.1	4.4	654	
66	敲石・磨石	８Ｄ	Ⅵ	砂　岩	8.5	5.0	2.9	165	
67	石　皿	19Ｂ	Ⅵ	安山岩	9.6	7.2	6.5	800	
68	石　皿	５Ｄ	Ⅵ	安山岩	18.2	12.2	5.2	2100	
69	石　皿	９Ｄ	Ⅵ	安山岩	16.2	7.5	10.4	2000	
70	石　皿	２Ｄ	Ⅵ	花崗岩	30.0	20.4	11.6	10500	
71	石　皿	表採		安山岩	29.7	16.0	9.8	5700	

第３章　近代

第２地点でも１Ｄ区や４Ｃ区・７～９Ｄ区などで爆弾破裂跡がみられ，この付近ではかなりの密度で航空機からの爆撃を受けている様子がうかがえる。

８Ｃ区・８Ｄ区・９Ｄ区にかけては幅0.8～１ｍ，深さ１ｍの深い溝状の遺構がみられる。この遺構は２段掘りになっており，70㎝の深さまでは幅60㎝で掘っているが，その下はさらに20～40㎝幅で１ｍの深さに掘り下げその中に土管が埋設されている。遺構は谷のほうから東側へ延びており，端近くで，直角に近く曲がり，大きな土坑に注ぎ込んでいる。埋土は上の方に厚くシラスがあり，その下に黒色をした腐植土がある。土管のまわりは二次シラスが埋められ，その上は黒色土とシラスの互層となり硬化面となっている。このことから，この施設は土坑に貯めた水を，下水の用途をもつ土管を通じて土手下に流し込み，その上は通路として用いていた可能性がある。

土管は長さ61㎝，直径19㎝の陶器で，片方の端は直径24.5㎝と広がっている。硬質に焼けているため，ひずんだ形をしている。管の中にタガ痕を残すものと，ツルツルしているものの２種がある。土管と土管のつなぎにはコンクリートを用いているが，細かい石を多く用い，セメント部分が少ない。



第38図　近代の溝状遺構と土管（第２地点）

Ⅵ　ま　と　め

第１章　縄文時代早期の土器

当遺跡からは，南九州貝殻文系土器を中心とする土器群の出土が目立った。既存の土器型式及び研究の現状を踏まえながらこれらをまとめてみたい。

石坂式土器に位置づけられる資料は，第１地点17～76，第２地点154～166である。これらは，口縁部の特徴から，外反するものから直行・瘤状突起が付くものへと変遷するとされている（前迫2003）。第１地点の18は，口縁部が外反し口唇部は丸みを呈して米粒状のキザミ目を施し，胴部に丁寧な貝殻綾杉条痕を施文することから，鹿児島市加栗山遺跡出土の１類に極めて類似し，石坂式土器の古い段階の特徴を有している。だが，大半の資料は口縁部が直行し瘤状突起が付く点などから新しい段階のものが多い。特に第１地点の36は，口縁部から底部に至るまでの器形・文様がわかる良好な資料である。加えて，胴部上半に見られるススの付着と被熱による器面の赤化現象は，当時の土器による煮炊き行為の結果と思われ貴重な資料となった。南九州貝殻文系土器に見られる土器使用痕については，阿部芳郎氏によって紹介されているが（阿部　2003），阿部氏が提示したフミカキ遺跡の資料の状態と当遺跡の資料は類似した痕跡を残している。南九州において，土器使用痕の観察及び研究はあまり定着しておらず，今後はこのような面にも留意して報告を行う必要がある。

また，当遺跡からは瘤状突起の付く資料がまとまって出土している。ここ数年では，瀬戸頭Ｂ遺跡や桐木耳取遺跡などでまとまって出土し報告がなされている。

下剥峯式土器に位置づけられる資料は，第１地点77～103，第２地点167～178である。現状として，石坂式土器からの流れが想定されている。当遺跡の資料についても，器形や文様の特徴からこれを追認出来るようであるが，次に述べる辻タイプとの分類は難しい。辻タイプに位置づけられる資料は，第１地点104～113，第２地点179・180である。しかし，辻タイプの施文の特徴は，刺突文と沈線文とを組み合わせて施文されており，小破片では両者の区別は困難な場合がある。なお，石坂式土器からの流れを汲む瘤状突起についても，石坂式土器のものが口唇部と一体感があるものが多いことに対して下剥峯式土器の場合は，口縁部外面と一体感のあるものが認められた。下剥峯式土器の瘤状突起は，その貼付個数の多様化なども認められていることから，その流れの中に当遺跡の資料も位置づけられるものと思われる。

桑ノ丸式土器に位置づけられる資料は，第１地点114～117，第２地点181～185である。口縁部の施文を胴部と違えることで文様帯を意識しているものがある。

これら南九州貝殻文系土器以外の土器群としては，中原式土器がある。第１地点119・121がこれに該当する。押型文土器も少数ながら出土している。第１地点124～127・第２地点186～188が該当する。第１地点の押型文土器は，小粒の押型を横位に無文部を有しながら施文し，底部は出土していないが，胴部下半の状態から尖底あるいはそれに近い形状を呈するものと思われる。南九州で出土する押型文土器の多くが平底を呈する現状から見ると異質な感じもする。この特徴を大分編年に当てはめると，川原田式土器に該当するが，南九州の押型文土器をそのまま大分編年に組み込むことは地理的にも離れており危険な作業である。南九州独自に編年作業を進め，やがて近隣資料との

整合を図っていく作業が必要となろう。ちなみに，この資料に類似するものとしては霧島市上野原遺跡10地点でも出土しており，一定の広がりが想定される。

塞ノ神式土器に位置づけられる資料は，第１地点128～149が該当する。

塞ノ神式土器の壺形土器と思われる資料も２点出土している。第１地点の148・149がこれに該当する。なお，無文土器もわずかながら出土している。

これらの資料は，縄文時代早期に位置づけられ，特に石坂式土器を中心とした南九州貝殻文系土器の様相がわかる良好なものとして位置付けできる。また，帯状施文の押型文土器も出土しており，南九州における押型文土器の展開を考える上で今後重要な資料となるであろう。

第２章　鹿屋の戦跡遺構

数年前，通行中の車が突然陥没した道の中に落ち込み，車は依然として発見されていないという奇異な事件が鹿屋で発生した。鹿児島県内には終戦前19か所に飛行場が造られ，そこから特攻隊という死を覚悟した人の乗った飛行機が飛び立った。そのこともあり空襲も多かった。また，本土最南端ということから米軍の吹上浜あるいは志布志湾上陸も予想され，防空壕の数も全国の40%以上という多さである。戦跡遺構の数は沖縄と同じ位多いはずである。そうした地でありながら，戦跡考古学の研究は遅れていた。

この研究を本格的に始めたのは前迫亮一氏である。前迫氏の集成によると平成15年までに30か所近くの遺跡で第２次世界大戦関係の資料が発見されている。実際にはそれまでに発掘されても報告されていないものも多いだろうから，この数倍の遺跡で戦跡関係の資料は出ているものと思われる。

前迫氏の資料によると，鹿屋では西原掩体壕跡（前畑遺跡・中原山野遺跡），打馬平原遺跡，根木原遺跡でこの時期の資料が出ている。西原掩体壕跡は当県において本格的に初めて調査された戦跡遺跡で，戦闘機を格納する掩体壕や誘導路・竪穴遺構などが発見されている。打馬平原遺跡では防空壕通気口が発見され，根木原遺跡では薬莢が出土している。

当遺跡で発見されているのは両地点での爆弾破裂跡と，第２地点の土坑及び溝状遺構である。破裂跡はそれぞれ直径が５mほど，深さが２～３mほどあり，中には鉄片や金属片が多量に含まれている。それらはバラバラになっており，そのすさまじさがうかがえる。土坑と溝状遺構は水ためと思われる土坑とそれにたまった水の排水路と思われるが，排水は土管を通じて谷に流されている。土管には２種類あり，そのつなぎはコンクリートを用いているが，戦時下とあって砂を多くし，セメントの量を節約している。

今後，こうした資料をもとにして戦時中の実態を明らかにしていく必要があろう。

引用・参考文献

阿部芳郎　2003　「南九州における縄文早期筒形土器の技術―いわゆる円筒形・角筒形土器の製作技術と機能―」『利根川』24・25号　利根川同人

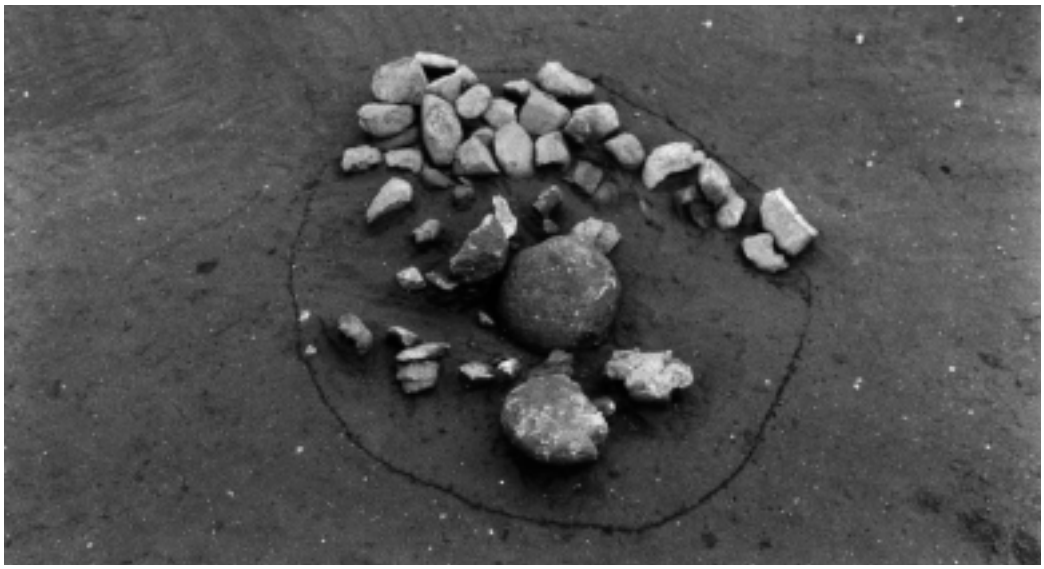
前迫亮一　2003　「石坂式土器再考」『縄文の森から』創刊号　鹿児島県立埋蔵文化財センター

前迫亮一　2003　「発掘された鹿児島の戦争関連資料について―幕末からアジア太平洋戦争終結頃まで―」『鹿児島考古』第37号　鹿児島県考古学会

図　　版

集石検出風景

配石遺構



集石遺構5号

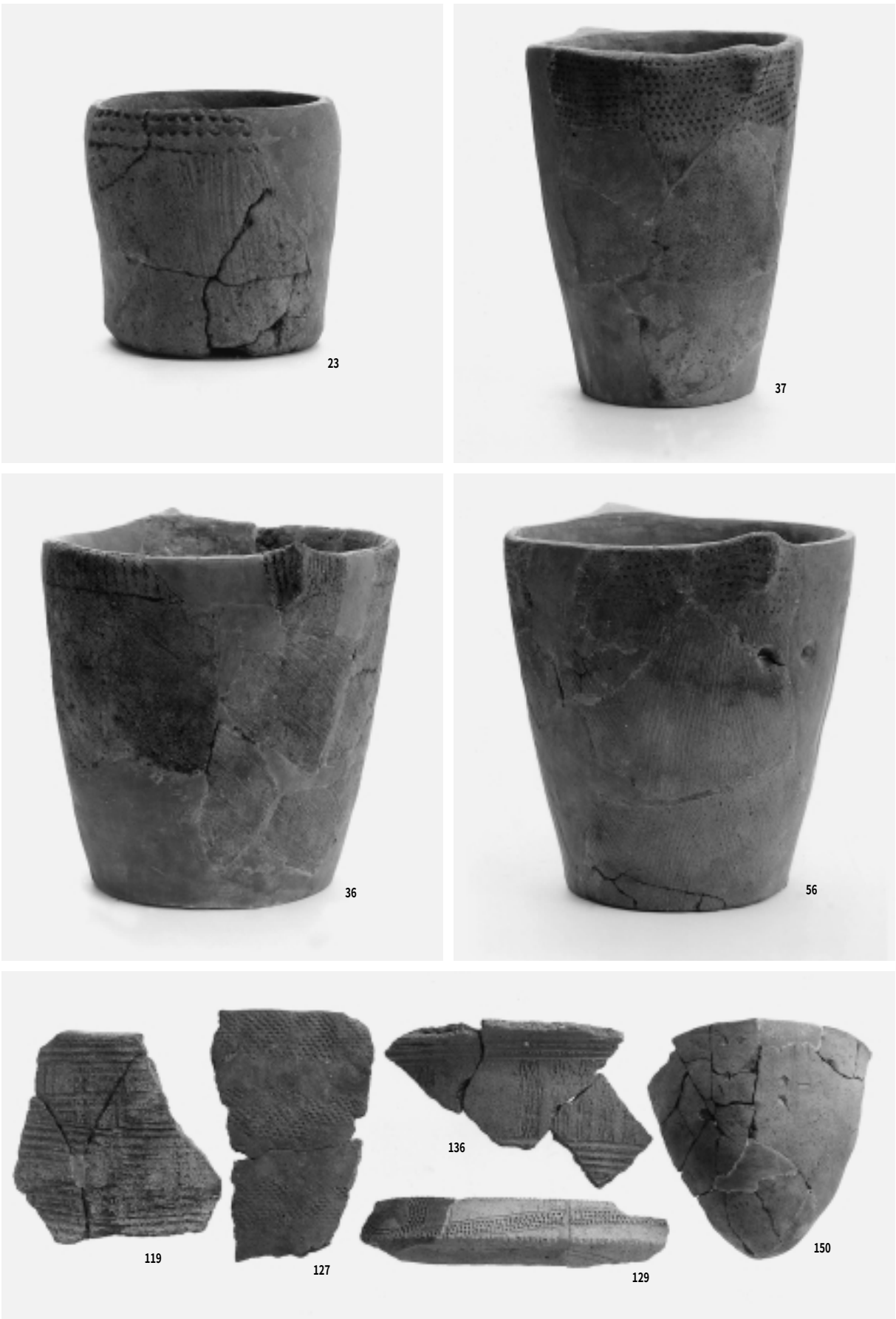
集石遺構8号

集石遺構9号

爆弾破裂跡 2 号

爆弾破裂跡 4 号

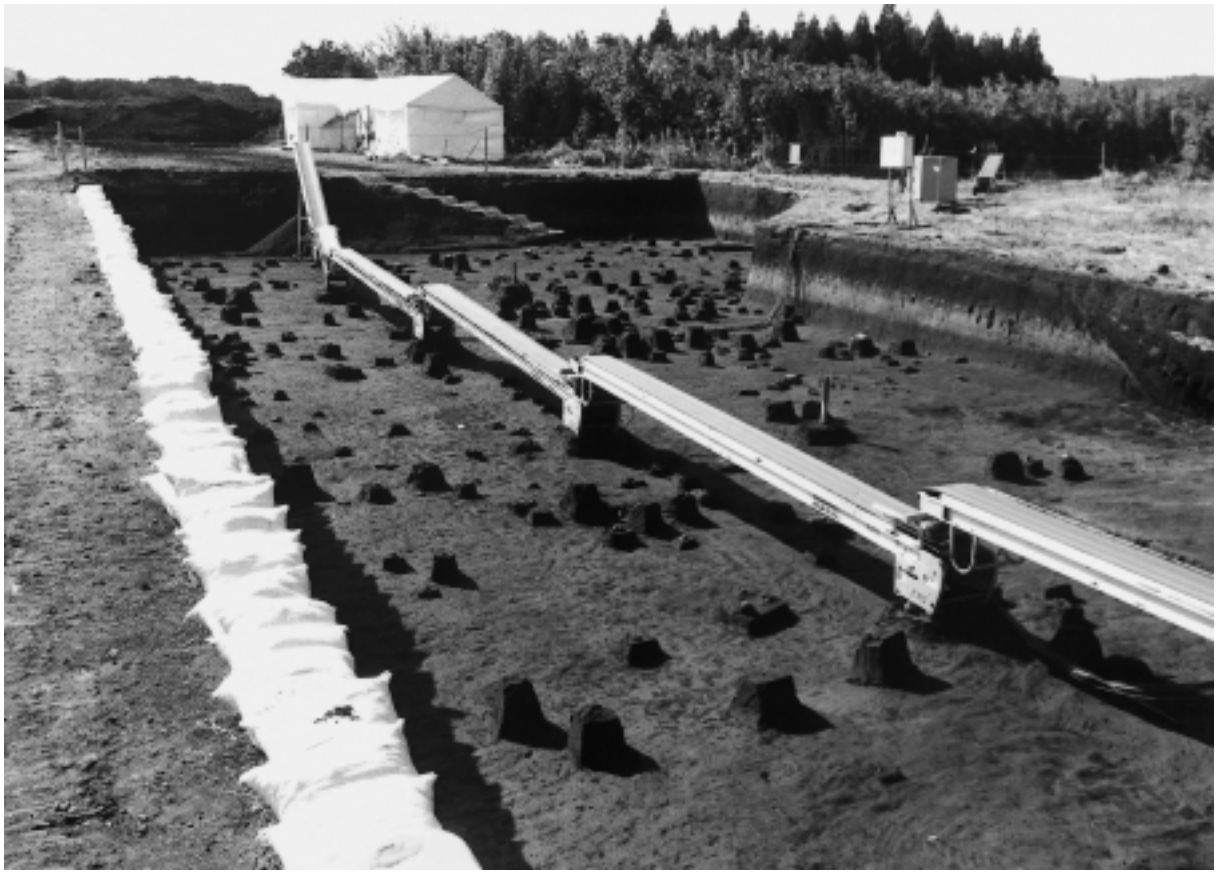
図版４　第１地点出土の縄文土器



図版5　第1地点出土の縄文土器

図版6　第2地点

調査着手前遺跡近景



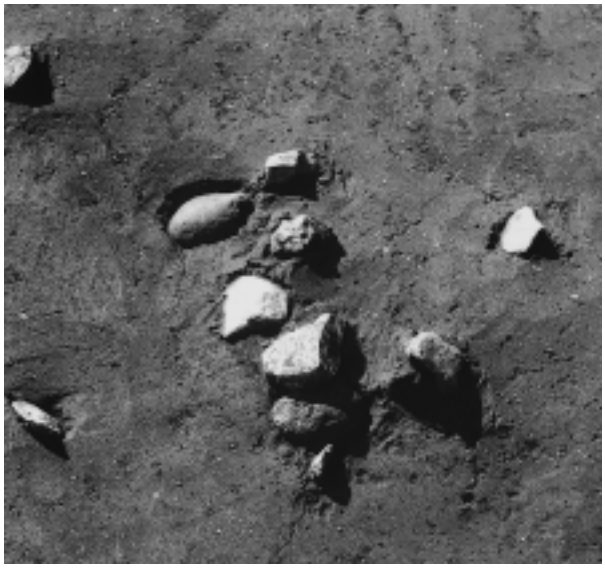
遺跡近景

集石遺構1号

集石遺構2号

集石遺構3号

集石遺構4号



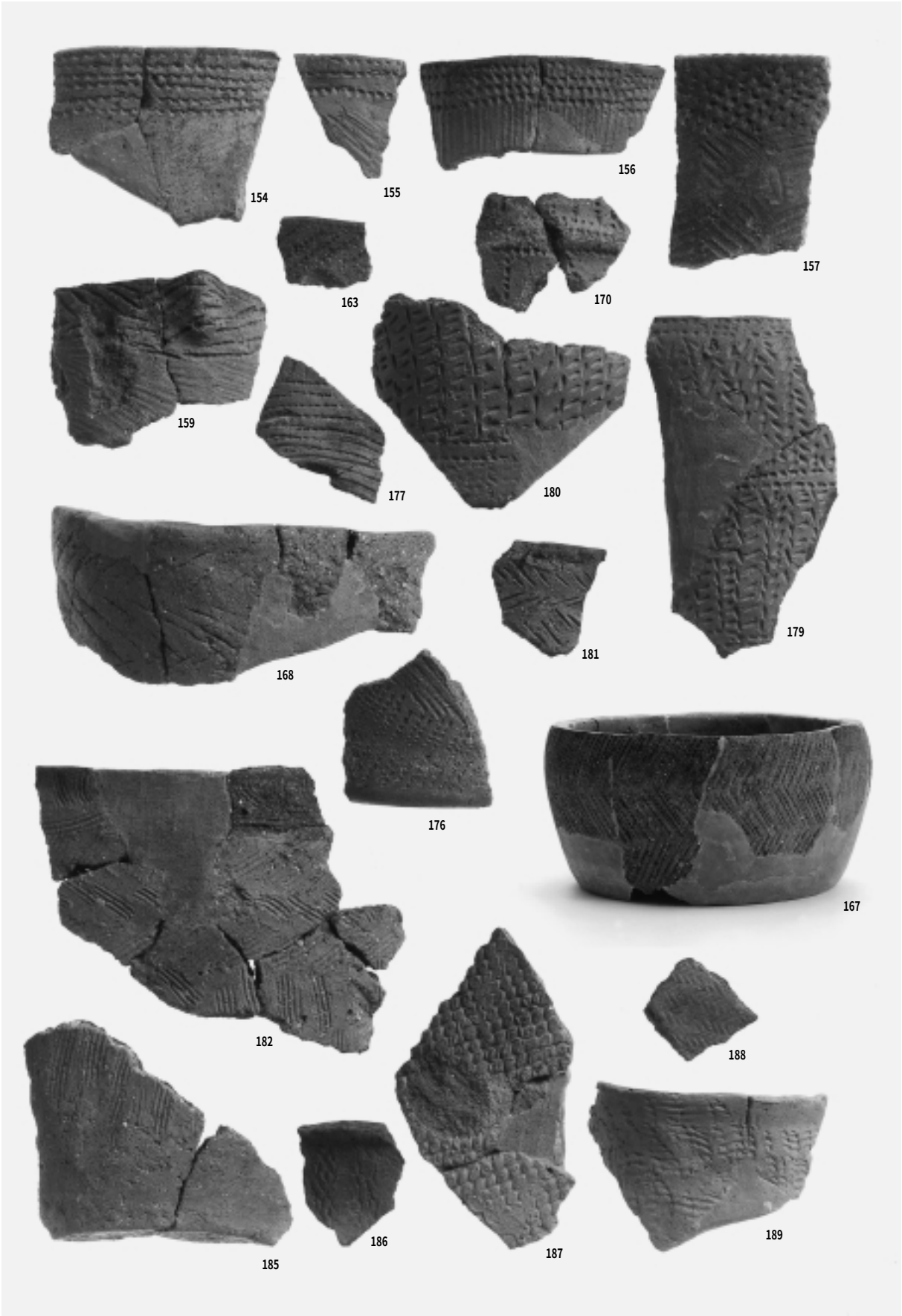
集石遺構5号

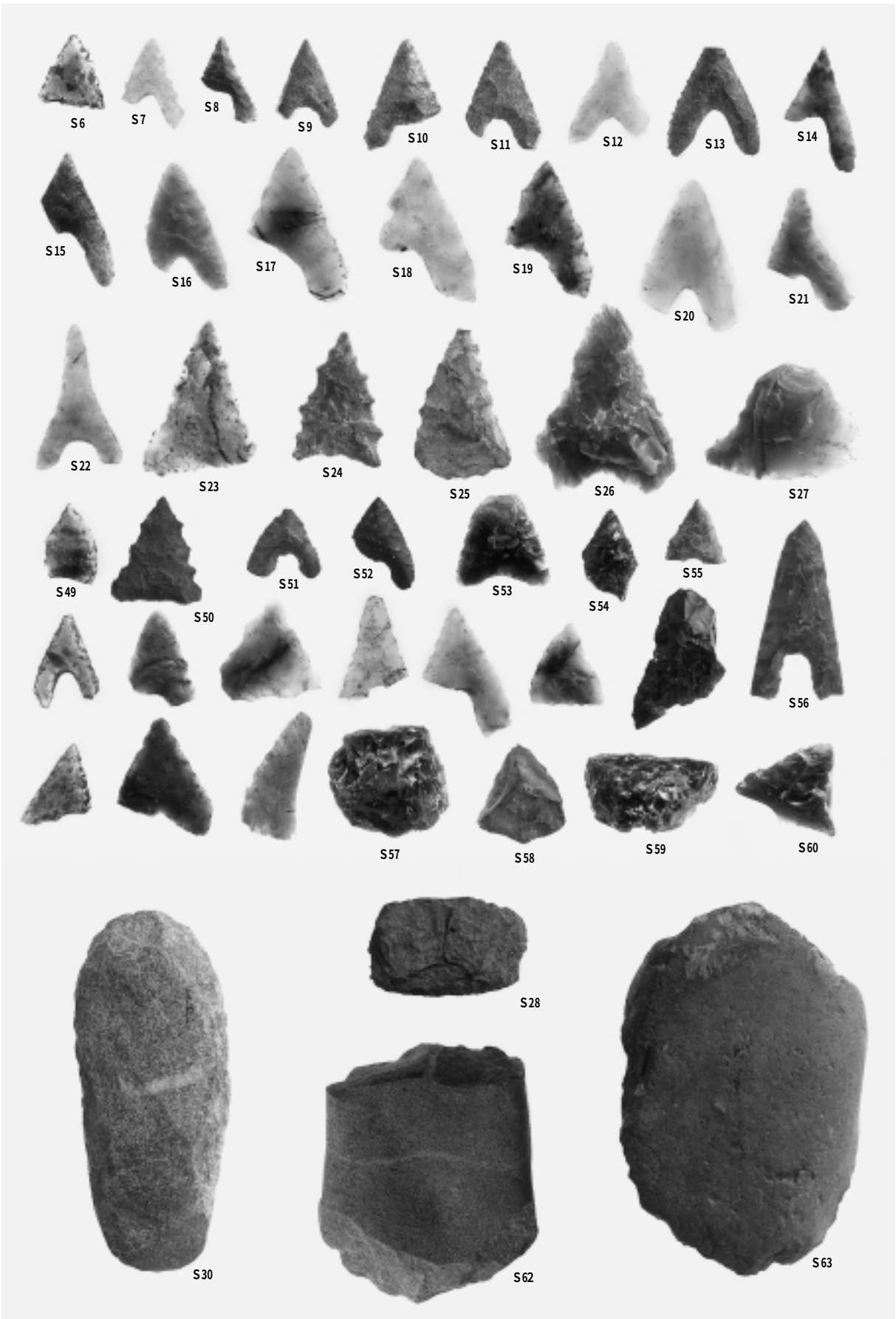
図版8　第2地点

爆弾破裂跡

溝状遺構

図版９　第２地点出土の縄文土器




S6
S7
S8
S9
S10
S11
S12
S13
S14
S15
S16
S17
S18
S19
S20
S21
S22
S23
S24
S25
S26
S27
S49
S50
S51
S52
S53
S54
S55
S56
S57
S58
S59
S60
S28
S30
S62
S63

あ と が き

第２次世界大戦が終結して60年がたった今，鹿屋航空基地のまわりもいろいろな問題があって，一部の人には大きな関心を持たれている。いっぽう，考古学でも近年「戦跡考古学」という分野が盛んになってきた。今では全国的に研究者が増え，鹿児島県でも研究発表会で研究成果が発表されたり，会誌に論文が掲載されたりと活発になってきた。鹿屋ではバイパス建設に伴う調査で遺構が検出されたり，現実には車が落ち込んで不明になったりと多くの戦跡が残っていることがはっきりしている。こうした地での発掘調査も大変で，この調査でも日誌抄にあるように爆弾の出土で２回にわたって警察署・自衛隊・鹿屋市の担当課の皆さんに御面倒をかけ処置をお願いした。

このような環境のなかで調査にあたった皆さんも不安の中での発掘だったかもしれない。60年の月日がたってもいまだに戦争の後遺症は消えていない。戦争を知らない人達にとって，そのこわさは表面的には感じ得ない。この報告書でそのこわさの一部でも感じとって欲しい。

最後に，この報告書作成までに協力いただいた方の名を記し感謝申しあげたい。（池畑）

〔発掘調査〕

荒川リツ子・有馬義光・有村幸次・安藤茂・池田勇・市坪ハル子・上野喜代子・榎本義文・大津フキ子・大山政男・岡崎善三・岡留正光・小川洋子・奥村タエ子・小薄政彦・柿内利夫・柿迫典子・柿元道子・川野喜興美・栗脇則子・栗脇文子・坂口俊雄・迫フミ子・迫ユカ・佐々木イツ子・寒川まき子・芝原ツミ子・島野タエ・下村シヅ子・新地美代子・鈴木しまよ・薗田昇・寺田多美恵・寺村ミチ子・冨松フキ・長野要・西みつ子・西川繁男・西ノ原ムツ・西馬庭規子・蜷川澄枝・根木原ナツ子・野元サト・野元初二・野元みづる・杤山スミ・原田英子・繁昌チエ子・東貞子・東中ムツ子・廣森操・間瀬サダ子・馬庭ユリ子・水戸省三・南橋トシ子・八木聡・八木道子・八代洋子・山下光子・山之内貢・山本ハル子・了徳寺信一

〔報告書作成〕

川路加代子・郷田千秋・芝昭子・志和池和恵・末廣みゆき・西川直美・福山霧子・山元宏子

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（100）

一般国道269号西原バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

野里小西遺跡

発行日　2006年３月

発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4318　霧島市国分上野原縄文の森２番１号
ＴＥＬ（0995）48－5811

印刷所　日進印刷株式会社
〒892－0846　鹿児島市加治屋町16番20号
ＴＥＬ（099）222－8291